尾白Ⅰ遺跡
尾白Ⅱ遺跡
家ノ脇Ⅱ遺跡３区
川平Ⅰ遺跡

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１

2003年３月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

尾白Ⅰ遺跡
尾白Ⅱ遺跡
家ノ脇Ⅱ遺跡3区
川平Ⅰ遺跡

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

2003年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所においては、『現代のおろち退治』といわれる斐伊川・神戸川両水系を一体とした治水計画の一環として、斐伊川の上流に尾原ダム、神戸川の上流に志津見ダムを建設し、下流域の洪水の調整及び水道用水の確保等を目的とした多目的ダム建設事業を進めています。

ダムの事業用地内の埋蔵文化財については、文化財保護の趣旨に則り関係機関と協議しながら必要な調査を行い、記録の保存につとめています。

尾原ダム建設事業においても、島根県教育委員会と協議をし、同教育委員会や木次町教育委員会、仁多町教育委員会の協力のもとに平成11年度より発掘調査を実施しているところです。

本報告書は、平成12～13年度に実施した「川平１遺跡」「尾白Ⅰ遺跡」「尾白Ⅱ遺跡」「家の脇Ⅱ遺跡３区」の調査結果をまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術及び教育のために広く利用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力頂きました島根県教育委員会並び関係者各位に謝意を表します。

平成15年３月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所長　田中　靖

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局の委託を受けて平成11年度から、尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成12年度と13年度に実施した、大原郡木次町の川平Ⅰ遺跡、尾白Ⅰ遺跡、尾白Ⅱ遺跡、仁多郡仁多町の家の脇Ⅱ遺跡3区での発掘調査の記録です。

このうち尾白Ⅱ遺跡では、これまであまり研究対象とならなかった近世以降の木炭生産の遺構を確認することができました。また、川平Ⅰ遺跡では押型文土器をはじめとする大量の縄文土器を発見ことができました。本報告書が地域の歴史を解明する資料となり、郷土の文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり木次町・仁多町住民の方々をはじめ、国土交通省中国地方整備局、木次町教育委員会、仁多町教育委員会をはじめ、関係の皆様から御協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

島根県教育委員会

教育長　広　沢　卓　嗣

例　言

1．本書は国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて、島根県教育委員会が平成12年度と平成13年度に実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本書で扱う遺跡は次の通りである。

島根県大原郡木次町長字根字尾白495外	尾白Ⅰ遺跡
島根県大原郡木次町長字根字尾白1447－2外	尾白Ⅱ遺跡
島根県仁多郡仁多町家ノ脇字家ノ脇1132－7外	家ノ脇Ⅱ遺跡3区
島根県大原郡木次町平田字法印305外	川平Ⅰ遺跡

3．調査組織は次の通りである。

調査主体　島根県教育委員会

（平成12年度）川平Ⅰ遺跡現地調査

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）
内田　融（同総務課長）松本岩雄（同調査課長）
今岡　宏（同総務係長）

調査員　西尾克己（同主幹）宮本正保（同文化財保護主事）足田　敦（同主事）
名越顕秀（同教諭兼主事）福場康芳（同教諭兼主事）曽田　徹（同調査補助員）
上山直志（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）
竹広文明（鳥根大学汽水域研究センター助手）
田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）
中村唯史（島根県環境生活部景観自然課主事）
蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）
林　正久（島根大学教育学部教授）
藤井哲哉（京都大学原子炉実験所助手）

（平成13年度）尾白Ⅰ遺跡、尾白Ⅱ遺跡、家ノ脇Ⅱ遺跡3区現地調査

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）
内田　融（同総務課長）川原和人（同調査第2課長）今岡　宏（同総務課総務係長）

調査員　西尾克己（同主幹）足田　敦（同主事）池田道子（同教諭兼主事）
古川和明（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）
杉原清一（島根県文化財保護指導員）
時枝克安（島根大学総合理工学部教授）

（平成14年度）尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡・家ノ脇Ⅱ遺跡3区・川平Ⅰ遺跡報告書作成

事務局　宍道正年（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）卜部吉博（同副所長）
内田　融（同総務課長）川原和人（同調査第2課長）坂本淑子（同総務課総務係長）

調査員　足田　敦（同主事）古川和明（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）

杉原清一（島根県文化財保護指導員）

時枝克安（島根大学総合理工学部教授）

4．発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ、発掘用具調達等）については、国土交通省中国地方整備局、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

平成12年度

〔現場担当〕持田明典（技術員）

〔事務担当〕藤井利恵（事務員）

平成13年度

〔現場担当〕持田明典（技術員）

〔事務担当〕藤井利恵（事務員）

5．調査に関連して自然科学分野の分析などを次の方々・機関に依頼した

地磁気年代測定：時枝克安（島根大学総合理工学部教授）

石材の現在産地分析：藁科哲男（京都大学原子炉実験所助手）

木炭の樹種同定：杉原清一（島根県文化財保護指導員）

^{14}C年代測定：財団法人九州環境管理協会

6．調査及び資料整理に際し、以下の方々から有益な御指導・御協力をいただいた。(50音順、敬称略)

穴澤義功（タタラ研究会委員）、甲元眞之（熊本大学教授）、坂本論司（木次町教育委員会）、高木広　一（人炭焼職人）、高木千秋（大炭焼職人）、郷昌熙（慶尚北道文化財研究院）、山田康弘（島根大学法文学部助教授）

7．挿図中北は、測量法による第３座標系Ｘ軸方向を指す。また、平面直角座標系ＸＹ座標は、日本測地系による。レベル高は海抜高を示す。

8．第１図、第２図は、建設省国土地理院発行のものを使用した。また第５図、第７図は国際航業株式会社が作成し、第37図、第38図は有限会社創五技研が作成した。

9．本書に掲載した写真の内、図版１、図版２左下、図版３上・左下は国際航業株式会社が撮影し、図版15は株式会社ワールドが撮影し、図版22、図版23は有限会社創五技研が撮影した。図版53～58は杉原清一に撮影していただいた。その他の写真は足田敦、名越郁秀、福場康芳、古川和明が撮影した。

10．本書に掲載した実測図は名越郁秀、福場康芳、池田道子、曽田　徹、上山直志、古川和明が作成し、浄書は鎗織美千恵、藤原須美子、内海紀子、佐々木孝子、岸美佐子、門脇卓子、広田和子（以上内業作業員）が行った。

11．本書の執筆は第８章、第９章を除き各調査員が分担して行い、文責を目次に記した。第８章については時枝克安氏に、第９章については藁科哲男氏に御執筆いただいた。

12．本書の第１表～第15表は古川和明が作成した。

13．本書の編集は各調査員の協力を得て、足田　敦が行った。

14．本書掲載の遺跡出土遺物、実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

本文目次

第1章　調査に至る経緯 …… (是田　敦) … 1

第2章　遺跡の位置と歴史的環境 …… (名越顕秀) … 4

第3章　尾白Ⅰ遺跡 …… (是田　敦) … 12
第1節　遺跡の概要 …… 12
第2節　調査の経過 …… 12
第3節　検出遺構 …… 12
第4節　出土遺物 …… 14
第5節　小結 …… 14

第4章　尾白Ⅱ遺跡 …… (是田　敦) … 19
第1節　遺跡の概要 …… 19
第2節　調査の経過 …… 19
第3節　検出遺構 …… 23
第4節　出土遺物 …… 36
第5節　小結 …… 36

第5章　家ノ脇Ⅱ遺跡3区 …… (是田　敦) … 43
第1節　遺跡の概要 …… 43
第2節　調査の経過 …… 43
第3節　検出遺構 …… 46
第4節　出土遺物 …… 49
第5節　小結 …… 49

第6章　川平Ⅰ遺跡 …… (是田　敦) … 56
第1節　遺跡の概要 …… 56
第2節　調査の経過 …… 59
第3節　1区の遺構と遺物 …… 65
第4節　2区の遺構と遺物 …… 82
第5節　遺構に伴わない遺物 …… 90
第6節　小結 …… 96

第7章　まとめ …… (是田　敦) … 125
第1節　川平1遺跡の土坑群 …… 125
第2節　縄文土器型式表 …… 126
第3節　川平Ⅰ遺跡出土石鏃 …… 128
第4節　炭窯について …… 128

第8章　尾白Ⅱ遺跡の炭窯の地磁気年代 …… (時枝克安) … 137

第9章　川平1遺跡出土石器・石製品の分析 …… (藁科哲男) … 146
第1節　川平Ⅰ遺跡出土サヌカイト製遺物および黒曜石製遺物の原材産地分析 …… 146
第2節　川平Ⅰ遺跡出土の結晶片岩様緑色岩製勾玉の産地分析 …… 168

挿図目次

第1図　本報告書掲載遺跡の位置
第2図　本報告書掲載遺跡の位置と周辺の遺跡
第3図　尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡と周辺の地形
第4図　尾白Ⅰ遺跡出土遺物実測図
第5図　尾白Ⅰ遺跡遺構配置図
第6図　尾白Ⅱ遺跡トレンチ配置図
第7図　尾白Ⅱ遺跡遺構配置図
第8図　尾白Ⅱ遺跡中央セクション土層図
第9図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ａ実測図
第10図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ａ煙道実測図
第11図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ｂ実測図
第12図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ02実測図
第13図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ02煙道実測図
第14図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03煙道実測図
第15図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03実測図
第16図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ04実測図
第17図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ05実測図
第18図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ05煙道実測図
第19図　尾白Ⅱ遺跡ＳＫ01実測図
第20図　尾白Ⅱ遺跡ＳＫ02実測図
第21図　尾白Ⅱ遺跡出土遺物実測図①
第22図　尾白Ⅱ遺跡出土遺物実測図②
第23図　尾白Ⅱ遺跡出土遺物実測図③
第24図　尾白Ⅱ遺跡出土遺物実測図④
第25図　家ノ脇Ⅱ遺跡と周辺の地形
第26図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区遺構配置図
第27図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区中央セクション土層図
第28図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区土器溜まり実測図
第29図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区ＳＸ01実測図
第30図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物実測図①
第31図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物実測図②
第32図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物実測図③
第33図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物実測図④
第34図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物実測図⑤
第35図　川平Ⅰ遺跡と周辺の地形
第36図　川平Ⅰ遺跡トレンチ配置図
第37図　川平Ⅰ遺跡１区遺構配置図
第38図　川平Ⅰ遺跡２区遺構配置図
第39図　川平Ⅰ遺跡トレンチ出土遺物実測図
第40図　川平Ⅰ遺跡１区東側セクション土層図
第41図　川平Ⅰ遺跡１区西側セクション土層図
第42図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ01実測図
第43図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ01出土遺物実測図
第44図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02・03完掘状況実測図
第45図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02実測図
第46図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02ピット実測図
第47図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02出土遺物実測図
第48図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ03実測図
第49図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ03出土遺物実測図
第50図　川平Ⅰ遺跡ＳＸ01実測図
第51図　川平Ⅰ遺跡ＳＸ01出土遺物実測図
第52図　川平Ⅰ遺跡落とし穴１実測図
第53図　川平Ⅰ遺跡落とし穴１出土遺物実測図
第54図　川平Ⅰ遺跡落とし穴２・ＳＫ07・ＳＫ08実測図
第55図　川平Ⅰ遺跡落とし穴２出土遺物実測図
第56図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ01実測図
第57図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ01出土遺物実測図
第58図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ02実測図
第59図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ02出土遺物実測図
第60図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ03実測図
第61図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ04出土遺物実測図
第62図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ04実測図
第63図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ05Ａ出土遺物実測図
第64図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ05実測図
第65図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ06実測図
第66図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ06出土遺物実測図
第67図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ09実測図
第68図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ09Ａ出土遺物実測図
第69図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ10実測図
第70図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ10出土遺物実測図
第71図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ11実測図
第72図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ12実測図
第73図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ13実測図
第74図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ14実測図
第75図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ15実測図
第76図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ16実測図
第77図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ15・ＳＫ16出土遺物実測図
第78図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ04実測図
第79図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ04・ＳＢ05出土遺物実測図
第80図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ05実測図
第81図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図①
第82図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図②
第83図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図③
第84図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図④
第85図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図⑤
第86図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図①「Ａ4区・Ａ5区」
第87図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図②「Ｂ4区」
第88図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図③「Ｂ5区」
第89図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図④「Ｂ5区」
第90図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑤「Ｂ6区・Ｃ6区」
第91図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑥「Ｃ4区・Ｃ5区」
第92図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑦「Ｃ5区」
第93図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑧「Ｊ5区・Ｋ5区他」
第94図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑨
　　「Ｊ5区・Ｋ5区他・石器」
第95図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑩「石錘：Ｂ5区」
第96図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑪「石錘：Ｃ5区」
第97図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑫
　　「石錘：Ｂ5区・Ｃ5区以外」
第98図　石錘の重量と個数
第99図　島根県の木炭産出量の推移
第100図　各種炭窯

図版目次

図版1　調査終了後の尾白Ⅰ遺跡（手前）と、
調査前の尾白Ⅱ遺跡（奥）

図版2　左上　尾白Ⅰ遺跡全景
右上　尾白Ⅰ遺跡ピット群
下　尾白Ⅰ遺跡出土遺物

図版3　上　尾白Ⅱ遺跡遠景
左下　尾白Ⅱ遺跡全景
右下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ｂ

図版4　左上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ａ
（排煙口の石有り）
右上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ａ
（排煙口の石無し）
左下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ａ奥壁
（排煙口の石有り）
右下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ａ奥壁
（排煙口の石無し）

図版5　上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01セクション（奥壁側）
中　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01セクション（右側）
下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01木炭出土状況

図版6　左上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ02
右上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ02奥壁
下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ02セクション

図版7　左上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03（隔壁有り）
右上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03（隔壁無し）
左下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03奥壁（隔壁有り）
右下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03奥壁（隔壁無し）

図版8　上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03表面を除去した奥壁
中　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03排煙口の石
下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03奥壁と炭化した骨組みの木

図版9　上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03セクション（奥壁側）
中　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03セクション（中央）
下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03セクション（焚口側）

図版10　上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ05
中　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ05奥壁
下　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ05セクション

図版11　上　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ04
中　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ04セクション
左下　尾白Ⅱ遺跡ＳＫ01
右下　尾白Ⅱ遺跡ＳＫ02

図版12　尾白Ⅱ遺跡出土遺物①

図版13　尾白Ⅱ遺跡出土遺物②

図版14　尾白Ⅱ遺跡出土遺物③

図版15　上　家ノ脇Ⅱ遺跡全景
下　家ノ脇Ⅱ遺跡３区全景

図版16　上　家ノ脇Ⅱ遺跡３区十器層まり
左下　家ノ脇Ⅱ遺跡３区ＳＸ01
右下　家ノ脇Ⅱ遺跡３Ｋ上器層まり除平

図版17　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物①

図版18　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物②

図版19　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物③

図版20　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物④

図版21　家ノ脇Ⅱ遺跡３Ｋ出土遺物⑤

図版22　川平Ⅰ遺跡全景
（右側には愛伊川が流れる）

図版23　上　川平Ⅰ遺跡１区全景
下　川平Ⅰ遺跡２区全景

図版24　上　川平Ⅰ遺跡ＳＢ01遺物出土状況
中　川平Ⅰ遺跡ＳＢ01完掘状況
下　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02・03完掘状況

図版25　上　川平Ⅰ遺跡ＳＢ03完掘状況
中　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02遺物出土状況
下　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02完掘状況

図版26　上　川平Ⅰ遺跡ＳＢ04完掘状況
中　川平Ⅰ遺跡ＳＢ05完掘状況
下　川平Ⅰ遺跡ＳＸ01遺物出土状況

図版27　上　川平Ⅰ遺跡落とし穴１・落とし穴２・
ＳＫ07・ＳＫ08完掘状況
中　川平Ⅰ遺跡ＳＫ01完掘状況
下　川平Ⅰ遺跡ＳＫ02完掘状況

図版28　上　川平Ⅰ遺跡ＳＫ03集石出土状況
中　川平Ⅰ遺跡ＳＫ04集石出土状況
下　川平Ⅰ遺跡ＳＫ05セクション

図版29　上　川平Ⅰ遺跡ＳＫ06集石出土状況
中　川平Ⅰ遺跡ＳＫ09集石出土状況
下　川平Ⅰ遺跡ＳＫ10集石出土状況

図版30　上　川平Ⅰ遺跡ＳＫ11集石出土状況
中　川平Ⅰ遺跡ＳＫ14集石出土状況
下　川平Ⅰ遺跡ＳＫ15完掘状況

図版31　上　川平Ⅰ遺跡土坑墓完掘状況
（南から屋垂斜面平坦部を撮影）
下　川平Ⅰ遺跡土坑墓完掘状況
（東から屋垂斜面平坦部を撮影）

図版32　川平Ⅰ遺跡出土遺物①
（トレンチ・ＳＢ02・ＳＢ03・ＳＸ01出土遺物）

図版33　川平Ⅰ遺跡出土遺物②
（ＳＸ01・土器溜まり・包含層出土遺物）

図版34　川平Ⅰ遺跡出土遺物③（包含層出土遺物）

図版35　上　川平Ⅰ遺跡出土遺物④
（トレンチ出土遺物）
下　（ＳＢ01出土遺物）

図版36　上　川平Ⅰ遺跡出土遺物⑤
（ＳＢ02・ＳＢ03・ＳＢ04出土遺物）
下　（ＳＢ04・ＳＢ05出土遺物）

図版37　上　川平Ⅰ遺跡出土遺物⑥
（ＳＸ01硬化面下出土遺物）
下　（落とし穴１・落とし穴２出土遺物）

図版38　上　川平Ⅰ遺跡出土遺物⑦
（ＳＫ01～04・ＳＫ06・ＳＫ09・ＳＫ10出土遺物）
下　（土器溜まり・包含層出土遺物）

図版39　上　川平Ⅰ遺跡出土遺物⑧
（土器溜まり出土遺物）
下　（土器溜まり出土遺物）

図版40　上　川平Ⅰ遺跡出土遺物⑨
（Ａ4・5Ｋ包含層出土遺物）
下　（Ａ4・5Ｋ包含層出土遺物）

図版41　上　川平Ⅰ遺跡出土遺物⑩
（Ｂ4区包含層出土遺物）
下　（Ｂ5区包含層出土遺物）

図版42 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物①
（B5①・②区包含層出土遺物）
下 （B5③区包含層出土遺物）
図版43 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物②
（B5④区包含層出土遺物）
下 （B5⑤区包含層出土遺物）
図版44 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物③
（B5⑥区包含層出土遺物）
下 （C5区包含層出土遺物）
図版45 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物④
（C5区包含層出土遺物）
下 （C4・5区包含層出土遺物）
図版46 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑤
（C4・5区包含層出土遺物）
下 （包含層出土遺物）
図版47 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑥（前耳式：山形文）
中 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑦（孔列土器：内面）
下 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑧（孔列土器：外面）
図版48 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑨（SB02出土石錘）
中 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑩
（SK15・SK16出土石器）
下 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑪
（包含層出土遺物石斧）
図版49 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑫（出土石鏃）
下 （出土石器・石器）
図版50 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑬（出土石鏃：1～34）
中 （出土石鏃：35～69）
下 （出土石鏃：70～103）
図版51 上 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑭
（出土石鏃：104～137）
中 （出土石鏃：138～171）
下 （出土石鏃：172～203）
図版52 左上 川平Ⅰ遺跡出土遺物⑮
（結晶片岩様緑色岩製勾玉）
右上 （局部磨製石器）
下 （出土礫石・敲石）
図版53 上 尾白Ⅱ遺跡縄紋鉢写真 縦断時16倍
試料1 ハゼノキ（SG01）
中 試料2 クスギ（SG01）
下 試料3 スギ（SG01）
図版54 上 試料4 クリ（SG02）
中 試料5 ミズナラ（SG02）
下 試料6 サカキ（SG02）
図版55 上 試料7 カシワ（SG02）
中 試料8 クリ（SG03）
下 試料9 クリ（SG03）
図版56 上 試料10 クリ（SG03）
中 試料11 クリ（SG03）
下 試料12 クヌギ（SG03）
図版57 上 試料13 アカマツ？（SG05）
中 試料14 クヌギ（SG05）
下 試料15 クヌギ（SG05）
図版58 上 試料16 アカマツ？（SG05）
中 試料17 クヌギ（SG05）
下 試料18 クヌギ（SG05）

表目次

第1表 尾原ダム関辺遺跡 一覧表
第2表 尾白Ⅰ遺跡遺構一覧表
第3表 尾白Ⅰ遺跡出土石器類観察表
第4表 尾白Ⅰ遺跡出土石器類観察表
第5表 尾白Ⅱ遺跡検出遺構一覧表
第6表 尾白Ⅱ遺跡出土石器類観察表
第7表 尾白Ⅱ遺跡出土石器類観察表
第8表 宗ノ脇Ⅱ遺跡3区出土土器類観察表
第9表 川平Ⅰ遺跡出土ソンイク・チップの量
第10表 川平Ⅰ遺跡出土土器類観察表
第11表 川平Ⅰ遺跡出土石器類観察表
第12表 川平Ⅰ遺跡出土礫石・敲石観察表
第13表 川平Ⅰ遺跡出土石錘観察表
第14表 奥出雲における縄文時代遺跡の土器型式一覧表
第15表 尾白Ⅱ遺跡出土木炭の樹種

第１章　調査に至る経緯

出雲地域の永年に渡る課題に斐伊川の治水がある。様々な治水対策が講じられてきたが、昭和47年の大洪水を契機に、昭和51年に「斐伊川水系上事実施基本計画」の改訂が行われ、①神戸川の上流におけるダムの建設、②中部の斐伊川放水路事業と斐伊川の改修、③下流の大橋川改修と中海・宍道湖の湖岸整備のいわゆる「治水３点セット」を基本とした治水対策が計画された。尾原ダムは、上流域での対策の一環として、斐伊川上流の大原郡木次町・仁多郡仁多町に建設を計画された多目的ダムである（神戸川上流では頓原町に志津見ダムの建設が計画された）。

尾原ダムは平成３年度から建設事業に着手され、平成５年12月に水源地域対策特別措置法のダム指定を受け、平成６年２月にダム建設の基本計画が公示され、平成７年11月には地元３団体と損失補填基準協定書の調印を取り交わして用地買収が着手された。

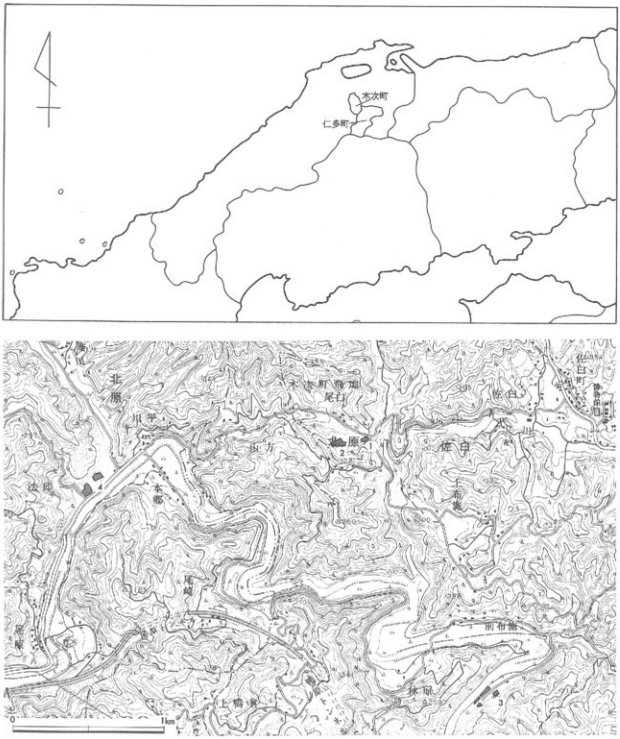
この計画に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成３年６月に建設省中国地方建設局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所（現国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、以下同じ）から島根県教育委員会に依頼された埋蔵文化財の分布調査に始まる。島根県教育委員会ではこの依頼を受けて、平成５年３月と平成６年３月の２回にわたり分布調査を実施し、合計81か所の遺跡及び要範囲確認調査地を確認した。

この調査結果をもとに、平成10年12月に建設省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所と島根県教育委員会は協議を行い、平成11年度からの範囲確認調査の実施を決定した。また、平成10年12月には島根県教育委員会、木次町教育委員会、仁多町教育委員会の三者で協議を行い、①再度の分布調査の実施、②現段階ではダム本体部分は県が調査し、残土捨て場部分は町対応すること、③調査状況や調査体制に応じて調整を行いながら調査をすることを確認した。これを受けて平成11年３月に島根県教育委員会・木次町教育委員会・仁多町教育委員会は共同で分布調査を行い、更に32か所の遺跡及び要範囲確認調査地を確認した。これにより、遺跡と要範囲確認調査地は合計113か所となった。

また、平成11年度に範囲確認調査の実施が決定した際、平成４年に交わされた建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、社団法人中国建設弘済会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚え書きに基づき、発掘調査を円滑に進めるため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事などの調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根支部に委託することとした。

平成11年度に、島根県教育委員会は29か所の遺跡及び要範囲確認調査地の範囲確認調査を実施した。そのうち11か所の遺跡及び要範囲確認調査地については全面発掘調査が必要であると確認された。この11か所の要全面発掘調査地の中には、本書収録の尾白Ⅰ遺跡、尾白Ⅱ遺跡、家の脇Ⅱ遺跡が含まれている。

平成12年度には、２か所の全面発掘調査と20か所の遺跡及び要範囲確認調査地の範囲確認調査が実施された。範囲確認調査では13か所について全面発掘調査が必要であると確認された。この13か所の要全面発掘調査地の中には、本書収録の川平１遺跡が含まれていた。工事の関係から、川平１遺跡については範囲確認調査に引き続いて全面発掘調査が同年５月から実施された。また、平成12年９月には工事中に遺跡（寺仏山横穴）が発見され、国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総



第１図　本報告書掲載遺跡の位置（S＝1／25,000）
１．尾白遺跡、２．尾白Ⅱ遺跡、３．家ノ脇Ⅱ遺跡、４．川平Ⅰ遺跡

合開発工事事務所から島根県教育委員会に再度の分布調査の依頼があった。これを受けて島根県教育委員会は、平成13年３月に再々度の分布調査を実施し、新たに２か所の要範囲確認調査地を確認した。

平成13年度には、尾白１遺跡、尾白Ⅱ遺跡、家ノ脇Ⅱ遺跡他３遺跡の全面発掘調査と３か所の範囲確認調査が実施された。範囲確認調査では１か所について全面発掘調査が必要であると確認された。

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

尾原ダムは、大原郡木次町平田にダムサイトを築いて斐伊川の本流をせき止めるものであり、貯水池の範囲は町境を越えて仁多郡仁多町三成に及ぶ。尾原ダムの建設事業はしばしば、「現代のオロチ退治」と称せられるが、付近は、『古事記』や『日本書紀』に記述のある、スサノオ（須佐之男命・素戔嗚尊）による八岐大蛇退治伝説の故地である。

出雲地方南部を雲南と称するが、大原・仁多両郡は、その雲南地方に属する。『出雲国風土記』（以下『風土記』と略す）によれば、大原郡は神原・屋代・屋裏・佐世・阿用・漆沼・来次・斐伊の８郷で構成され、『和名抄』はその８郷に大原郷を加える。一方仁多郡は、『風土記』は三処・布勢・三沢（三津とする説も有力）・横出の４郷を載せ、『和名抄』はその４郷に漆仁・阿位の２郷を加える。漆仁・阿位の２郷は、三沢郷から分立したものと推定されている。なお、ダムサイトの建設予定地である木次町平田は、昭和30年に木次町・日登村と合併する以前は仁多郡温泉村に属しており、旧温泉村の村域は『和名抄』の漆仁郷とほぼ等しい。従って、ダム湖に水没したり、道路などダム関連工事が行われる範囲は、『風土記』でいう仁多郡の４郷のうち、横出郷を除いた各郷に及ぶことになる。　仁多郡の郡名は、大穴持命が「此の国は大きくも非ず小くも非ず。…是は尓多志呆小国在り」と述べたことに由来すると、『風土記』は伝えている。小ちんまりとして水田耕作に適した肥沃な土地、といった意味である。以下では、周辺の遺跡の紹介等をしつつ、この地域の歴史的環境を概観してみたい。

旧石器時代

この時期の遺跡は、木次・仁多両町内およびその周辺地域では、現在のところ、確認されていない。島根県全体をみても旧石器時代の資料は多くはないが、宍道湖・中海の周辺地域では、玉湯町の正源寺遺跡や杉谷遺跡、松江市の下黒田遺跡など、この時代の遺跡が見つかりはじめている。雲南地域においても、今後の開発の進行等で、旧石器時代の遺跡が発見される可能性がある。

縄文時代

斐伊川中・上流域は、神戸川中・上流域と同様、縄文時代の遺跡の分布が密な地域である。近年この地域で、縄文時代の遺跡として注目されたのは、木次町の平田遺跡である。平田遺跡は、斐伊川とその支流の阿井川の合流地点に位置する。この遺跡では、縄文後期から晩期初頭の土器が大量に出土したが、岡山県の福田貝塚出土品と酷似した浅鉢や、鐘崎式土器など、山陽地方や北部九州の影響を強く感じさせるものが見られる。また大量の石鏃や石斧が剥片を伴って出土しており、この遺跡が石器の製作工房跡であったと考えられている。さらに、土器の出土状況等から、埋甕が行われた可能性が指摘され、土壙も８基検出されるなど、縄文時代の墓制の一端を知る上で貴重な遺跡である。埋甕が行われた遺跡として、周辺には、三刀屋町の宮田遺跡、仁多町の畚地遺跡、木次町の家の後Ⅱ遺跡が知られている。

また、畚地遺跡からは３体もの土偶が出土した。１遺跡から３体の土偶が出土するのは中・四国で岡山県津雲貝塚、同じく福田貝塚に次いで３例目である。さらに、仁多町の林原遺跡からは、範囲確認調査で、縄文後期を中心とする土器や磨製石器などの石器が出土したほか、縄文後期前葉から中葉のものと思われる土偶が１点確認されており、本調査の成果が期待されている。

平田遺跡から阿井川を遡り、町境を越えて仁多町に入ると、やがて下鴨倉遺跡にいたる。阿井川の河岸段丘上に存在するこの遺跡は、かつて「縄文のデパート」と評されたように、出土した土器は、縄文前期から晩期にいたる山陰・山陽の諸様式をほぼ網羅するばかりか、北部九州の影響も色濃い、貴重な資料となるものである。

この地域で最も古い遺跡は、斐伊川上流の横田町に所在する、押型文土器が出土した国竹遺跡や下大仙寺遺跡で、これらは縄文時代早期に遡る遺跡である。尾原ダム建設に伴う発掘調査では、本報告書掲載の川平Ⅰ遺跡からも縄文早期の押型文土器が出土している。川平Ⅰ遺跡からはその他、大量の石鏃が出土しており、この遺跡の大きな特徴となっている。

この他にも、木次町の家の後Ⅰ遺跡では縄文時代後期、垣ノ内遺跡では縄文時代中期と後期、槇ヶ坪遺跡からは縄文時代後・晩期の土器がそれぞれ出土している。特に、槇ヶ坪遺跡からは朱（第二水銀）塗りの耳栓が出土し注目されている。この他に木次町の家の後Ⅱ遺跡では石囲み炉を伴う縄文時代後期の竪穴住居が確認されている。

弥生時代

以前から、木次町では早稲田遺跡、本郷谷遺跡、仁多町では鹿谷遺跡、横田町では国竹遺跡、代山遺跡、横田高校グランド遺跡などが弥生時代の遺跡として知られてきた。しかし、縄文時代の遺跡に比べると数そのものが少なく、遺構が確認されたのも国竹遺跡のみであり、この地域では、わずかに、横田町の横田八幡宮に伝えられた銅剣（中細形銅剣C）、木次町日登から出土したといわれる銅鐸（外縁付鈕1式）が注目される程度であった。

しかし近年になって、この地域の弥生時代の様相を知る上で、貴重な資料を提供する遺跡が出現した。それは、縄文時代の項でも触れた、木次町の平田遺跡である。ここからは、円形に近い多角形を呈した径8.8m～9.0mの竪穴建物跡1棟が見つかった。建物内からは鍛冶炉が4基検出され、鉄鏃やその未製品、板状や棒状の鉄片、鞴、砥石などが出土した。このことから、この建物は、鉄素材を鍛錬し、鞴を用いて鉄器を製作した工房として使われたものと考えられる。これとほぼ同様の性格をもった建物群が、八束郡宍道町の上野Ⅱ遺跡で見つかったが、平田遺跡の鉄器工房跡は、上野Ⅱ遺跡のものに比べてやや新しく、弥生時代の末から古墳時代初頭のものと考えられている。

さらに、尾原ダム建設に伴う発掘調査では、木次町の垣ノ内遺跡から、弥生時代中期後半から後期末にかけての竪穴住居が16棟、掘立柱建物が数棟発見された。他に、仁多町の墓地遺跡でも竪穴住居が2棟、木次町の北原本郷遺跡では弥生時代中期から後期の竪穴住居が12棟確認されている。

古墳時代

斐伊川中流域には、副葬品に景初三年銘の三角縁神獣鏡を持っていたことで著名な大原郡加茂町神原の神原神社古墳をはじめ、木次町里方の斐伊中山古墳群、飯石郡三刀屋町給下の松木古墳群1号墳・3号墳など、名高い前期古墳が点在する。これらの古墳は、斐伊川の本流に、赤川、あるいは三刀屋川といった大きな支流が合流し、平地が遠望できる微高地や山丘上に立地するという特徴がある。

一方、中流から上流域では、従来、前期や中期の古墳はほとんど見当たらないとされてきたが、近年、この定説にも変化が生じた。まず、仁多町三成の須佐古墳群は15基から構成される古墳群で、前方後方墳1基を含み、一部に弥生時代の台状墓と思われるものも含む前期古墳群に属するものである。近い例として、斐伊中山古墳群を挙げることができる。また同じく仁多町三成の丸子山古

墳群は、円墳２基からなるが、副葬品等の状況は中期末頃の様相を呈しており、この地域の首長クラスの墳墓と推定されるものである。

後期になると斐伊川中・上流域の主要古墳は、多く、仁多町高田・郡村の付近に築かれるようになる。この付近は、後述のように『風土記』の時代に仁多郡の郡家が置かれていたところで、岩屋古墳、常楽寺古墳など、それに相応しい古墳が存在する。岩屋古墳は７世紀前半頃の円墳で、墳丘の規模は直径約15mと大きくはないが、全長約７mの仁多郡では群を抜いて大きい横穴式石室を持つ。常楽寺古墳は墳丘を欠き、また羨道部も欠いているものの、整った横穴式石室を持つ円墳である。この古墳の特徴は、何と言っても、円筒埴輪14以上、馬形埴輪１、男子人物埴輪３、女子人物埴輪２と、豊富な埴輪を持つことである。石室内部の調査がなされていないこともあって、被葬者の人物像は詳らかにはできないが、相当な勢力がここに存在していたことは確実であり、それならばその勢力は何に依拠したものなのかを分析していくことが今後の課題となるであろう。尾原ダム建設に伴う調査では仁多町の原田古墳から金銅装双龍環頭大刀他、多くの金銅製品や玉類が出土し注目されている。

横穴墓は、木次町で10群、仁多町では16群を数えることができる。その形態は、ほとんどが玄室の平面プランが縦長長方形、断面が三角形のテント形で妻入りであり、この形態は斐伊川中・上流域の奥出雲地方に広く分布するものである。副葬品もおおむね等質的であるが、木次町寺領の平ヶ廻横穴墓には金銅装刀子が副葬されていたのが注目される。また、尾原ダム建設に伴い調査が行われた木次町の下布施横穴墓群では、１号横穴墓から遺存状態の極めて良好な装飾大刀が出土した。その装飾は、柄に葛を密に巻き、柄頭には黒漆を塗った上に金箔・銀箔を貼ったもので、畿内で・括生産される一般の装飾大刀とは技術的系譜が異なるものとして注目される。

なお最後に、木次町日登に所在する原口古墳群は、６基のうち調査されたのは１号墳のみであるが、松江市友田遺跡の土壙墓や墳丘墓との共通点が指摘され、古墳群と呼ばれてはいるものの、弥生後期の墳丘墓の可能性が高いと指摘されていることを記しておきたい。

奈良・平安時代

『風土記』によれば、大原郡の郡家は斐伊郷、飯石郡の郡家は多爾郷、仁多郡の郡家は三処にそれぞれ置かれた。出雲国庁からは、現在の国道９号にあたる「止西の道」で「玉作の街」、そこからは「止南の道」をたどって現在の宍道町和名佐と大東町須賀の間で意宇郡との郡境を越え、やがて斐伊川のほとりに程近い大原郡家に至る。ここで道は「南西の道」と「東南の道」に分かれる。「南西の道」は、斐伊川を渡ると現在の国道54号とほぼ同じルートをたどって飯石郡家に至り、さらに備後国三次郡に通じていた。一方「東南の道」は、大原郡家から現在のＪＲ木次線に沿うようにして山間に分け入って、大東町下久野横の谷で、仁多郡との郡境を越えて郡家に至る。仁多郡家からは道は三方向に分かれ、一つは伯耆国に、残る二つはそれぞれ備後国に通じていた。また、仁多郡家と飯石郡家とを結ぶ「通道」も存在した。その道は、仁多町郡村から佐白を経由して木次町に入り、北原から舟屋を経て斐伊川を渡り、飯石郡に至っていたものと推定される。すなわちこの道は、まさに尾原ダムの予定地内を通過していたのである。なお、『風土記』には、「通道。飯石の郡の堺なる漆仁の川の辺に通ふ、二十八里。即ち川の辺に薬湯有り…」とあり、この道の半ばに温泉があることを紹介している。老若男女が昼夜を分かたず薬効を求め訪れたとされるこの温泉は、飯石郡吉田村と木次町の境にある湯村温泉である。

飯石郡家の所在地は現在の飯石郡掛合町郡のあたり、大原郡家は、現在のＪＲ木次駅の北方約500mの地点と推定され、また以前には大東町仁和寺のＪＲ幡屋駅付近にあったらしいが[1]、いずれも『風土記』の距離里程や地名からの推測であり、物的証拠はない。それに対して、仁多郡家には有力な推定地があり、それは仁多町郡村のカネツキ免遺跡付近である。カネツキ免遺跡からは須恵器や土師器をはじめ、多くの遺物が出土しているが、土器には墨書土器も含まれ、また円面硯・転用硯も見られる。付近には大領原や内裏原という字名があり、近隣の芝原遺跡からは「厨」と墨書する須恵器が出土している。これらのことから、カネツキ免遺跡は遺構こそ確認できていないものの、仁多郡家と関わりの深い遺跡と言える。また、木次町の家の上遺跡は、配石遺構から土馬、手づくね土器、土玉などが出土しており、7～8世紀の水辺の祭祀に関係する遺跡と考えられている。

尾原ダム建設に伴う調査では木次町の槇ヶ峠遺跡で平安時代半ばと推定される製鉄関連の遺構・遺物が確認された。これらは類例の少ない平安時代の鉄製産に関する資料として注目される。

『風土記』から寺院関係の記述を見ると、出雲国には「教昊寺」と10か所の「新造院」があるが、そのうち大原郡には新造院が三つ存在しており、寺院数では国庁のある意宇郡に次いでいた。木次町に関わるものは二つあり、一つは「郡家の正南一里なり。厳堂を建立つ。僧五躯あり。大領勝部臣蟲麻呂が造りし所なり」と記載されるもので、『風土記』で複数の僧の存在を記載するのは当寺だけである。現在のＪＲ木次駅付近に推定され、「塔の石」と呼ばれる礎石と考えられる石がある。もう一つの新造院は「郡家の東北一里なり。厳堂を建立つ。尼二躯あり。要伊郷の人、樋印支知麻呂が造る所なり」と記載されるものであり、『風土記』で尼寺とされるのは当寺だけである。その推定地からは、やはり礎石と思われる石が出土している。一方で仁多郡には、寺院に関する記述がない。しかし、遺跡としては仁多町高田に高田廃寺が存在している。高田寺は『風土記』にみえる仁多郡司大領鍛部臣の祖父が建立したと伝えられる奈良時代の寺院で、軒丸瓦等が出土している。中世に至るまで栄えたが、横田町の岩屋寺との対立や南北朝の騒乱の中で次第に衰えた。神社は、大原郡に官社が13社でその他の神社が16社、仁多郡には官社が２社でその他の神社が８社の記載がある。このうち、仁多郡三津郷（三沢郷）の三津社は、現在の仁多町三沢にある三沢神社で、阿遅須伎高日子命を祀るものである。三津郷の地名の謂れとして、『風土記』ではこのような由来を紹介する。すなわち、阿遅須伎高日子命は大神大穴持命の御子であるが、大人になっても泣いてばかりで言葉をしゃべることができなかった。そこで大神が夢見を祈願し、その結果御子が初めて発した言葉が「御津」であり、大神の「それはどこか」という問に、御子は答えてその地を案内した。そして、その時に御子が津の湧き水で沐浴したことに因んで、出雲国造が神吉詞を奏上するために朝廷に参向する際にはその水を浄めに用いるようになったという。この「御津」の位置は、完全に特定されるには至っていない。なお、木次町平田の家の上遺跡は、配石遺構から土馬・手づくね土器・土玉などが出土した７～８世紀の水辺の祭祀に関係する遺跡と考えられている。この遺跡は、三津郷（三沢郷）の範囲に含まれており、あるいは阿遅須伎高日子命の故事に何らかの関わりがあるのかも知れない。

鎌倉・室町時代

承久３年（1221年）、承久の乱の後は、大原郡内にも東国の御家人が進出してきた。中でも口伊郷の伊北氏、大東庄の上屋氏、大西庄の飯沼氏、宍本庄の中沢（牛尾）氏、佐世郷の佐世氏らである。また、尼子・毛利両氏の合戦期においては、この地が、尼子氏の本拠富田城の西方前哨にあた

ることもあって、激戦が展開された。従ってこの地域には、牛尾氏の三笠城・高平城（大東町）、佐世氏の佐世城（同町）、立原氏の近松城（加茂町）など、重要な城が集中していた。しかしながら、木次町内においては、有力な勢力が現れず、宇山氏の宇山城（日登城）、広田氏の霞龍山城などが見られ、尾原ダム建設予定地内では俗に御陵山と呼ばれている下布施山城跡が見られる程度である。むしろ、この時期の木次町内において特筆すべきは、来次市庭（木次市場）における商業活動である。戦国期に発展したこの市は、奥出雲で生産された鉄や、馬・牛などを、斐伊川の舟運によって杵築市場（大社町）まで輸送した。江戸時代初期には紙市が起こり、慶安２年（1649年）には松江藩唯一の紙座が設けられるなど、活況を呈したと伝えられる。

仁多郡では、仁農国の御家人の飯島氏が、承久の乱の戦功を賞されて、三沢郷に所領を獲得した。飯島氏が実際に三沢郷に移り住み、三沢氏を称して本格的な所領経営に乗り出したのは、鎌倉時代末期のことである。三沢氏は要害山に居城である三沢城を構えると、隣接する阿井郷・布勢郷・三所郷に支配領域を広げ、室町期には横田庄にも進出した。三沢城は14世紀初頭の築城とされ、主郭を中心に主として北側と東側の尾根筋に大小14段以上の郭をもつ山城で、西と南は絶壁状をなし、南の麓には阿井川が流れる。要害山の標高は418.5mと周囲の山々に比べて低いにも関わらず、四方の要衝をほとんど望める位置にある。三沢氏は、奥出雲の鉄の生産と流通を掌握し、出雲国内で最大の勢力を誇る国人へと成長を遂げた。大文12年（1543年）には尼子氏に征服されるが、それでもなお出雲国最大の国人領主として影響力を保持し続けた。三沢城は、永正６年（1509年）、横田庄内に藤ヶ瀬城が築かれるまで、三沢氏の本拠地であった。

江戸時代

『風土記』の仁多郡の条に「諸の縑より所出る鐵、堅くして、尤も雑の具を造るに堪ふ」、飯石郡の条に「飯石小川。源は郡家の正東一十二里なる佐久禮山より出で北に流れて三屋川に入る。鐵あり」と記されるなど、古来より、雲南地域では盛んに製鉄が行われてきた。大原郡の記事にはこのような記述はないが、事情は同様と思われる。しかし、雲南地域では現在のところ、古代にまで遡る可能性がある製鉄遺跡は発見されていない。12世紀後半と推定される木次町平田の上垣内たたら跡、13世紀後半の可能性が高い木次町北原の枯木ヶ谷炉遺跡などが、この地域で確認されているもっとも古い製鉄遺跡で、野だたら様式のものである。近世になると横田町の絲原氏・卜蔵氏、仁多町の櫻井氏、吉田村の田部氏など著名な鉄師が現れ、彼らによって半永久的な構造の高殿のたたらが営まれると産鉄量は飛躍的に増大する。これら鉄の生産は、砂鉄をとるため河川に砂を流出させる鉄穴流しによる川床の上昇を招き、斐伊川流域は度々大洪水に見舞われることになった。しかし同時に、鉄の生産はこの地域に富をもたらすものでもあった。先述の来次市庭は、奥出雲の「たたら」で生産された鉄の集散地であった。江戸時代の末期、奥出雲産の鉄を材料として生産された木次千歯は、脱穀能力も高く、木次商人の行商によって全国市場に確固たる地位を占めていた。

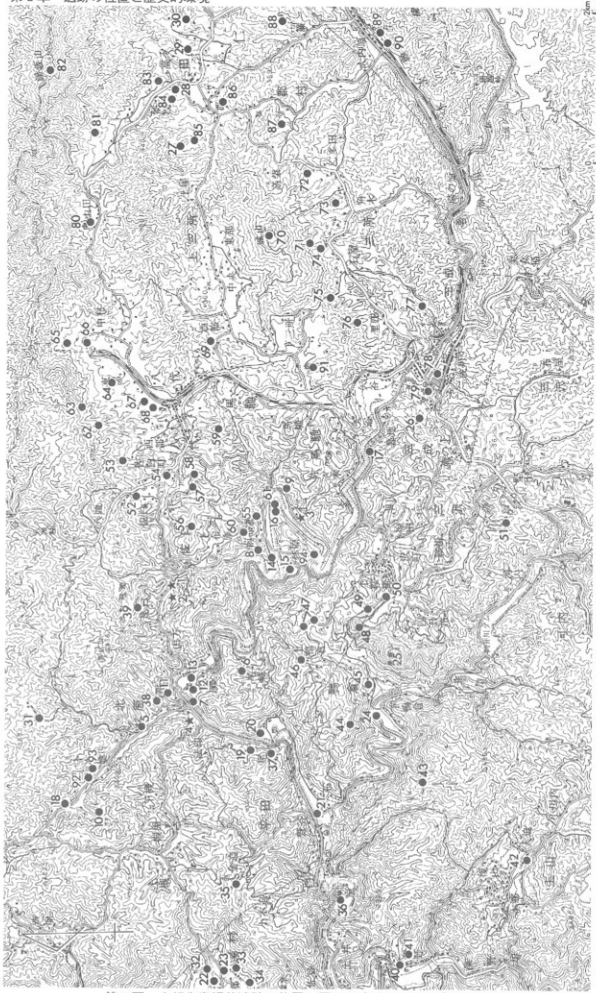
【参考文献】

加藤義成『修訂出雲国風土記参究』　1992　今井書店
加藤義成校注『校注出雲国風土記』　1965　千鳥書房
加藤義成『出雲国風土記』　1965　今井書店
仁多町教育委員会『道路改良計画に伴う　下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告』　1981

仁多町教育委員会『発掘調査報告書　常楽寺古墳』　1985
仁多町教育委員会『比丘尼原横穴群緊急発掘調査報告』　1986
仁多町教育委員会『郡屋敷古墳　―調査と石室の移築―』　1986
仁多町教育委員会『緊急発掘調査報告　上分・原たたら跡』　1989
仁多町教育委員会『道路改良工事に伴う第２次発掘調査報告　下鴨倉遺跡』　1990
出雲考古学研究会『古代の出雲を考える７　松本古墳群　―斐伊川流域の前期古墳をめぐって―』　1991
仁多町教育委員会『発掘調査報告書　野上たたら跡』　1992
木次町教育委員会『発掘調査報告書　斐伊中山古墳群－西支群－　木次町文化財調査報告書第２集』　1993
仁多町教育委員会『高田小学校建設予定地内発掘調査報告書　ロヤケたたら跡　芝原遺跡』　1994
仁多町教育委員会『尾原ダム建設に関わる発掘調査報告書　武者山遺跡　丸子山古墳群』　1995
木次町教育委員会『妙見山遺跡発掘調査報告書　木次町文化財調査報告書第３集』　1995
仁多町教育委員会『主要地方道玉湯吾妻山線改良工事に関わる発掘調査報告書　宇根たたら跡』　1996
仁多町教育委員会『中国第二中幹線ルート送電鉄塔建設予定地内遺跡調査報告書　須坂遺跡・他』　1997
木次町教育委員会『平田遺跡　木次町文化財調査報告書第４集』　1997
木次町教育委員会『家の上遺跡・石壷遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１』　1998
島根県教育委員会『島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第２集〉出雲・隠岐の城館跡』　1998
木次町教育委員会『上垣内たたら跡　北原Ⅰ遺跡　茶屋の廻遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２』　1999
荻原千鶴『出雲国風土記』　1999　講談社学術文庫
木次町教育委員会『枯木ヶ谷鈩遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３』　2000
木次町教育委員会『平田遺跡第Ⅲ調査区　斐伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』　2000
内田　稔『悠久のふる里尾原北原の年輪』　1994

註

（１）加藤義成（1992）による。



第２図　本報告書掲載遺跡の位置と周辺の遺跡（Ｓ＝1／50,000）

第１表　尾原ダム周辺遺跡一覧表

地図番号	遺跡名	種別
1	尾白Ⅰ遺跡	散布地
2	尾白Ⅱ遺跡	炭窯跡
3	家ノ脇Ⅱ遺跡	散布地
4	川平Ⅰ遺跡	住居跡・散布地
5	垣ノ内遺跡	集落跡
6	槙ヶ坪遺跡	製鉄遺跡
7	家の後Ⅰ遺跡	散布地
8	殿ヶ迫横穴墓群	横穴
9	時仏山横穴墓群	横穴
10	下布施横穴墓群	横穴
11	宮ノ脇遺跡	散布地
12	家の後Ⅱ遺跡	散布地
13	北原木郷遺跡	散布地
14	原田遺跡	集落跡・古墳
15	前田遺跡	散布地
16	林原遺跡	散布地
17	鼻地遺跡	散布地・住居跡
18	柿木ヶ谷炉遺跡	製鉄遺跡
19	上垣内たたら跡	製鉄遺跡
20	家の上遺跡	祭祀遺跡・製鉄遺跡
21	平田遺跡	散布地・製鉄遺跡
22	早稲田遺跡	散布地
23	本郷谷遺跡	散布地
24	下鴨倉遺跡	散布地
25	二沢城跡（鴨倉城跡）	城跡
26	丸子山古墳群	古墳
27	カネツキ免遺跡	散布地
28	常楽寺古墳	古墳
29	高田廃寺	寺院跡
30	岩屋古墳	古墳
31	下布施滝の下炉跡	製鉄遺跡
32	宮原遺跡	散布地
33	木屋敷遺跡	散布地
34	烏屋ヶ丸砦跡	城跡
35	金堀遺跡	散布地
36	平田炉原炉跡	製鉄遺跡
37	石畑遺跡	散布地
38	下布施山城跡	城跡
39	尾白横穴群	横穴
40	田井中学校付近古墳	古墳
41	桑畑さん五輪塔群	古墓
42	上山城跡	城跡
43	戈の原遺跡	散布地
44	松木山城跡	城跡
45	光善寺古墳	古墳
46	芝原遺跡	製鉄遺跡
47	穴観古墳群	古墳

地図番号	遺跡名	種別
48	比久尼原横穴群	横穴
49	どけや古墳	古墳
50	布広城跡	城跡
51	八頭塚横穴群	横穴
52	佐白・原炉跡	製鉄遺跡
53	金丁松炉跡	製鉄遺跡
54	中山遺跡	散布地
55	円満寺	寺院跡
56	佐白城跡	城跡
57	上布施横穴群	横穴
58	上布施遺跡	散布地
59	すげた横穴群	横穴
60	水の手城跡	城跡
61	林原古墳	古墳
62	三出平古墳	古墳
63	穴観音古墳	古墳
64	門屋遺跡	散布地
65	庄田炉跡	製鉄遺跡
66	常の前古墳	古墳
67	長福寺遺跡	散布地
68	金原炉跡	製鉄遺跡
69	下鴨倉大峠炉跡	製鉄遺跡
70	須我井山城跡	城跡
71	石原遺跡	住居跡
72	善勝寺跡	寺院跡
73	開善寺跡	寺院跡
74	善勝寺跡	寺院跡
75	村尾政吉宅向横穴	横穴
76	石原城跡	城跡
77	里田遺跡	散布地
78	郡原敦古墳	古墳
79	三成鎧沿屋小路遺跡	製鉄遺跡
80	奥山田遺跡	散布地
81	琴枕岩屋古墳	古墳
82	鍋坂山城跡	城跡
83	宮の前遺跡	散布地
84	鴨木遺跡	散布地
85	カネツキ免炉跡	製鉄遺跡
86	仁多郡衙跡	郡衙跡
87	コンケ横穴	横穴
88	金床横穴	横穴
89	伝和泉式部墓	古墓
90	大内原十居館跡	館跡
91	須坂遺跡	古墳・横穴・建物跡
92	ゴマボリ炉跡	製鉄遺跡
93	寺田Ⅰ遺跡	製鉄遺跡
94	小廻上遺跡	城跡

第3章　尾白Ⅰ遺跡

第1節　遺跡の概要（第3図）

尾白Ⅰ遺跡は木次町の飛地に位置する。斐伊川支流の尾白川が流れる谷間に立地し、仁多町佐伯、同町上布施、木次町北原への分岐点に所在する。標高は270～280mを測る。発掘調査以前は水田跡地であった。調査範囲は900㎡である。旧地形は東西に伸びる谷部であるが、水田造成時に両側が大きく削られ、破壊を免れたのは中央を東西に伸びる谷の最深部のみであった。基本層序は、表土（耕作土）→黒色土→地山である。遺物は黒色土層から出土しており、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石、鉄滓が混在している。これらの遺物は黒色土と一緒に、両側の山から流れ込んだものと思われる。遺構は35基のピットを確認した。ピットの時期・性格は不明である。

第2節　調査の経過

尾白1遺跡は平成5年3月の分布調査で土師器が採集され、34,000㎡が要範囲確認調査地となった。平成11年8月から同年9月まで範囲確認調査が行われた。この調査ではトレンチが18か所設定された。このうち第5トレンチから縄文土器と陶磁器などを含む黒色土層とピットが確認され、谷の最上段500㎡が全面発掘調査地となり、平成13年4月から全面発掘調査が実施された。途中、黒色土層が西側に広がることが判明し調査区を400㎡拡張した。発掘調査は同年5月まで実施された。以下に全面発掘調査の経過を記述する。

平成13年4月13日：重機で黒色土層上面までを掘削する。

4月16日：西側に黒色土層が広がるためトレンチで範囲の確認をする。同時に当初の範囲500㎡をA区とし、新たに調査範囲とする部分をB区とした。

4月17日：B区で鉄滓と羽口片が出土する。出土状況から両側の山からの流れ込みあると判断した。

4月23日：B区で掘削中のトレンチの壁が崩れ、これ以上の掘削は勿論、公道まで破壊する可能性が有るため、掘削は断念し崩壊部分を修復・整備した。

5月9日：ピットの掘削が完了した（ピットの総数は36基）。

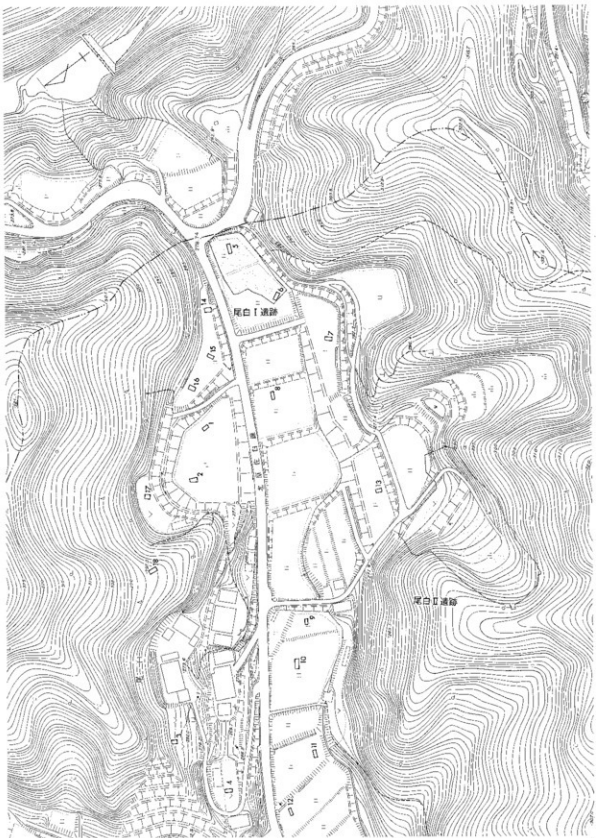
5月10日：空撮を実施した。

5月14日：ピットの実測が完了し、発掘調査が終了した。

第3節　検出遺構（第5図、図版2、第2表）

尾白Ⅰ遺跡では32基のピットを確認した。ピットの大半は削平を免れた遺跡中央部分に集中している。ピット1、ピット9、ピット29からは弥生土器もしくは土師器と思われる小片が1点ずつ出土した。これらの遺物は上層から出土しており流れ込みと思われる。

ピットの平面形は円形と長方形の2種類があり、円形18基、長方形18基を数える。また、ピットの底面に小ピットを伴うものが17基ある。平面形と小ピットの関係を見ると、円形で小ピットを伴うものは2基、長方形で小ピットを伴うものは15基で、長方形のピットの方が小ピットを伴い易い

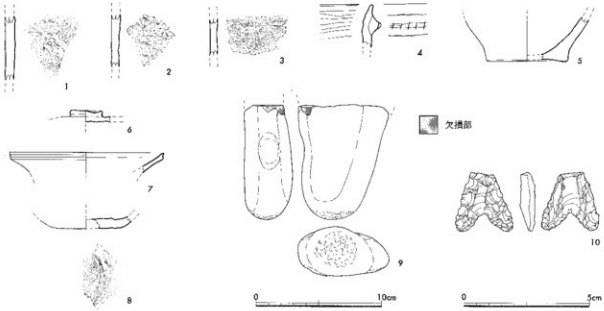


第3図　尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡と周辺の地形（S＝1／2,000）

と言える。これらのピットは配列から近現代の田圃補強の畦杭の可能性が考えられる。

第4節　出土遺物（第4図、図版2、第3表～第4表）

尾白Ⅰ遺跡からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄滓、炉壁が出土した。これらの大半は前述したように黒色土層から混在して出土したものである。



第4図　尾白Ⅰ遺跡出土遺物実測図（1～9はS＝1／3、10はS＝2／3）

第5節　小結

尾白Ⅰ遺跡では縄文時代から古墳時代までという幅広い時期の遺物や製鉄に関連する遺物が流れ込みではあるが確認された。このことは周辺に縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡や、鉄製産遺跡が存在することを示している。

第5図　尾白Ⅰ遺跡遺構配置図（S＝1／100）

第2表　尾白Ⅰ遺跡　遺構一覧表

	上　場		下　場		中段上場		中段下場	
ピット番号	長径(cm)	短径(cm)	長径(cm)	短径(cm)	長径(cm)	短径(cm)	長径(cm)	短径(cm)
P01	99.0	46.5	76.0	36.0	21.5	12.5	9.0	7.0
P02	153.5	75.5	A 94.5	57.0	33.0	21.5	20.0	12.0
			B 69.0	56.0				
P03	106.0	58.0	47.0	30.0				
P04	107.5	60.0	91.0	51.5	33.0	20.0	24.0	14.5
P05	94.0	39.0	76.0	21.5	19.5	12.0	8.0	6.0
P06	71.0	60.5	65.0	43.0				
P07	97.0	48.0	70.0	34.0	15.0	8.0	6.0	5.0
P08	86.5	66.0	51.5	37.0				
P09	98.0	50.0	80.0	37.0	23.0	13.0	13.0	8
P10	137.0	99.0	128.0	82.0	A 14.0	7.5	8.0	4.5
					B 15.0	9.0	6.0	4.0
P11	115.0	71.0	98.0	53.0	32.0	24.5	23.0	14.0
P12	113.5	97.5	64.5	49.0				
P13	113.0	88.5	60.0	37.0				
P14	129.5	77.0	103.0	62.0	38.0	24.5	A 20.0	6.0
P15	88.0	60.0	67.0	49.5	23.5	15.5	18.5	12.0
P16	116.0	79.0	72.0	43.5	21.5	12.0	9.0	8.0
P17	115.0	64.5	75.0	38.0				
P18	125.0	72.0	99.0	51.0				
P19	124.0	80.0	104.0	67.0	23.5	13.0	13.5	7.5
P20	103.0	77.5	48.0	38.5				
P21	109.0	78.0	86.0	57.0				
P22	89.0	56.0	47.5	24.0				
P23	95.0	68.0	84.0	60.0				
P24	105.0	49.0	82.0	44.0	25.2	16.0	21.0	11.5
P25	117.0	44.0	112.0	35.0	A 17.0	11.0	7.5	4.5
					B 13.5	8.0	9.0	4.5
					C 18.0	11.0	10.0	7.0
					D 20.0	14.0	12.5	7.5
					E 15.0	8.0	10.0	6.0
P26	76.0	65.0	55.0	39.5				
P27	76.0	65.0	58.0	47.0				
P28	91.0	73.5	72.5	57.0				
P29	156.5	134.5	98.0	72.0	29.0	16.0		
P30	77.5	65.0	61.0	45.0				
P31	91.0	71.5	58.5	45.5				
P32	78.0	69.0	27.0	22.5				
P33	107.0	87.0	56.5	41.0				
P34	116.0	57.0	96.0	40.0	18.0	11.0	5.5	5.0
P35	86.0	42.0	75.0	33.0	24.0	13.0	8.5	5.5

第3表　尾白Ⅰ遺跡出土土器類観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	形式	備　考
4－1	2下	B区	黒色土層	縄文土器	深鉢深鉢		器台　5.2	外面：条痕 内面：不明	外面：乳褐色 内面：乳褐色 断面：良好		
4－2	2下	B区	黒色土層	縄文土器	深鉢深鉢		器高　4.3	外面：条痕 内面：条痕	外面：暗褐色 内面：暗褐色 断面：良好		表面に煤付着(外面、内面とも)
4－3	2下	A区	黒色土層	縄文土器	粗製深鉢		器高　2.9	外面：条痕 内面：不明	外面：乳褐色 内面：灰褐色 断面：良好		
4－4	2下	A区	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高　3.4	外面：ヨコナデ・刺目突帯 内面：条痕かミガキ？	外面：乳褐色 内面：乳褐色 断面：良好	突帯文系	
4－5	2下	A区	黒色土層	弥生土器	壺or甕	15	底径　6.4 器高　3.5	底部が著しく不明	外面：乳褐色 内面：乳褐色 断面：良好		
4－6	2下	A区	黒色土層	須恵器	杯蓋	100	口径　2.5 器高　0.9	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	外面：灰白色 内面：灰白色 断面：緻密		
4－7	2下	A区	黒色土層	須恵器	甕	10	口径　14.3 器高　2.1		外面：灰白色 内面：灰白色 断面：緻密		
4－8	2下	A区	黒色土層	土師器	皿？	30	底径　4.8 器高　1.0		外面：暗褐色 内面：赤褐色 断面：良好		回転糸切り

第4表　尾白Ⅰ遺跡出土石器類観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
4－9	2下	B区	磨石・敲石	安山岩	9.1	7.2	3.9	376.99	
4－10	2下	A区	石鏃	黒曜石	2.3	2.4	0.6	2.17	欠損。製作時に基部からの打撃で基部が欠けたものと思われる。

第4章　尾白Ⅱ遺跡

第1節　遺跡の概要（第7図）

尾白Ⅱ遺跡は木次町の飛地に位置する。斐伊川支流の尾白川が流れる谷間から南西へ入り込む小さな谷の、緩斜面から尾根上にかけて立地する。標高は280～300mである。調査前は畑跡地及び山林となっており、一部削平や撹乱を受けている部分があった。調査面積は3,800㎡である。

遺跡の旧地形は東西に伸びる谷であるが、畑地造成時に谷の両側が大きく削られている。破壊を免れていたのは谷の中央部のみあった。遺跡の基本的な層序は上から、表土（耕作土）→黒色土→地山となっており、遺物は黒色土層のなかからは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が混在して出土している。これらの遺物は谷に流れ込んだものと思われる。遺構は近世の炭窯を6基と土坑を2基確認した。

第2節　調査の経過（第6図）

尾白Ⅱ遺跡は平成11年3月の分布調査で、土師器や鉄滓が採集され、横穴墓の可能性が考えられる横穴も確認されたことから、谷地形の斜面4,800㎡が要範囲確認調査地となった。これを受けて平成11年12月に範囲確認調査が行われた。この調査では4m×2mのトレンチが10本設定された。第2トレンチ、第4トレンチ、第7トレンチからは土師器、弥生土器、縄文土器、鉄滓が確認され、また10トレンチからは炭窯が1基検出され、3,800㎡が要全面発掘調査地となった。

全面発掘調査は平成13年5月から9月まで実施された。

以下に全面発掘調査の経過を記述する。

平成13年5月10日：範囲確認調査では人力で掘削するために深さ2m以上の調査が実施できなかったため、遺跡全体の堆積状況を確認するために遺跡中央に東西に延びるトレンチを設定し重機で掘削する。その結果、遺物包含層である黒色土層までは遺物・遺構が認められないことから、黒色土層を上面までは重機で掘削することにする。

ＳＧ０１の地表面に炭窯を1基確認する。この炭窯は約3m×約3mのほぼ円形の平面プランで、焚口には石を積んで形成していた。地表面からも確認でき、炭窯内部には空き缶、電化製品、ビール瓶、一升瓶等の現代の遺物が多量に廃棄されていた。調査担当者間で協議を行い、写真撮影を実施し、除去した。

ＳＧ０１を検出する。

5月15日：分布調査時に確認された横穴の調査を実施し、自然の水穴であることを確認する。

5月16日：人力による掘削を開始する。

範囲確認調査時に検出された炭窯を再確認し、ＳＧ０２とする。

ＳＧ０３を検出する。

6月8日：ＳＫ０１を確認する。

遺跡北西部分の土層断面に掘り込みを確認する。この掘り込みをＳＫ０１とし、全面発掘調査範囲を拡張する。

７月31日：ＳＧ０５を検出する。

８月２日：ＳＧ０３の奥壁を確認する。

８月31日：ＳＧ０１ｂを完掘する。

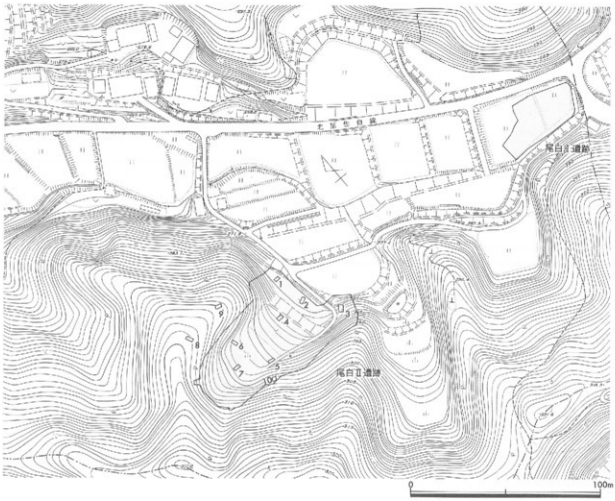
９月５日：ＳＧ０１ａを完掘する。

９月６日：調査範囲外であった遺跡南東部分に排水用のトレンチを重機にて掘削中、炭窯を１基確認する。この炭窯をＳＧ０５として全面発掘調査範囲を拡張する。

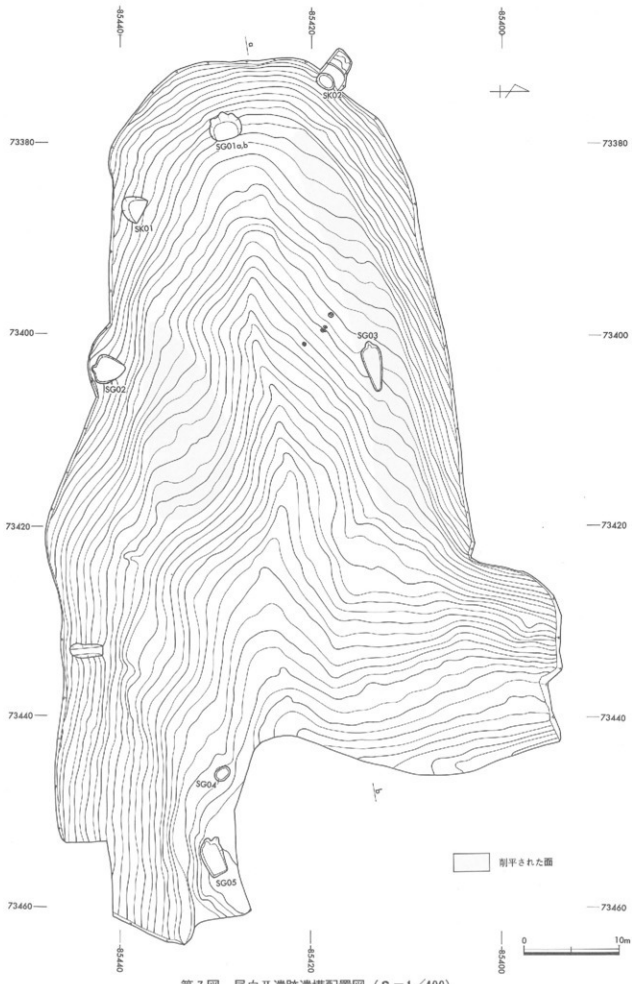
９月13日：ＳＧ０４とＳＧ０５を完掘する。

９月15日：空撮を実施する。

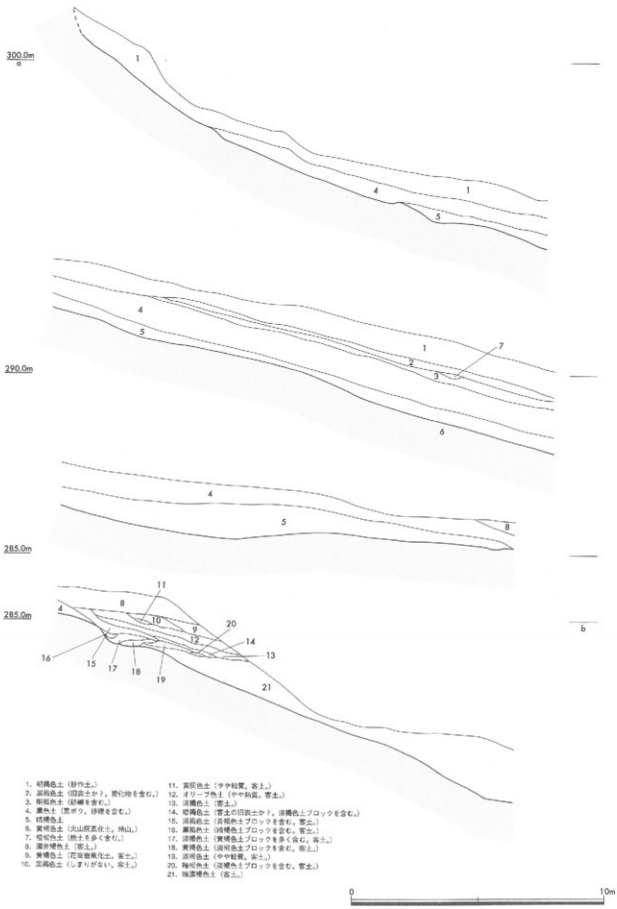
９月18日：発掘調査が終了する。



第６図　尾白Ⅱ遺跡トレンチ配置図（Ｓ＝1／2,000）



第7図　尾白Ⅱ遺跡遺構配置図（S＝1／400）



1. 暗褐色土（耕作土。）
2. 淡黒色土（旧耕土か？。炭化物を含む。）
3. 黒褐色土（砂礫を含む。）
4. 黒色土（黒ボク。砂礫を含む。）
5. 明褐色土
6. 黄褐色土（火山灰質化土。地山。）
7. 暗褐色土（熱土を多く含む。）
8. 淡赤褐色土（客土。）
9. 黄褐色土（花実岩風化土。客土。）
10. 茶褐色土（しまりがない。客土。）
11. 黄灰色土（やや粘質。客土。）
12. オリーブ色土（やや粘質。客土。）
13. 淡褐色土（客土。）
14. 暗褐色土（客土の旧耕土か？。淡褐色土ブロックを含む。）
15. 淡茶色土（旧耕作土ブロックを含む。客土。）
16. 黒茶色土（淡褐色土ブロックを含む。客土。）
17. 淡褐色土（黄褐色土ブロックを多く含む。客土。）
18. 黄褐色土（淡明色土ブロックを含む。客土。）
19. 淡明色土（やや粘質。客土。）
20. 褐灰色土（淡褐色土ブロックを含む。客土。）
21. 暗茶褐色土（客土。）

第８図　尾白Ⅱ遺跡中央セクション土層図（Ｓ＝1／150）

第3節　検出遺構

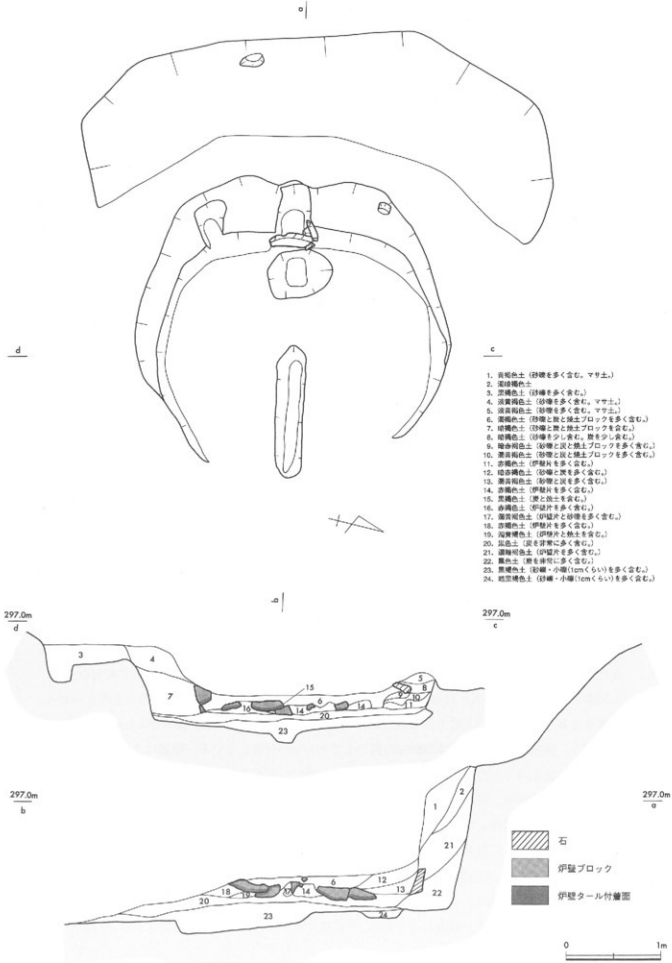
ＳＧ０１（図版３～５）：ＳＧ０１は遺跡の西側、標高約296mに位置し、谷奥斜面に直交する形で掘り込まれている。発掘調査前には同じ場所に現代の炭窯が築造されていた。奥壁側の残存状況は良好であったが、焚口側は流失していた。当初は１基の炭窯と思われたが、最初に大きな炭窯が築造され、その後に小さな炭窯が内側に再度築造され、実際には２基の炭窯が存在していたことが判った。最初に築造された大きな炭窯をＳＧ０１ａ、その後に築造された小さい炭窯をＳＧ０１ｂとした。また、炭窯の上に作業場と思われる平坦な加工段があり、さらに上には炭窯の上に設置される小屋の棟木を立し込んだと思われる小ピットがある。

ＳＧ０１ａ（第９図・第10図）：ＳＧ０１ａは平面がほぼ円形を呈し、幅3.3m、奥行き3.1m、残存高1.5mを測る。床面は焚口部分しか赤化しておらず、壁面は窯内側にはタールが付着しており、タール付着面の外側は赤化している。焚口から奥に向かって1.4mまでは、床面に細かい炭が散乱していた。煙道は３つあり、中央の煙道は規模が幅36cm、奥行き48cm、高さ2.3mで床面から垂直に延びており、主煙道と考えられる。主煙道の排煙口は６個の積石で形成されており、排煙口は高さ９cm、幅24cm、奥行き40cmとなっている。ただし、この主煙道は後述するＳＧ０１ｂの主煙道でもあり、ＳＧ０１ｂの築造時に修繕された可能性が高い。主煙道の両横の煙道は床面から45cmと115cm浮いた位置から垂直に延びている。これは「腰伸ショウジ」と呼ばれる副煙道と考えられる。ＳＧ０１に限らず、尾白Ⅱ遺跡の炭窯の時期は、遺物が木炭しか出土していないため、^{14}Cによる放射性同位体年代測定、熱残留磁気年代測定、遺構の形態から求めた。^{14}Cによる年代測定では460±60（470±60）B.P[1]いう年代が提示された。遺構の平面プランは出雲地域では明治時代後半から大正時代の初期に見られる「池田式」[2]に近いが、壁面に石積みを持たない点が「池田式」とは異なる。また、煙道を３か所配置する構造は江戸時代中期以降に大炭窯に見られる特殊な構造であり、この点も池田式とは異なる。更に後述するがＳＧ０１ａを改修して使用したＳＧ０１ｂの年代が20Ｃ代と考えられることから、^{14}Cによる年代測定の結果を否定することにはなるが、確実なところでは1900年前後と考えられる。

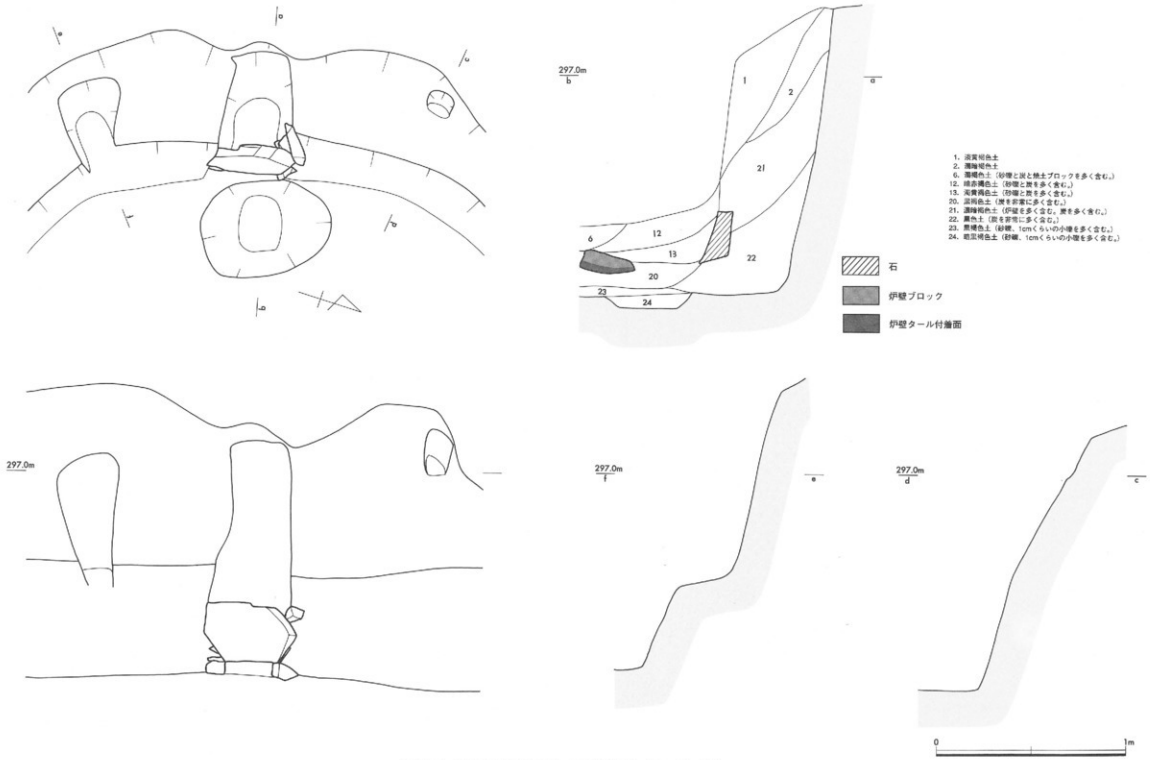
遺構の性格は、生焼けの炭が出土していたが規模が大炭窯の半分程度なので大炭窯とは思えない。また、周辺から灰が出土していないので白炭窯とも考えられない。従って、黒炭の生産を行っていた炭窯と考えられる。出土した生焼けの木炭は失敗品のため放置されたものであろうと考えられる。

ＳＧ０１ｂ（第11図）：ＳＧ０１ｂは平面がほぼ円形を呈し、幅3.2m、奥行き3.3m、残存高1.52mを測る。炭窯内側の壁面には約80cmの高さまでタールが付着している。煙道は３つあり、主煙道はＳＧ０１ａと同じものを使用している。前述のように、ＳＧ０１ａの主煙道を修繕し、再利用したものと考えられる。主煙道両横の煙道は床面から40cmと50cmの高さから垂直に延びており、ＳＧ０１ａと同様に「腰伸ショウジ」の副煙道である。この副煙道はＳＧ０１ａの副煙道を再利用したものではなく、新しく設置されたものである。^{14}Cによる年代測定では240±60（250±60）B.Pという年代が提示され、地磁気年代測定では1900～2000という年代が測定された。遺構の形状はＳＧ０１ａと同様に「池田式」に近いが、壁面に石積みを持たない。また地元住民によると戦後にはこの炭窯はなかったという。以上のことから、^{14}Cによる年代測定の結果を否定することになるが、1900年～1945年と考えられる。

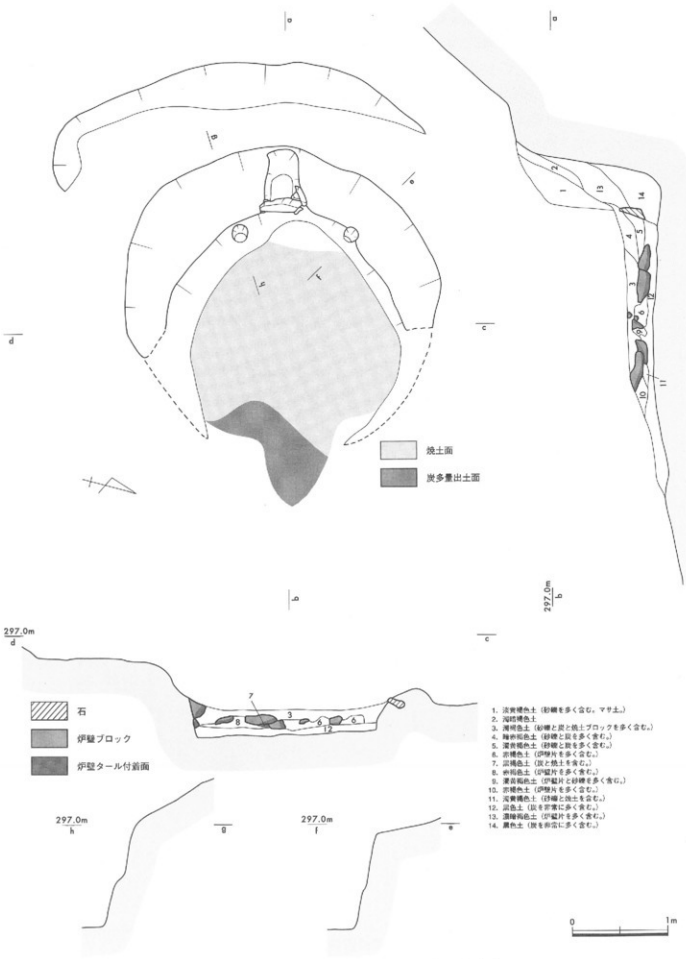
遺構の性格は、ＳＧ０１ａと同理由から、黒炭の生産を行っていた炭窯と考えられる。



第9図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ａ実測図（Ｓ＝1／40）



第10図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ａ煙道実測図（Ｓ＝１／20）



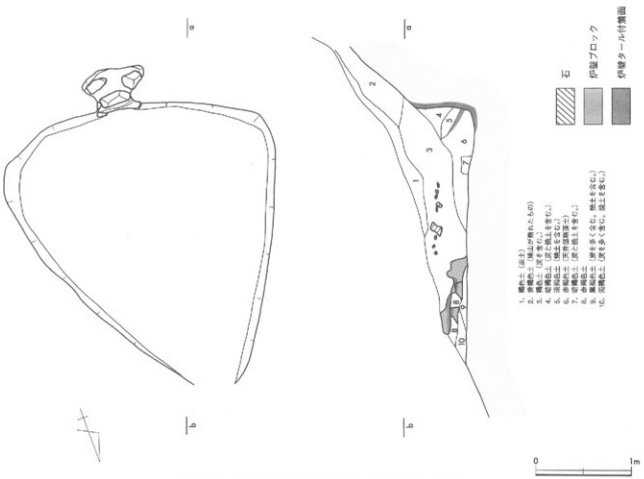
第11図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ01ｂ実測図（Ｓ＝1／40）

ＳＧ０２（第12図・第13図、図版６）：ＳＧ０２は範囲確認調査時に発見された炭窯である。遺跡の南側、標高約295mに位置し、斜面に直交する形で掘り込まれている。平面プランは、奥壁側が広がった三角形を呈している。規模は床面で奥行き3.1m、奥壁側の幅2.6m、焚口の幅0.4m、残存高0.6mを測る。床面は焚口部分しか赤化しておらず、壁面は窯内側にはタールが付着しており、タール付着面の外側は赤化している。焚口から奥に向かって80cmまでは、床面に細かい炭が散乱していた。また、焚口の手前側は削平されている。

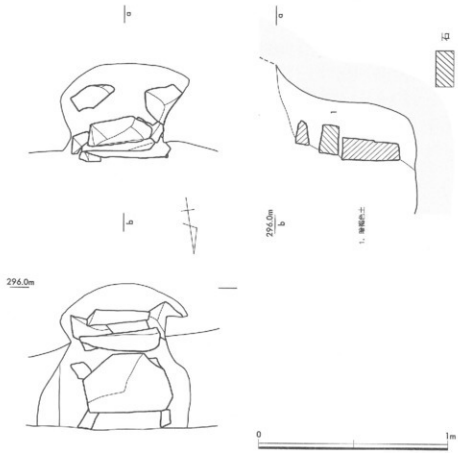
煙道は１つで、排煙口は３個の石を積んで形成している。排煙口の規模は、高さ８cm、幅36cm、奥行き26cmを測る。煙道は積み石で形成しており、２個の石が原状を保ち、２個の石が煙道内に落ち込んでいた。煙道の石の窯内側全面にはタールが付着していた。

^{14}Cによる年代測定では370±60（380±60）B.Pという年代が提示され、地磁気年代測定では1750±30という年代が測定された。遺構の平面プランは「池田式」が導入される以前の明治時代前半に見られた「旧窯」に近い。ただし、壁面に石積みを持たない点は、「旧窯」とは異なる。以上のことから、^{14}Cによる年代測定の結果を否定することになるが、1750±30に使用された窯であると考えられる。

遺構の性格は、生焼けの炭が出土せず、規模も小さいので大炭窯とは思えない。また付近から灰も出土していないので白炭窯でもない。従って、黒炭を生産していた炭窯と考えられる。



第12図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ02実測図（Ｓ＝1／40）



第13図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ02煙道実測図（Ｓ＝1／20）

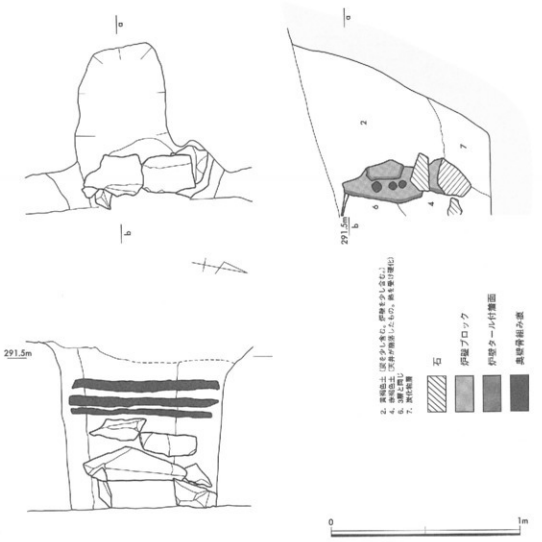
ＳＧ０３（第14図・第15図、図版７～９）：ＳＧ０３は標高約291ｍに位置し、斜面にやや平行する形で掘り込まれている。遺構の上面は削平されていた。平面プランは、奥側が広がった長細い三角形を呈している。規模は奥行き4.8m、奥壁の幅1.7m、焚口の幅0.3m、残存高1.0mを測る。

窯内は壁面、煙道ともにタールが付着しており、タール付着面の外側は赤化している。また、床面のほぼ全面に細かい炭が散乱し、床面自体は赤化していた。

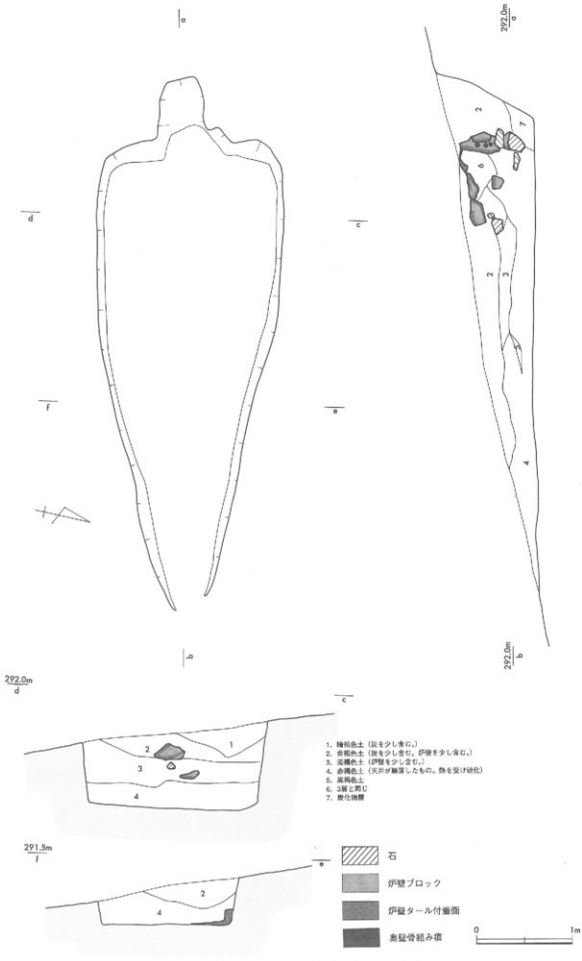
煙道は１つで、排煙口は６個の石を積んで形成されており、排煙口の規模は高さ7㎝、幅24㎝、奥行き50㎝を測る。煙道は奥壁と一体化しており、直径５㎝程の木を横に渡して骨組みとし、粘土で肉付けをして形成している。この奥壁と一体化した煙道は尾白Ⅱ遺跡の他の炭窯には見られない特徴である。この奥壁の形成に使用された木材は炭化した状態で３本確認できた。また、土層中には奥壁が前方にそのまま倒れた状況と思われる焼土ブロックが出土しており、その部分を現存する奥壁に足すと奥壁の高さは少なくとも1.6m以上はあったと考えられる。

ＳＧ０３の年代は^{14}Cによる年代測定では280±60（280±60）B.Pという年代が提示され、地磁気年代測定では1700±10という年代が測定された。ＳＧ０３に見られる横穴タイプの炭窯の類例は、発掘調査が行われた遺跡では、江戸時代後期と考えられる幌原町琴引奥炭窯跡〔3〕や旭町十文セド遺跡の炭窯跡〔4〕、時期不明の瑞穂町大原炭窯跡〔5〕が知られている。また、未発掘調査の遺跡では大東町の才ヶ市炭窯跡〔6〕と畑ヶ平遺跡〔7〕が知られているが、時期は不明である。ここでは

^{14}Ｃ年代測定と地磁気年代測定の結果の一致を支持し、遺構の類例よりも古くなるが、1700年前後に使用された窯であると考えたい。遺構の性格については、生焼けの炭が出土していないので大炭窯ではなく、周辺から灰が出土していないので白炭窯でもなく、従って黒炭窯である可能性が高い。一方で構造が他の炭窯よりも手間が掛かるものであり専門的な知識を必要とする点や、類例の琴引奥炭窯跡、十文セド遺跡炭窯跡、才ヶ市炭窯跡、畑ヶ平炭窯跡、大原炭窯跡がいずれもタタラ用の炭窯である可能性が指摘されており、ＳＧ０３もタタラ用の炭窯であった可能性が考えられる。以上のことから、ＳＧ０３は大炭ではないが、タタラ用製鉄に関係する木炭〔8〕を製炭していた可能性が考えられる。各地域の調査による類例の増加を待ちたい。



第14図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03煙道実測図（Ｓ＝1／20）

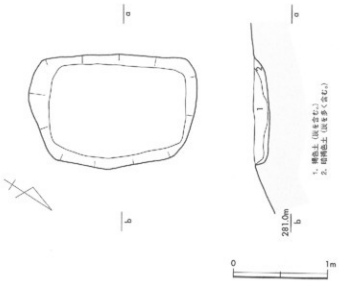


第15図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ03実測図（Ｓ＝1／40）

ＳＧ０４（第16図、図版11）：ＳＧ０４は遺跡の南側、標高約281ｍに位置する。斜面に直交する形で掘り込まれている。平面プランは、長方形を呈している。規模は奥行き1.7ｍ、幅1.2ｍ、残存高16㎝を測る。

床面は南西側は赤化しており、北東側は炭が残っていた。煙道は無かった。

^{14}Ｃによる年代測定では280±60（280±60）B.Pという年代が提示された。遺構は「小炭窯」と呼ばれる簡易な小形の炭窯と思われる。この種の炭窯は当地域に於いては少なくとも近世以降には普遍的に見られるもので、遺構の特徴からの時期の判断は難しい。ここでは^{14}Ｃ年代測定法で提示された年代としておく。



第16図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ04実測図（Ｓ＝1／40）

ＳＧ０５（第17図・第18図、図版10）：ＳＧ０５は、当初は全面調査範囲ではなかったが、重機で排水処理用の溝を掘削中に検出され、急遽全面発掘調査範囲とした炭窯である。その際に焚口側は大きく削平された。遺跡の北側、標高279ｍに位置し、斜面に直交する形で掘り込まれている。平面プランは長方形を呈している。規模は現状の奥行きで3.2ｍ、奥側の幅1.8ｍ、残存高0.8ｍを測る。

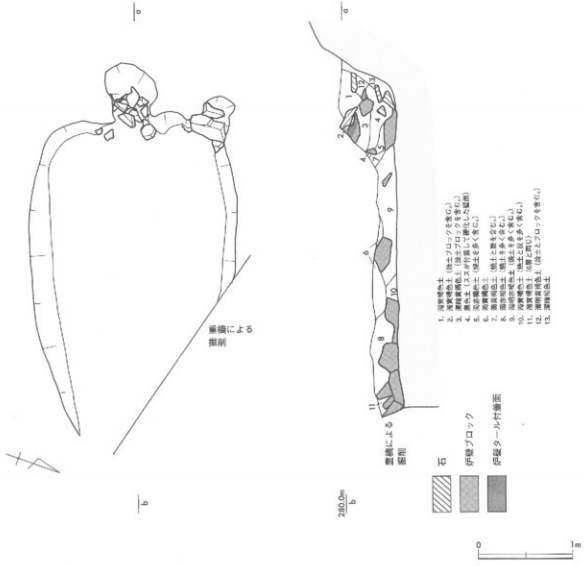
床面のほぼ全面には細かい炭が散乱しており、その下は薄く赤化していた。壁面は窯内側にはタールが付着しており、タール付着面の外側は赤化している。

煙道は奥壁中央に１つ、奥壁北側角に１つ、合計２つ設置されている。どちらも床面からほぼ垂直に立ち上がり、共に排煙口は石を積んで形成しているが、奥壁中央の煙道の方が規模が大きい。位置と規模を考えると、奥壁中央の煙道が主煙道で、奥壁北側角の煙道が副煙道と思われる。

主煙道の排煙口からは19個の石が出土しているが、これらの石の幾つかが排煙口を形成し、幾つかが煙道を形成していたものと思われる。排煙口部分の両脇の石の位置から、排煙口は幅28㎝、奥行き66㎝であったと思われる。高さは不明である。副煙道の排煙口は５個の石で形成されており、排煙口の規模は幅が23㎝、高さが30㎝、奥行きが32㎝を測る。

^{14}Ｃによる年代測定では200±60（210±60）B.Pという年代が提示され、地磁気年代測定では1430±25または1720±50という年代が測定された。遺構の形状は「旧窯」、「池田式」のいずれにも当てはまらないので、近代以前の炭窯の可能性が高いと考えられる。以上のことから、ＳＧ０５の使用時期は17Ｃ後半から19Ｃ初頭と考えられる。

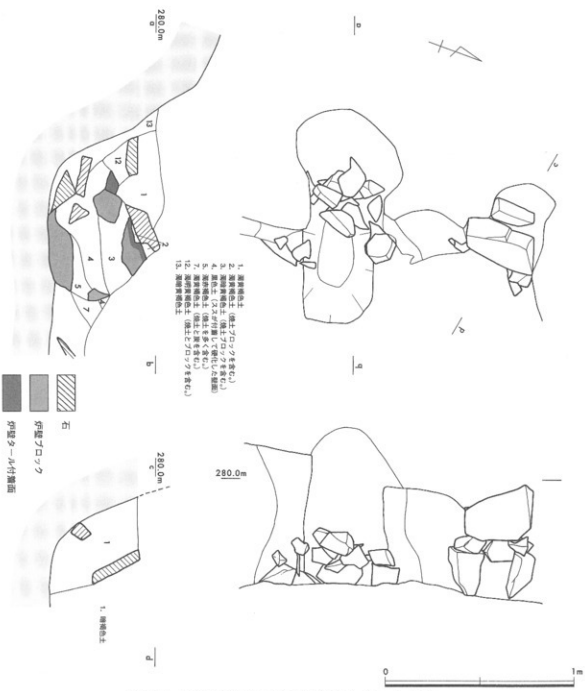
遺構の性格は、煙道が２つあるが規模が小さく生焼けの木炭が出土していないことから、ＳＧ０３と同様に、大炭ではないがタタラ用製鉄に関係する木炭を製炭していた可能性が考えられる。



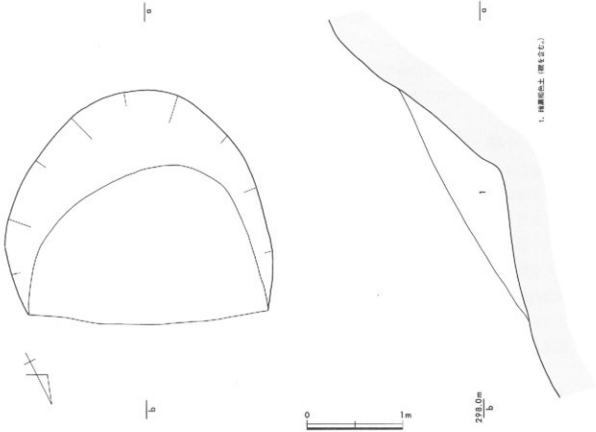
第17図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ05実測図（Ｓ＝1／40）

ＳＫ０１（第19図・図版11）：ＳＫ０１は遺跡の南側、標高約297mに位置する。平面プランは半円形で、規模は床面で奥行き1.6m、幅2.5m、深さ1.2mを測る。出土遺物は確認できなかった。遺構の形状や、ＳＧ０１に隣接する位置にあることから、ＳＫ０１はＳＧ０１築造時の壁体用の粘土採掘坑ではないかと考えられるが、確証は無い。

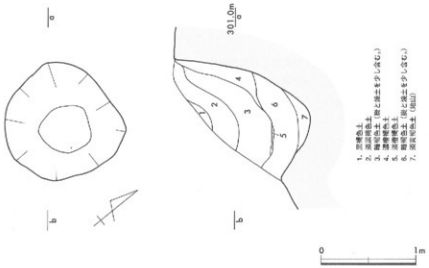
ＳＫ０２（第20図・図版11）：ＳＫ０２は遺跡の西側、標高約300mに位置する。平面プランは円形で、規模は直径1.2m、深さ1.4mを測る。出土遺物は確認できなかった。土坑内面は焼けてはいなかったが、土層中に焼土や炭を含むことや、炭窯に近接すること、遺構の形状から、炭用に切り出した木材を枝打ちしてできる小枝で炭を制作する「小炭窯」ではないかと思われる。



第18図　尾白Ⅱ遺跡ＳＧ05煙道実測図（Ｓ＝1／20）



第19図　尾白Ⅱ遺跡ＳＫ01実測図（Ｓ＝1／40）



第20図　尾白Ⅱ遺跡ＳＫ02実測図（Ｓ＝1／40）

第４節　出土遺物（第21図～第24図、第６表～第７表、図版12～14）：

尾白Ⅱ遺跡では遺構に伴う遺物は木炭しか出土していないが、黒色土層からは谷に流れ込んだ縄文時代から中世までの遺物が出土している。縄文時代では後期～晩期の土器、黒曜石製の石鏃、土偶の乳房部分と思われる土製品が出土した。弥生時代では中期～後期の甕、壺、高坏、甑の破片が出土した。古墳時代では土師器の甕と須恵器の蓋坏が出土した。古代では坏が出土した。中世では擂鉢が出土した。その他に中世以降の土師質の鍋の脚部が出土した。

第５節　小結

炭窯：尾白Ⅱ遺跡では６基の炭窯を確認した。全て規模が小さく、一般的な大炭窯の半分程度の大きさしかない。炭窯の年代や性格についての考察は第７章と第８章に譲り、ここでは結果のみを述べる。ＳＧ０１ａ・ｂは明治時代後半の黒炭窯、ＳＧ０２は明治時代前半の黒炭窯、ＳＧ０３は江戸時代中期の黒炭窯、ＳＧ０４は江戸時代の小炭窯、ＳＧ０５は18Ｃ後半の黒炭窯と考えられる。

遺物：遺構に伴わない遺物は谷地形である尾白Ⅱ遺跡に周辺から流れ込んだものと考えられる。範囲確認調査を実施した際に、西側の尾根には２か所トレンチを設定して調査したが遺物・遺構が確認されていないことから、遺跡の南側の山や、西側の尾根でトレンチを設定した場所より高い位置に遺跡が存在するものと推測される。

註

（１）^{14}Ｃ年代では平成期568年で算出された値であり、西暦1950年までの経過年（years ＢＰ）で表示されている。また（　）内の年代は^{14}Ｃ半減期を5730年で算出された値である。また、年代誤差範囲の70％に測定結果が含まれることを示す。

（２）木炭や炭窯の種類については本報告書 第８章を参照。

（３）島根県教育委員会「頓原・琴引奥炭窯跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書　第ⅩⅥ集』　1990

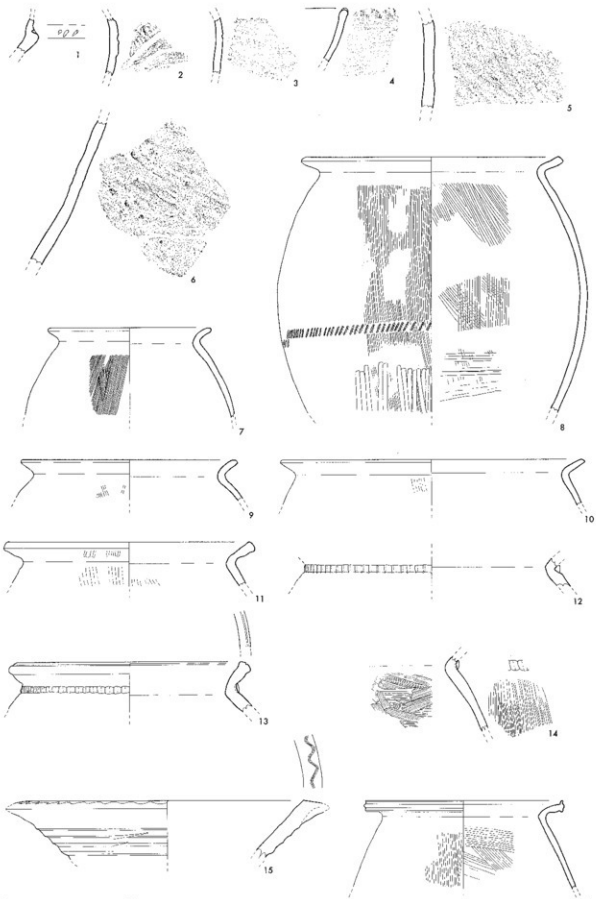
（４）島根県教育委員会「十文字遺跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』　1985

（５）村上恭通「大原炭窯跡」『中国地方製鉄遺跡の研究』溪水社　1993

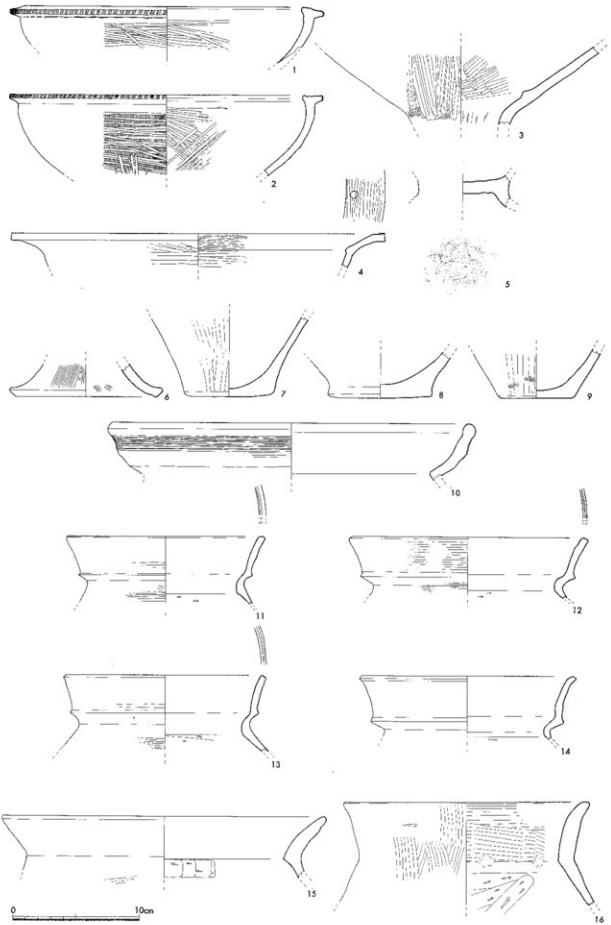
（６）大東町教育委員会『大東町の遺跡Ⅳ』　1992

（７）前掲註（29）文献。

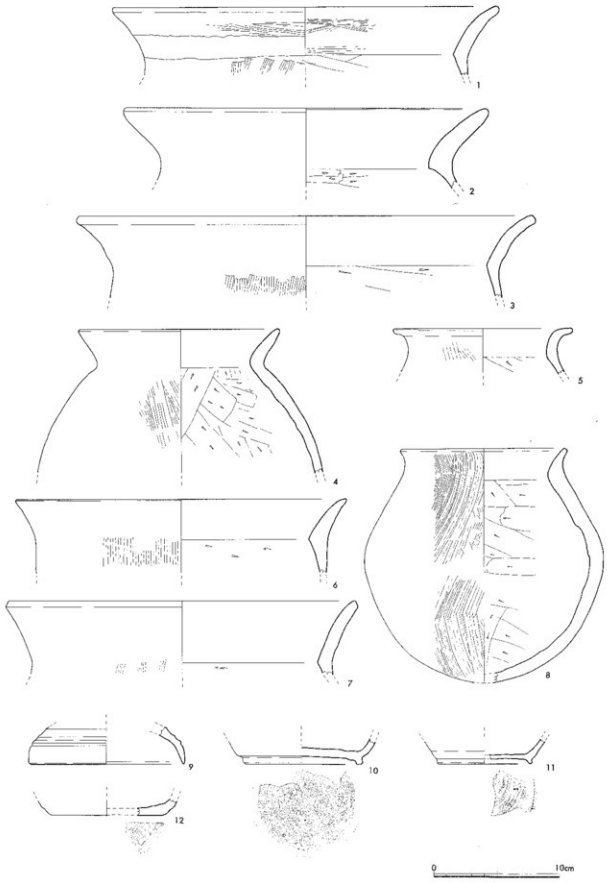
（８）第７章で後述するが、ＳＧ０３で確認された木炭の大半は普通タタラ製鉄では使用しないクリ材であった。また、タタラ製鉄にとって木炭は、単に製鉄時の燃料・触媒としての役割だけではなく、タタラ自体の防湿材として使用するなど使用目的は幅広い。



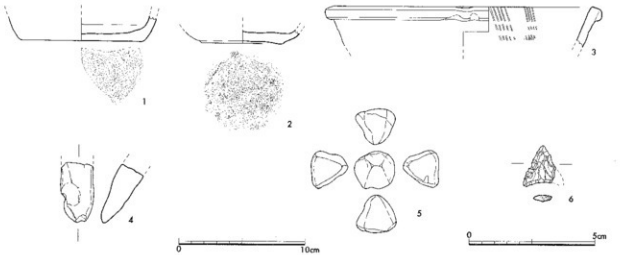
第21図　尾白Ⅱ遺跡出土遺物実測図①（S＝1／3）



第22図　尾白Ⅱ遺跡出土遺物実測図②（S＝1／3）



第23図　尾白Ⅱ遺跡出土遺物実測図③（S＝1／3）



第24図　尾白Ⅱ遺跡出土遺物実測図④（1～4はS＝1／3、5・6はS＝2／3）

第5表　尾白Ⅱ遺跡検出遺構一覧表

	形状	奥行き(m)	幅(m)	高さ(m)	C14年代	地磁気年代	備　考
SG01a	円形	3.1	3.3	1.5	460±60（470±60）		煙道3
SG01b	円形	3.3	3.2	1.52	240±60（250±60）	1950±50	煙道3
SG02	三角形	3.1	2.6	0.6	370±60（380±60）	1750±30	煙道1
SG03	三角形	4.8	1.7	1.0	280±60（280±60）	1700±10	地下式炭窯
SG04	長方形	3.2	1.8	0.8	310±60（320±60）		小炭窯
SG05	長方形	1.7	1.2	0.16	200±60（210±60）	1720±50	煙道2
SK01	半円形	1.6	2.5	1.2			粘土採掘坑か
SK02	円形	1.2	1.2	1.4			

第6表　尾白Ⅱ遺跡出土土器類観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	形式	備考
21－1	13	2D		縄文土器	鉢		器高 2.8	外面：ナデ 内面：不明	外面：黄褐色 内面：黄褐色 焼成：良好		
21－2	13	2E	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 4.6	外面：縄文・ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		外面に煤付着
21－3	13	2E	黒色土層	縄文土器	鉢		器高 4.4	外面：縄文・ナデ 内面：不明	外面：暗褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
21－4	13	2E		縄文土器	鉢		器高 4.3	外　面：条痕 内　面：条痕 口縁部：刻目	外面：赤褐色 内面：赤褐色 焼成：良好		外面・内面ともに煤付着
21－5	13	2F	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 7.0	外面：条痕 内面：不明	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
21－6	13	2F		縄文土器	深鉢		器高 11.4	外面：条痕 内面：不明	外面：赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
21－7	13	2C	黒色土層	弥生土器	甕	17	口径 12.5 器高 7.2	外面：ナデ・刷毛目 内面：摩滅のため不明	外面：淡褐色 内面：乳白色 焼成：良好	第Ⅲ様式	口縁から外面にかけて全面的に煤付着
21－8	12	2C・2D		弥生土器	甕	25	口径 20.0 器高 20.3	外面：ナデ・刷毛目・ミガキ 内面：ナデ・刷毛目・ミガキ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	第Ⅲ様式	外面に煤付着 押し引きは左から右へ
21－9	13	2C		弥生土器	甕	13	口径 17.0 器高 3.0	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	第Ⅲ様式	内面に煤付着
21－10	13	2F	黒色土層	弥生土器	甕	17	口径 23.8 器高 3.6	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	第Ⅲ様式	口縁部外面に煤付着
21－11	13	2E	黒色土層	弥生土器	甕	8	口径 19.2 器高 3.5	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	第Ⅲ様式	黒斑あり
21－12	13	2F	黒色土層	弥生土器	甕	11	頸部径 20.2 器高 2.5	摩滅のため不明	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	第Ⅳ様式	
21－13	13	2E	黒色土層	弥生土器	甕	17	口径 17.6 器高 4.0	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	第Ⅳ様式	口縁部に煤付着
21－14	13	2F		弥生土器	甕		器高 6.1	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	第Ⅳ様式	
21－15	13	2D		弥生土器	広口壺	13	口径 21.6 器高 4.7	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：褐灰色 内面：黒褐色 焼成：良好	第Ⅲ様式	外面の凹線はナデの後
21－16	13	2D	黒色土層	弥生土器	甕	13	口径 15.4 器高 6.8	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	第Ⅴ様式	外面・内面ともに煤付着
22－1	14	2C・2D		弥生土器	高坏	13	口径 21.6 器高 4.8	外面：ナデ・刷毛目・ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	第Ⅴ様式	
22－2	14	2D・2E		弥生土器	高坏	13	口径 24.8 器高 6.4	外面：ナデ・刷毛目・ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	第Ⅴ様式	外面・内面に黒斑あり
22－3	14	1D・2C ・2E		弥生土器	高坏		器高 6.1	外面：刷毛目・ミガキ 内面：ミガキ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		
22－4	14	2D・2E	黒色土層	弥生土器	高坏	13	口径 29.6 器高 2.7	外面：ナデ・ミガキ 内面：ミガキ	外面：淡褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	第Ⅴ様式	外面の黒色は黒斑か？
22－5	14	2F	黒色土層	弥生・土師	脚付甕？	100	器高 2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		脚部内に黒斑あり
22－6	14	2E	黒色土層	弥生土器	高坏	20	底径 11.2 器高 2.6	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		高坏の脚部
22－7	12	1E	黒色土層	弥生土器	壺or甕	100	底径 6.8 器高 6.4	外面：ナデ・ミガキ 内面：摩滅のため不明	外面：淡橙褐色 内面：暗橙褐色 焼成：良好		底部のみ
22－8	12	2D・2E	黒色土層	弥生土器	壺or甕	75	底径 8.2 器高 3.6	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡橙褐色 内面：黒褐色 焼成：良好		底部のみ
22－9	14	2C・2E		弥生土器	壺or甕	48	底径 5.6 器高 3.5	外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		底部のみ
22－10	13	2G	黒色土層	弥生土器	甕	11	口径 28.4 器高 4.5	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：暗褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	九重式	外面にヨコ方向の擬凹線
22－11	13	2C	黒色土層	土師器	甕	10	口径 15.8 器高 5.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	小谷式	口縁端部に沈線あり
22－12	13	1E	黒色土層	土師器	甕	11	口径 18.2 器高 4.7	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	小谷式	口縁端部に沈線あり

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	形式	備考
22−13	13	1E・2F		土師器	甕		口径 16.2 器高 6.1	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色 焼成：良好	小谷式	
22−14	13	1E	黒色土層	弥生土器	甕	15	口径 16.8 器高 6.0	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	小谷式	
22−15	13	2F	黒色土層	土師器	甕	25	口径 25.5 器高 4.8	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		
22−16	13	2E		土師器	甕	25	口径 19.1 器高 8.1	外面：ナデ・刷毛目 内面：刷毛目・ケズリ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色 焼成：良好		口縁部外面に煤付着 黒斑あり
23−1	14	2F	黒色土層	土師器	かまど？	25	口径 30.4 器高 5.4	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		外面に煤付着
23−2	14	2F	黒色土層	土師器	甕	15	口径 28.6 器高 6.3	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		外面に煤付着
23−3	14	2F	黒色土層	土師器	甕	5	口径 36.0 器高 6.5	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
23−4	14	トレンチ7	黒色土層	土師器	甕	17	口径 15.8 器高 10.4	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好		
23−5	14	2D		土師器	甕	20	口径 14.0 器高 3.6	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		口縁部に煤付着
23−6	14	2E	黒色土層	土師器	甕	9	口径 26.2 器高 5.8	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
23−7	14	2F・2G	黒色土層	土師器	甕	20	口径 27.4 器高 5.8	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		
23−8	12	トレンチ7		土師器	甕	60	口径 13.0 器高 18.6	外面：刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		
23−9	14	2G	黒色土層	須恵器	杯蓋	10	口径 12.2 器高 2.9	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	外面：青灰色 内面：灰白色 焼成：堅緻	4期	
23−10	14	2F	黒色土層	須恵器	高台付杯	75	底径 9.4 器高 2.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・回転糸きり	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：不良	7期	高さ5mmの高台をもつ 回転糸切り
23−11	14	1C	黒色土層	須恵器	高台付杯	17	底径 7.6 器高 2.0	外面：回転ナデ・ナデ 内面：回転ナデ・回転糸きり	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：良好	7期	高さ4mmの高台をもつ 回転糸切り外面に煤付着
23−12	14	2E	黒色土層	須恵器	杯身	13	底径 8.8 器高 1.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・回転糸きり	外面：青灰色 内面：青灰色 焼成：堅緻	7期	回転糸切り
24−1	14	2F	黒色土層	須恵器	杯身	20	底径 9.8 器高 1.8	外面：回転ナデ・ナデ 内面：回転ナデ・回転糸きり	外面：灰色 内面：灰色 焼成：堅緻	7期	回転糸切り
24−2	14	2F		須恵器	杯身	100	底径 6.4 器高 1.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・回転糸きり	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	7期	
24−3	14	2E	黒色土層	中・近世の陶器	擂鉢	11	口径 15.4 器高 3.2	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：暗青灰色 内面：暗青灰色 焼成：堅緻		釉が内外面にかかっている 産地不明
24−4	14	2F	黒色土層	土師質	鍋脚部		幅 2.5 長さ 4.9		外面：淡褐色 焼成：良好		中世以降
24−5	12	2E	黒色土層	土製品	土偶		高さ 1.5 幅 1.6 長さ 1.5		外面：淡褐色 焼成：良好		土偶の乳房部分 左右不明

第7表　尾白Ⅱ遺跡出土石器類観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
24−6	12	2F	石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.2	0.47	一部欠損

第5章　家ノ脇Ⅱ遺跡3区

第1節　遺跡の概要（第25図）

家ノ脇Ⅱ遺跡は仁多町佐白に位置する。斐伊川右岸の可耕地の少ない狭隘な谷間に立地する。標高は200m前後である。調査前は水田跡地及び家屋跡地であった。調査面積は3,960㎡である。遺跡の旧地形は東西に伸びる河原である。遺跡は1～4区の調査区に分かれる。

【1区】調査区の南端にあたり調査面積は680㎡を測る。弥生時代後期の土器溜まり1か所と古墳時代後期の土坑2基が確認された。また、弥生時代後期から古墳時代にかけての河川数も検出された。

【2区】1区の北側に隣接し、調査面積は1,830㎡を測る。縄文時代と弥生時代と古墳時代の河川数を合計3面確認した。縄文時代の河原は、三瓶太平山火山灰の下層に存在する為、3,600年以前のものであると考えられる。遺構は、古墳時代後期の木列と土器溜まりが確認された。この土器溜まりは3か所確認されており、角礫と円礫が積まれた土に多量の土師器と須恵器が置かれたものである。

【3区】本書掲載の調査区である。2区の東側にあたり、山裾に位置し、調査面積は540㎡を測る。基本層序は上から、黒褐色土→褐色土→暗褐色砂質土→黒灰色砂質土→黒褐色砂質土→明褐色砂→黄褐色砂となっている。濁褐色土層中からは土師器や、6C後半の須恵器が出土した。また、黒褐色土層上面からは6C後半の土器溜まりが1か所と集石遺構が1か所確認された。土器溜まりの規模は4m×2mを測る。暗褐色土層中からは弥生時代前・中期の土器が出土し、黒褐色砂質土層中からは縄文時代後・晩期の土器が出土した。また、明褐色砂層と黄褐色砂層は斐伊川の川砂と思われる。

【4区】1区の東側に位置し、面積は420㎡を測る。縄文時代から古墳時代の包含層が確認された。

第2節　調査の経過

家ノ脇遺跡は平成5年3月の分布調査で、土師器や鉄滓が採集され、21,000㎡が要範囲確認調査地となり、平成11年9月から10月にかけて範囲確認調査が行われた。この調査ではトレンチが30本設定され、第6トレンチ、第16トレンチ、第17トレンチ、第19トレンチ、第20トレンチ、第21トレンチ、第27トレンチ、第32トレンチから土師器が出土した。調査結果から8,200㎡が要全面発掘調査地となった。また、家ノ脇遺跡の要全面発掘調査地が2か所に分かれることから、北側の2,500㎡を家ノ脇Ⅰ遺跡とし、南側の5,000㎡を家ノ脇Ⅱ遺跡とした。家ノ脇Ⅱ遺跡の全面発掘調査は平成13年4月から12月まで実施された。

家ノ脇Ⅱ遺跡の全面発掘調査は、まず1区、2区で実施されたが、発掘調査の進展に伴い、遺跡の範囲が当初の推定と異なる可能性が生じ、再度範囲確認調査が実施された。この調査ではトレンチを発掘調査地外の北側に3か所と南側に4か所、発掘調査地内東側に5か所と道路部分に4か所設定した。発掘調査地外の北側では平地部分の2か所のトレンチから土師器と須恵器が出土したため、540㎡を3区として発掘調査地に加え、南側では2か所のトレンチから土師器と須恵器が出土したため、420㎡を4区として発掘調査地に加えた。また、山際部分の520㎡と、発掘調査地内東側の1,540㎡からは遺物が出土しなかったため発掘調査地から除いた。道路部分では遺物の出土数が少なかったため380㎡を発掘調査地から除いた。結局960㎡が調査地に加わり、2,440㎡が調査地から除かれ、最終的な要全面発掘調査地は合計で3,470㎡となった。以下に家ノ脇Ⅱ遺跡3区の全面発掘調査の経過を記述する。

第25図　家ノ脇Ⅱ遺跡と周辺の地形（S＝1／2,000）

第26図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区遺構配置図（S＝1／100）

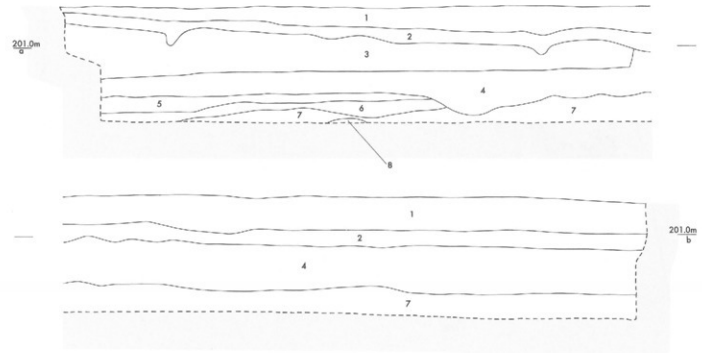
平成13年８月23日：重機で表土から1.2mの深さで掘削を行う。
９月18日：人力による掘削を開始する。
10月18日：集石遺構の実測を開始する。
10月25日：土器溜まりの実測を開始する。
11月12日：人力による掘削が終了する。
12月17日：空撮を実施し、発掘調査が終了する。

第３節　検出遺構（第26図～第29図、図版16）

家ノ脇Ⅱ遺跡３区では土器溜まりを１か所と角礫を敷き詰めた遺構（ＳＸ０１）を１基確認した。

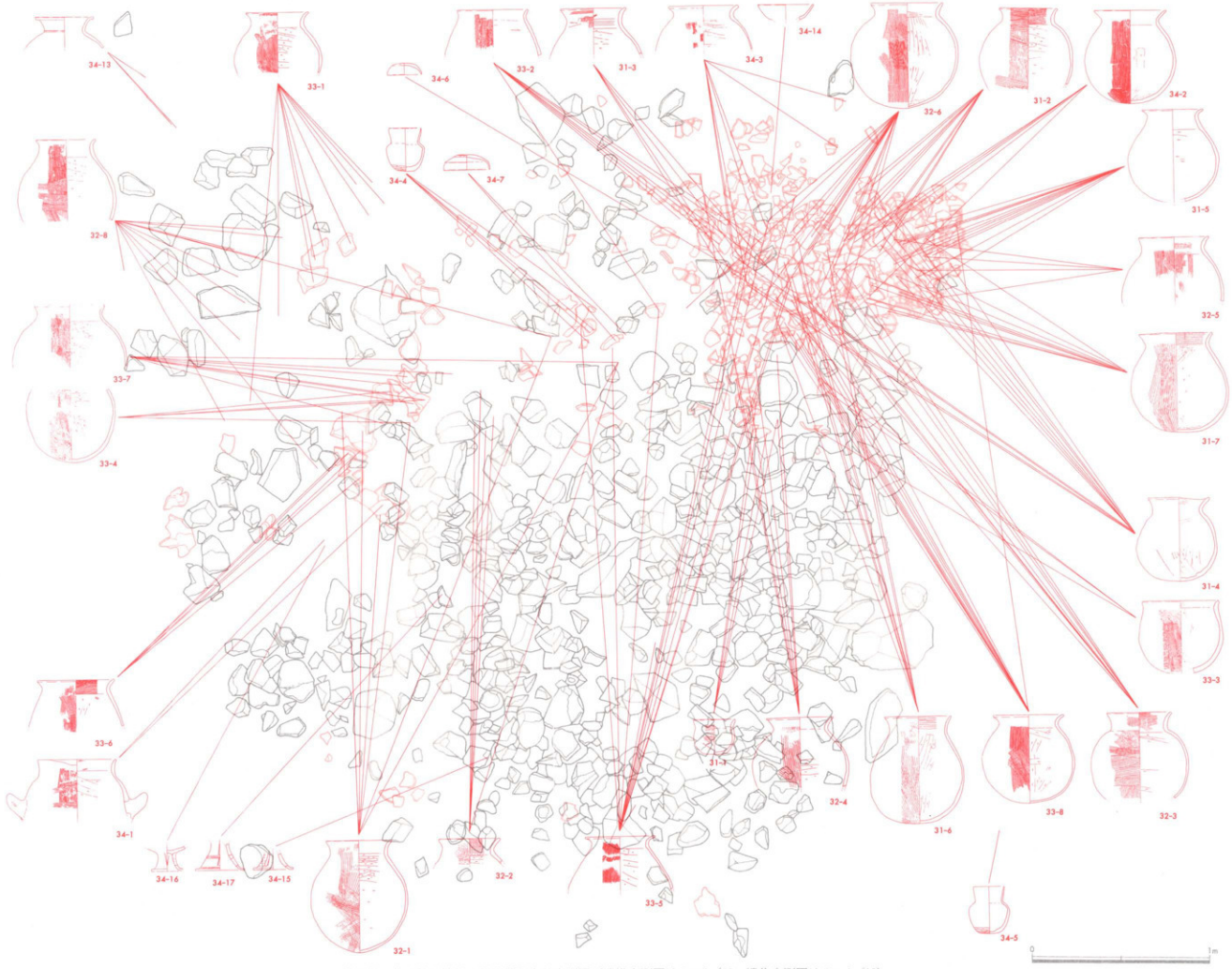
土器溜まり（第28図）：この土器溜まりは黒褐色土層上面にあり、角礫の上に多量の土師器と少量の須恵器が置かれたもので、４ｍ×２ｍを測る。時期は出土した須恵器から６Ｃ後半と考えられる。同時期の土器溜まりは家ノ脇Ⅱ遺跡２区でも３か所確認された。ただし３区の土器溜まりの大半が土師器の甕の破片であるのに対して、２区の土器溜まりは土師器・須恵器の破片の他に、完形品も多く見られる点が異なる。また、土器溜まりの下にある石についても、３区のほとんどが角礫であるのに対して、２区では多くが円礫で角礫が少ない点も異なる。石の種類の割合が異なるのは、３区の位置が山際であり、２区が河原に近いためかもしれない。

ＳＸ０１（第29図）：多量の角礫と３点の円礫を円形に集石した遺構である。出土遺物が無いため確実な時期は不明であるが、土器溜まりと同じく黒色土層上面にあることから６Ｃ後半前後と思われる。また、礫群の下には土坑等は無く遺構の性格は不明である。



1．褐色土（砂粒を多く含む。小レキを含む。炭を少し含む。土器を多く含む。）
2．黒褐色土（砂粒を含む。小レキを含む。炭を少し含む。土器を少し含む。）
3．褐色土（砂粒を含む。小レキを含む。炭を少し含む。）
4．暗褐色砂質土（炭を少し含む。）
5．黒褐砂質土（小レキを少し含む。）
6．黒褐色砂質土
7．明褐色粘（礫洪川の砂。粘の粒は細かい）
8．黄褐色粘（粘の粒は粗い）

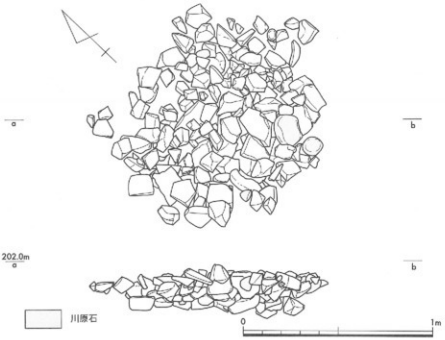
第27図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区中央セクション土層図（Ｓ＝1／50）



第28図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区土器溜まり実測図（遺構実測図はS＝1／20、遺物実測図はS＝1／10）

第４節　出土遺物

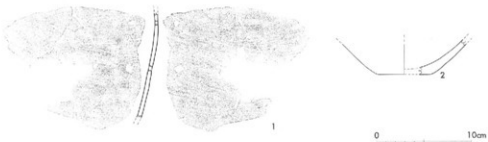
（第30図～第34図・図版17～21）：第29図1は第７層上面から出土した縄文土器で、第29図2は第２層から出土した弥生土器である。第30～34図は土器溜まり出土遺物である。ここでは土師器の甕を中心に述べる。土師器の甕の外面最終調整には①ミガキ（第30図１、２）、②ナデ（第31図３～５）、③１㎝あたり（以下省略）３本のハケメ（第31図６、７、第32図１）、④４本のハケメ（第32図２～４）、⑤５本のハケメ（第32図５、６）、⑥７本のハケメ（第33図１～４）、⑦８本のハケメ（第33図５～８）、⑧９本のハケメ（第34図２）、⑨16本のハケメ（第34図３）の９種類がある。器形は胴部最大径が中央となる球形と、下半となる壺形に別れる。壺形は全体的に不整形で歪んでいる。最終調整と器形の関係をみるとミガキとハケメが４～16本のタイプは球形となり、ナデとハケメが３本のタイプは壺形となる。前者をA、後者をBと分類する。Aは出雲地方平野部からよく出土する土器で搬入品と思われ、Bは頓原町など奥出雲から出土する土器で、在地の土器と考えられる。



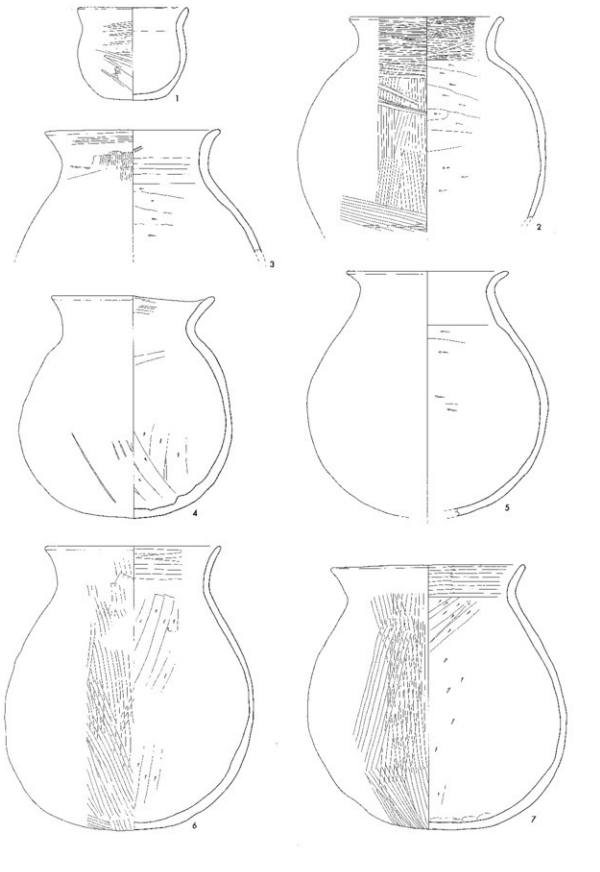
第29図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区ＳＸ01実測図（Ｓ＝1／20）

第５節　小結

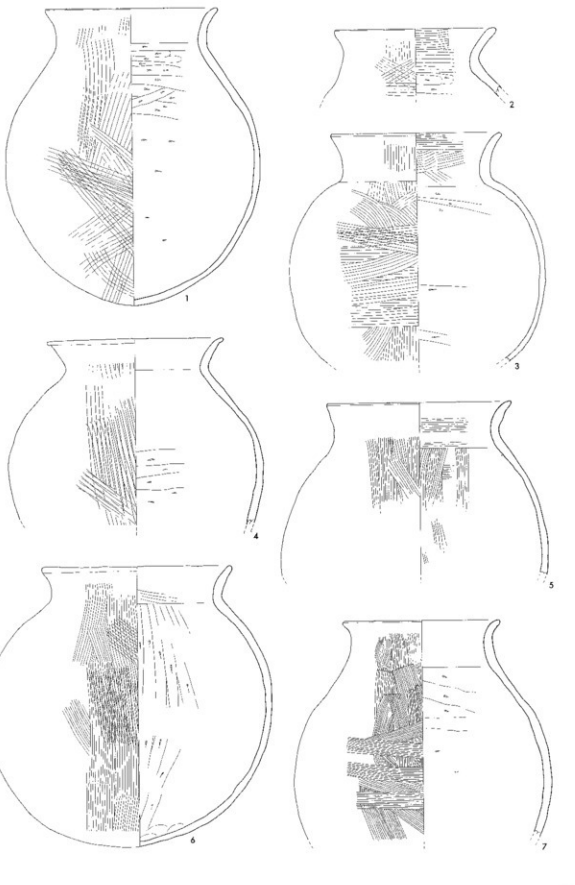
土器溜まりの性格は、祭祀と廃棄の２つが考えられるが、現時点では不明である。また土器溜まりでは遺物が重なり合って出土したにもかかわらず、接合作業後に完形品が１点も存在していないが、このことについては完形品を持ち込んでこの場所で破壊したが洪水などで破片が流失した場合と、完形品は始めから無く大きな土器片が持ち込まれて破壊された場合が考えられる。このことについても現時点では不明である。また、２区では同時期の土器溜まりが確認されているが、２区の土器溜まりからは完形となる遺物が多く出土し、破片自体も大きい。２区と３区の土器溜まりでは性格に相違点があるが、この相違が何に起因するかについては、２区の本報告書に譲りたい。



第30図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物実測図①（Ｓ＝1／4）

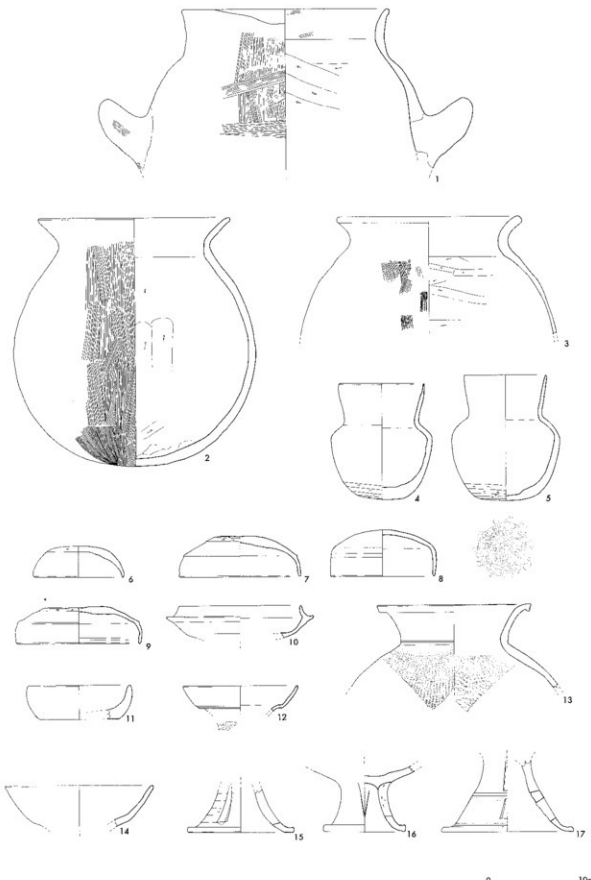


第31図　家ノ脇Ⅱ遺跡3区出土遺物実測図②（S＝1／4）



第32図　家ノ脇Ⅱ遺跡3区出土遺物実測図③（S＝1／4）

第33図　家ノ脇Ⅱ遺跡3区出土遺物実測図④（S＝1／4）



第34図　家ノ脇Ⅱ遺跡３区出土遺物実測図⑤（S＝1／4）

第8表　家ノ脇Ⅱ遺跡3区遺跡出土土器類観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	形式	備考
30−1	21	G15		縄文土器			器高　11.0	外面：ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	外面：褐色 内面：褐色 焼成：良好		外面に黒斑あり
30−2	21	G15		弥生土器	壺or甕	33	底径　5.6 器高　3.7	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：暗褐色 焼成：良好		
31−1	17	土器溜まり		土師器	小型壺?	90	口径　11.3 器高　9.8	外面：ナデ・刷毛目・ミガキ 内面：ナデ	外面：赤褐色 内面：乳白色 焼成：良好		内外面とも赤色顔料が塗ってある
31−2	17	土器溜まり		土師器	甕	65	口径　15.7 器高　22.7	外面：ミガキ・刷毛目 内面：ミガキ・ケズリ	外面：赤褐色 内面：赤褐色 焼成：良好		外面に黒斑あり
31−3	17	土器溜まり		土師器	甕	65	口径　18.2 器高　13.0	外面：刷毛目・ナデ 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ	外面：淡赤褐色 内面：赤褐色 焼成：良好		外面に黒斑あり
31−4	17	土器溜まり		土師器	甕	80	口径　16.9 器高　23.5	外面：刷毛目・ナデ 内面：刷毛目・ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		胴部下半は被熱のため剥離または赤化。外面に黒斑あり
31−5	17	土器溜まり		土師器	甕	50	口径　16.8 器高　25.9	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		内外面に黒斑あり 全体に煤付着
31−6	17	土器溜まり		土師器	甕	80	口径　18.3 器高　30.1	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		胴部下半は被熱のため剥離または赤化。
31−7	17	土器溜まり		土師器	甕	90	口径　20.0 器高　28.0	外面：ナデ・刷毛目 内面：刷毛目・ケズリ・指頭圧痕	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		外面に黒斑あり、煤付着
32−1	18	土器溜まり		土師器	甕	50	口径　18.0 器高　31.4	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		外面に煤付着
32−2	18	土器溜まり		土師器	甕	90	口径　16.5 器高　7.2	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
32−3	18	土器溜まり		土師器	甕	50	口径　17.6 器高　21.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：刷毛目・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
32−4	18	土器溜まり		土師器	甕	33	口径　18.4 器高　19.7	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		外面に煤付着
32−5	18	土器溜まり		土師器	甕	50	口径　19.2 器高　18.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		外面に黒斑あり
32−6	18	土器溜まり		土師器	甕	40	口径　19.4 器高　29.8	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ・指頭圧痕	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		
32−7	19	土器溜まり		土師器	甕	50	口径　13.9 器高　23.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		外面下部に煤付着
33−1	19	土器溜まり		土師器	甕	33	口径　16.8 器高　17.0	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
33−2	19	土器溜まり		土師器	甕	67	口径　19.2 器高　13.1	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ	外面：乳白色 内面：淡褐色 焼成：良好		
33−3	19	土器溜まり		土師器	甕	25	口径　20.7 器高　20.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		取っ手がつく可能性あり 鍋の可能性はない
33−4	19	土器溜まり		土師器	甕	70	胴部径 20.7 器高　20.4	外面：刷毛目 内面：ケズリ	外面：淡赤褐色 内面：黒褐色 焼成：良好		
33−5	19	土器溜まり		土師器	甕	70	口径　19.8 器高　15.0	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
33−6	19	G15		土師器	甕	10	口径　21.2 器高　13.0	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好		
33−7	21	土器溜まり		土師器	甕	33	口径　19.3 器高　17.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好		
33−8	19	土器溜まり		土師器	甕	50	口径　19.4 器高　21.8	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：淡褐色 焼成：良好		
34−1	20	土器溜まり		土師器	鉢?	50	口径　11.4 器高　16.7	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：乳白色 焼成：良好		
34−2	20	土器溜まり		土師器	甕	50	口径　20.0 器高　26.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ・指頭圧痕	外面：黒褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
34−3	20	土器溜まり		土師器	甕	40	口径　19.0 器高　12.5	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好		
34−4	20	土器溜まり		須恵器	小壺	50	口径　8.9 器高　12.2	外面：回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	外面：青灰色 内面：青灰色 焼成：堅緻		

図版番号	図版番号	出土地点	出土層位	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	形式	備考
34-5	20	トレンチ01		須恵器	小壺	75	口径 8.6 器高 13.3	外面：ナデ後、回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：硬質		底部に「X」の刻みあり トレンチ外から出土のものと接合
34-6	20	G15		須恵器	杯蓋	25	口径 9.4 器高 3.3	外面：回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：堅緻	5期～6期	外面上部に「X」が思われる刻みあり
34-7	20	G15		須恵器	杯蓋	60	口径 12.6 器高 4.3	外面：回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：堅緻	4期	ヘラ起こし痕あり
34-8	20	G14		須恵器	杯蓋	67	口径 10.8 器高 4.9	外面：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	外面：青灰色 内面：灰色 焼成：堅緻	4期	外面の一部に灰がかかって自然釉になっている
34-9	20	トレンチ01		須恵器	杯蓋	50	口径 12.7 器高 3.9	外面：回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：堅緻	4期	ヘラ起こし痕あり
34-10	20	G15		須恵器	耳身	8	口径 12.8 器高 3.5	外面：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：堅緻	4期	外面の一部に灰がかかった為になっており緑色がかっている
34-11	21	G15		須恵器	耳身	14	口径 10.6 器高 3.6	摩滅のため不明	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：不良		
34-12	21	G14		須恵器	高杯？	25	口径 12.0 器高 2.7	外面：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	外面：青灰色 内面：灰色 焼成：堅緻		内面に灰がかかっている 外面に文様
34-13	21	G15		須恵器	壺	50	口径 16.0 器高 8.9	外面：ヨコナデ・タタキ 内面：ヨコナデ・タタキ	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：堅緻		
34-14	21	G15		須恵器	高杯？	10	口径 15.4 器高 4.4	外面：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	外面：灰色 内面：青灰色 焼成：堅緻	5期～6期	
34-15	21	G15		須恵器	高杯	67	底径 11.2 器高 4.6	外面：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	外面：灰色 内面：灰色 焼成：堅緻	4期	二方の方形透かし 外面に灰がかかっている
34-16	21	G15		須恵器	台杯	50	底径 8.6 器高 7.0	外面：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：堅緻	5期～6期	透かしは2本で対照的に入っている
34-17	21	G15		須恵器	高杯		底径 14.0 器高 7.6	外面：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	外面：灰黄色 内面：灰白色 焼成：堅緻	4期	四方の方形透かし 透かしは外から内へ穿孔

第6章　川平Ⅰ遺跡

第1節　遺跡の概要

川平Ⅰ遺跡は斐伊川本流沿いの、標高150～170mの岸垂斜面に位置する。縄文時代早期から古墳時代後期にかけての複合遺跡である。遺跡の地形は、ほぼ南向きの岸垂斜面と、その下のやや狭い平坦面から構成されている。発掘調査以前は水田であった。全面発掘調査範囲は2か所に分かれており、西側の調査範囲を1区、東側の調査範囲を2区とした。全面発掘調査面積は、1区が2,600㎡、2区が2,500㎡で、合計5,100㎡となる。

1区では、古墳時代後期の加工段（ＳＢ01）が1棟と硬化面（ＳＸ01）が1か所、古墳時代初頭の加工段が2棟（ＳＢ02、ＳＢ03）、縄文時代の落とし穴が2基と土坑が7基、時期不明の土坑が9基確認された。また、縄文時代と時期不明の合計16基の土坑のうち、8基は土坑内からラグビーボール大の石出土している集石遺構であった。遺跡の南側では標高153m付近で縄文時代の川原跡を確認した。

2区では、弥生時代の加工段（ＳＢ04、ＳＢ05）が2棟と、縄文時代後期の土器溜まりが1か所確認された。

1区・2区共に、遺物の大半は黒色土層中から出土した。この黒色土層は土層観察から、三瓶山麓の板屋Ⅲ遺跡[1]や下山遺跡[2]などで確認された一次堆積である純粋な黒色土層ではなく、一次堆積の黒色土層が崩落等で移動してきた、二次堆積層と考えられる[3]。この黒色土層からは（一部には純粋な縄文土器の単純層も存在するが）、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が混在して出土した。各時代の遺物がほぼ同一のレベルで混在して出土する状況は、黒色土層が二次堆積層である傍証といえる。

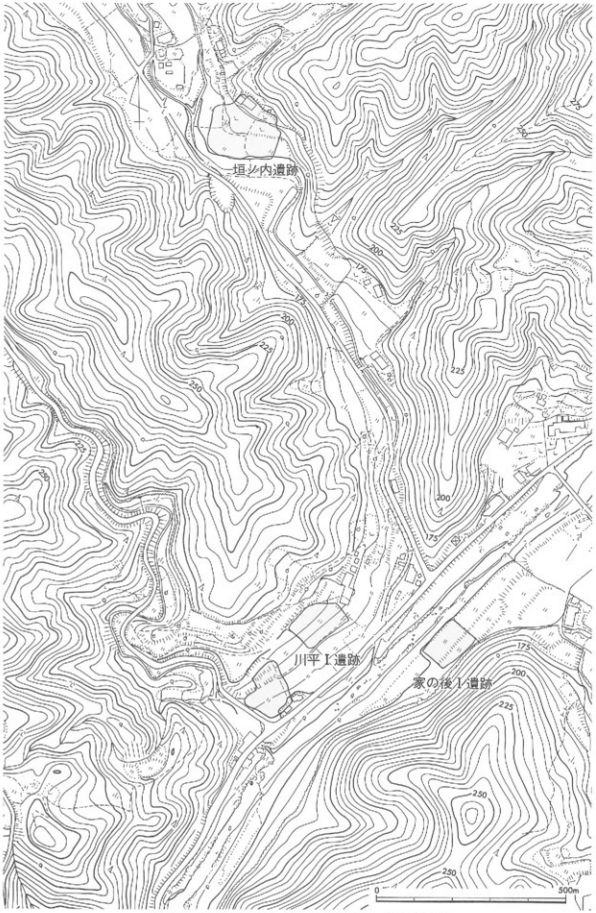
出土遺物は、土器類では縄文時代後・晩期の土器が最も多く出土している。また、仁多町、木次町では初めてとなる早期の押型文土器（黄島式と高山寺式）も出土している。石器・石製品類では石錘、打製石鏃、磨製石斧、勾玉、スクレイパーが出土している。特に石錘は200点以上も出土した。

註

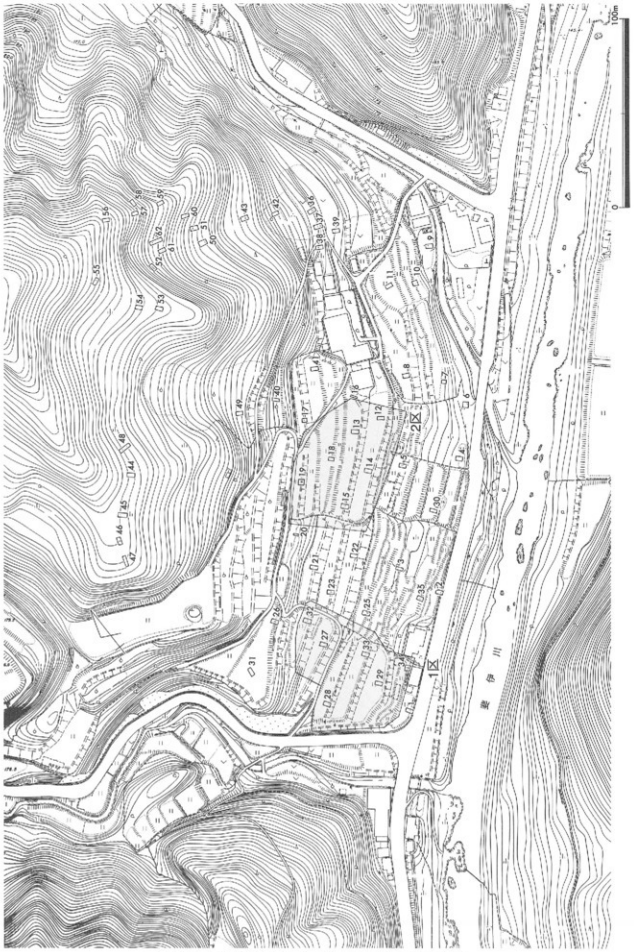
（1）島根県教育委員会『板屋Ⅲ遺跡』志津ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5　1998

（2）島根県教育委員会『下山遺跡（2）』志津ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12　2002

（3）中村唯史氏の御教示による。



第35図　川平Ⅰ遺跡と周辺の地形（S＝1／10,000）



第36図　川平Ⅰ遺跡トレンチ配置図（Ｓ＝1／2,000）

第２節　調査の経過（第36図～第41図）

川平Ｉ遺跡は平成11年３月の分布調査で確認され、20,000㎡が要範囲確認調査地となった。これを受けて平成12年４月から同年５月まで範囲確認調査が行われた。この調査では、４ｍ×２ｍのトレンチが34か所設定され、第９トレンチと第14トレンチと第28トレンチから大量の遺物が出土した。そこで第28トレンチを中心とした範囲2,600㎡（１区）と、第14トレンチを中心とした範囲2,500㎡（２区）、合計5,100㎡が要全面発掘調査地となった。第９トレンチについては、遺物は斜面上段上方からの流れ込みであると判断され、要全面発掘調査地には含まれなかった。また、第９トレンチの遺物が本来存在したと考えられる地点も宅地として改変されており、既に遺物や遺構は消滅したと判断され、要全面発掘調査地には含まれなかった。

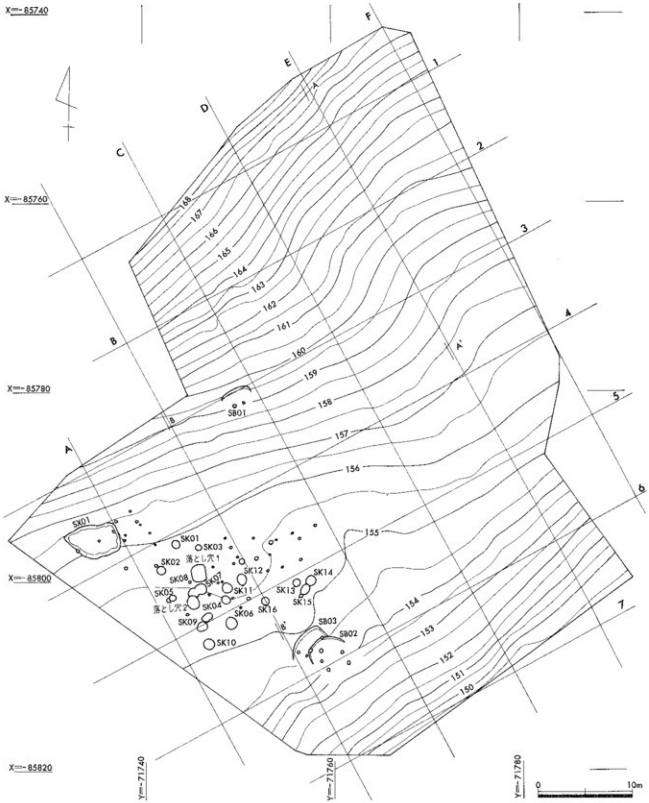
この調査結果を受けて、全面発掘調査は範囲確認調査から継続して、平成12年５月から同年12月まで実施された。また、範囲確認調査では労働安全上の埋由から人力による２ｍ以上の垂直な掘削が禁止され地山を確認できなかった所が幾つもあったことから、表土掘削の実施と同時に重機によるトレンチ調査を行い、地山までの状況を確認した。更に12月には遺跡の広がりを改めて確認するために、要全面発掘調査地の周辺に２ｍ×４ｍのトレンチを27か所設定した。このうち、第42トレンチから大量の遺物が出土した。これらの遺物は流れ込みと判断した。また、周囲の斜面や尾根のトレンチからは遺構は確認されず、遺物もほとんど出土しなかった。遺構は遺物包含層ごと谷に流れ込んだものと判断した。また、第44トレンチ～第48トレンチでは、大量の水が移動した痕跡が確認された(1)。遺跡の南西を流れる榎ノ屋川では近代までカンナ流しが行われいるが、第44トレンチ～第48トレンチで確認された水流の痕跡も、カンナ流しの痕跡と考えられる。

以下に川平Ｉ遺跡の全面発掘調査の経過を記述する。

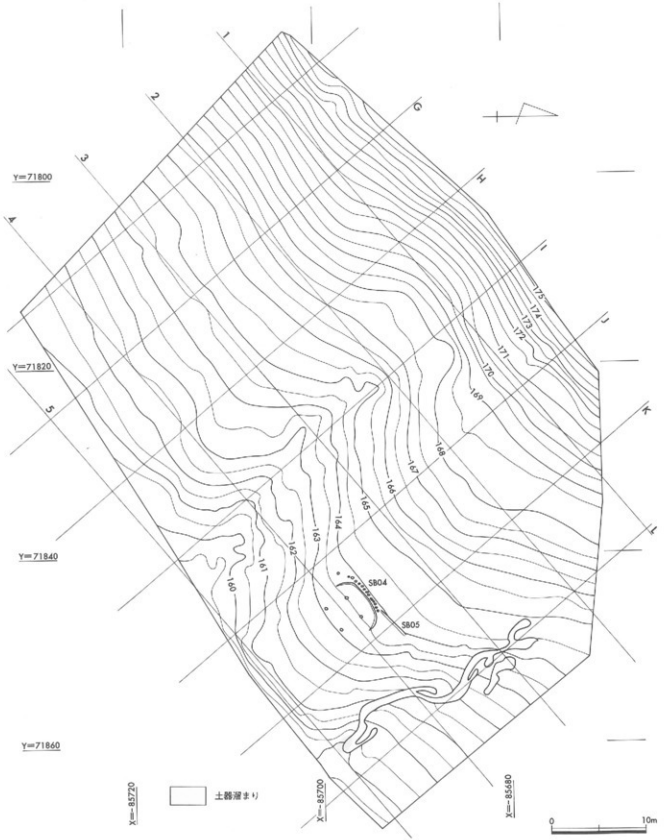
平成12年５月24日：１区で重機による掘削を開始する。
６月１日：１区で人力による掘削を開始する。
６月５日：１区で重機によるトレンチ調査を行う。
７月13日：１区でＳＢ０１を検出する。
７月15日：１区でＳＸ０１を検出する。
８月21日：２区で重機によるトレンチ調査を行う。
８月22日：２区で重機による掘削を開始する。
９月21日：１区でＳＫ０１～ＳＫ０４、落とし穴１を検出する。
９月27日：１区でＳＫ０５～ＳＫ０６を検出する。
９月28日：１区でＳＫ０７～ＳＫ０８、ＳＢ０２～ＳＢ０３、落とし穴２を検出する。
９月29日：１区でＳＫ０９を検出する。２区で人力による掘削を開始する。
９月30日：１区でＳＫ１０～ＳＫ１１を検出する。
11月８日：２区でＳＢ０１とＳＢ０５を検出する。
11月29日：２区で土器溜まりを検出する。
12月５日：遺跡の広がりを再度確認するために調査区周辺の範囲確認調査を開始する。
12月13日：範囲確認調査を完了する。

註

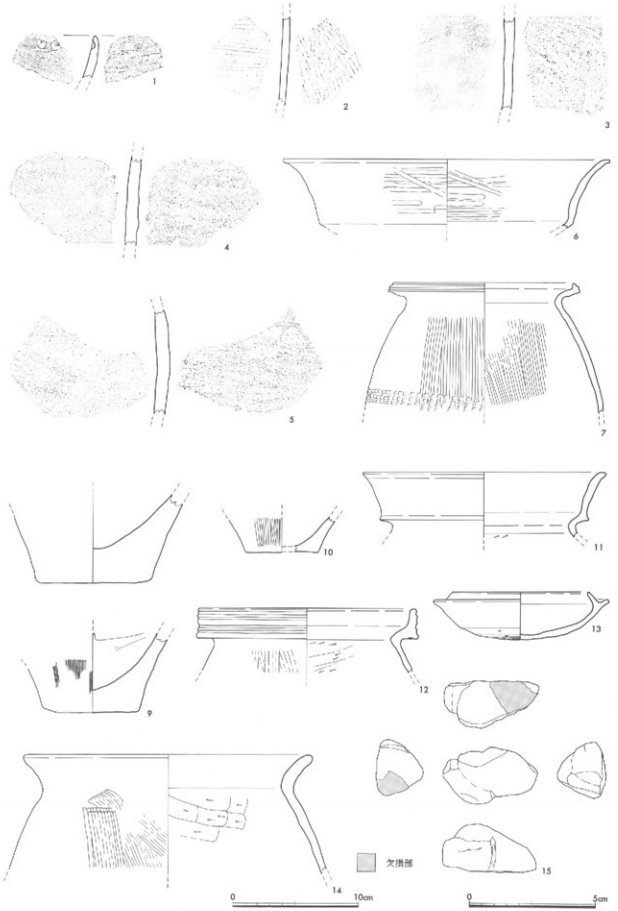
（1）中村唯史氏の御教示による。



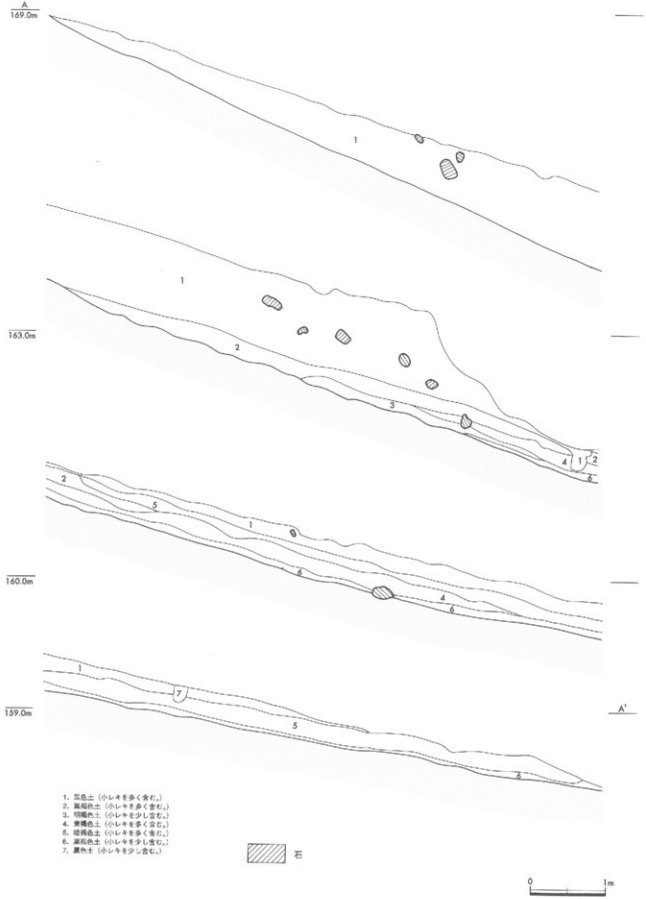
第37図　川平Ⅰ遺跡１区遺構配置図（S＝1／400）



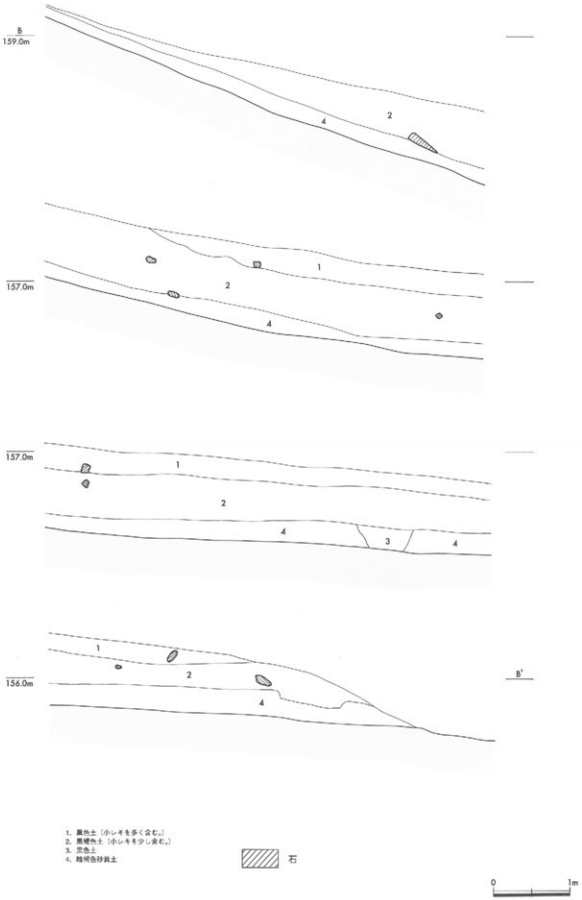
第38図　川平Ⅰ遺跡2区遺構配置図（S＝1／400）



第39図　川平Ⅰ遺跡トレンチ出土遺物実測図（1～14はS＝1／3、15はS＝2／3）



第40図　川平Ⅰ遺跡1区東側セクション土層図（S＝1／50）



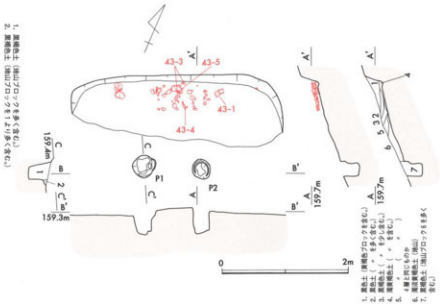
第41図　川平Ⅰ遺跡1区西側セクション土層図（S＝1／50）

第３節　１区の遺構と遺物

１区の概要　遺構は、崖垂斜面下段の平坦面に集中しており、斜面上段・中段からは検出されなかった。古墳時代の建物跡が３棟と硬化面が１か所、縄文時代の落とし穴が２基と縄文時代と考えられる16基の土坑を確認した。16基の土坑には遺構内から数個から十数個の石が出土する集石遺構が８基あった。土坑については縄文土器の出土した土坑と、遺物の出土していない土坑があった。また、ピットが38個確認された。

ＳＢ０１（第42図、図版24）：ＳＢ０１は崖垂斜面の斜面中段で検出された。平面プランは長方形で、幅3.34m、奥行き1.67m、深さ30cmを測る。柱穴と思われる２つのピットを伴い、Ｐ１は直径36cm、深さ40cmで、Ｐ２は直径28cm、深さ40cmを測る。奥壁と両側壁は幅14cm、深さ４cmの壁体溝を伴う。２つのピットから奥壁までの距離を参考に、築造時のプランを推定すると奥行きが３mのほぼ正方形の平面プランであったと考えられる。遺構の廃棄された時期は出土した須恵器から６Ｃ前半と考えられる。

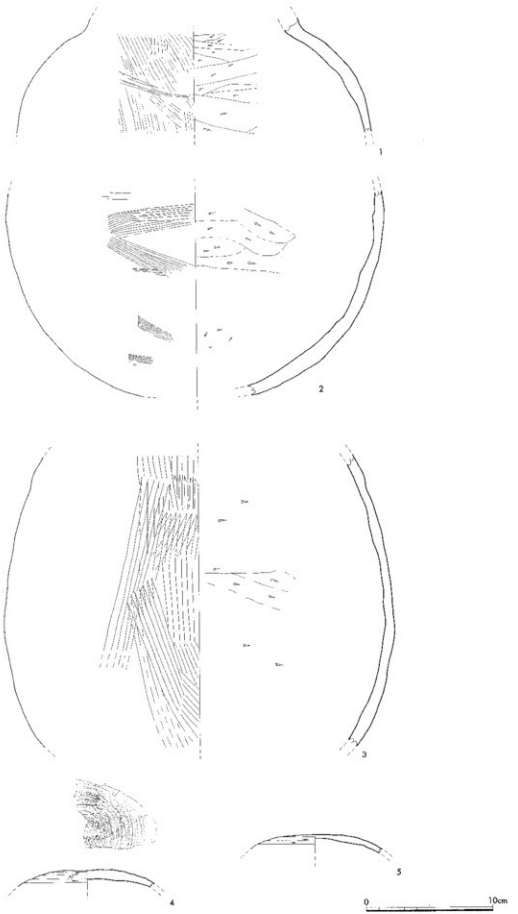
ＳＢ０１出土遺物（第43図）：遺物は奥壁側から多く見つかり、いずれも床面直上で出土した。土師器の甕片と須恵器の坏蓋が出土している。須恵器の坏蓋はどちらも丁寧な回転ヘラケズリが施されており、時期は６Ｃ前半と考えられる。



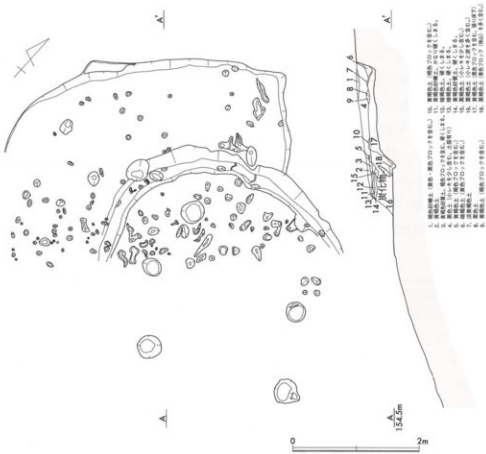
第42図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ01実測図（Ｓ＝1／60）

ＳＢ０２（第44図～第46図、図版24・25）：ＳＢ０２は崖垂斜面平端部の南東端でＳＢ０３と切り合う状況で確認された。土層観察からＳＢ０２がＳＢ０３に先行することが確認できた。平面プランは半円形で、幅4.6m、奥行き4.5m、深さ24cmを測る。柱穴と思われる５つのピットを伴い、Ｐ１は直径33cm、深さ48cmで、Ｐ２は直径24cm、深さ30cmで、Ｐ３は直径30cm、深さ24cmで、Ｐ４は直径33cm、深さ６cmで底に石があり、Ｐ５は直径36cm、深さ30cmを測る。壁際には幅12cm、深さ６cmの壁体溝を伴う。５つのピットの位置から築造時のプランを推定すると奥行き5.4mの楕円形であったと考えられる。薄い張り床を施しており、張り床を除去すると、小さな穴が幾つもある面が検出された。張り床は掘削時の不整形な面を被い水平な床面にするために施されたものと思われる。

遺構の廃棄された時期は出土遺物から小谷式期と考えられる。



第43図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ01出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）

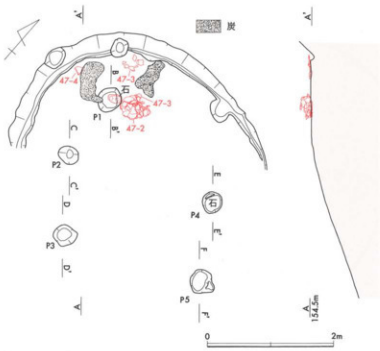


第44図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02・03完掘状況実測図（Ｓ＝1／60）

ＳＢ０２出土遺物(第47図)

：遺物は奥壁側中央部の床面直上から出土した第47図２～５と、遺構埋土中から床面より浮いた状態で出土した第47図１がある。

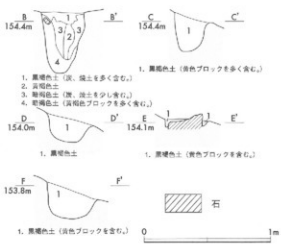
出土状況から第47図２～５はＳＢ０２廃棄時の遺物と思われる。第47図１はＳＢ０２を埋めてＳＢ０３を築造する際に流れ込んだ遺物と思われる。第47図２と３は小谷式の甕と考えられる。第47図１は口縁下端部が垂下していないが、口縁部が厚く、端部が丸いことから九重式と判断した。こ



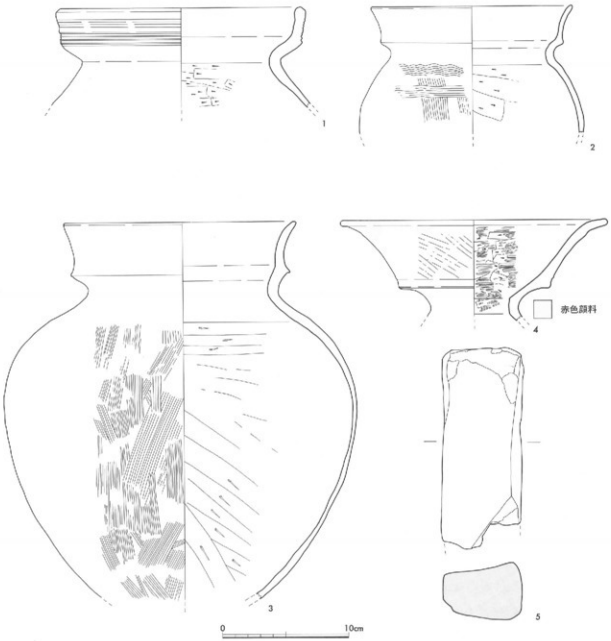
第45図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02実測図（Ｓ＝1／60）

の土器と同じ形の土器は尾白Ⅱ遺跡からも出土している（第21図10）。奥出雲に特徴的な土器なのかもしれない。

第47図４は鼓形器台である。この器台は炭が散乱していた地点から出土した。第47図５は砥石で、ピット１の第１層から出土した。ＳＢ０２の床面から出土した遺物は大きな破片が多く、置き忘れたものとは思えない。炭の上に器台が置かれていた点から祭祀行為があったとも考えられるが、完形品が出土していない点から、ＳＢ０２を廃棄する際に土器片を同時に廃棄した可能性が高いと思われる。



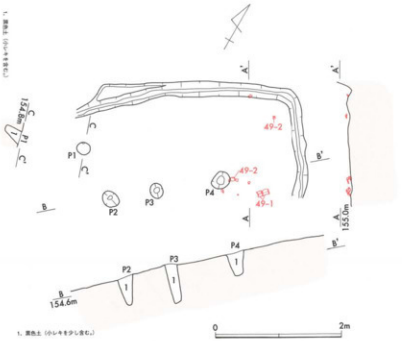
第46図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02ピット実測図（Ｓ＝1／30）



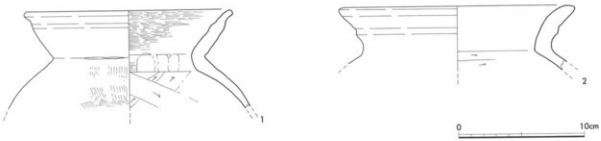
第47図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ02出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）

ＳＢ０３（第48図・図版24～25）：ＳＢ０３はＳＢ０２に後続する遺構である。平面プランは南西側が不明瞭であるが、ほぼ長方形で、幅3.6m、奥行き2.2m、深さ18cmを測る。床面には４つのピットを伴う。Ｐ１は直径20cm、深さ28cmで斜めに掘り込まれている。Ｐ２は直径24cm、深さ40cmを測る。Ｐ３は直径20cm、深さ60cmを測る。Ｐ４は直径30cm、深さ36cmを測る。Ｐ２～Ｐ３のうち２つが主柱穴と思われるが、どのピットが主柱穴となるかは確証がない。壁際には幅16cm、深さ8cmの壁体溝を伴う。Ｐ４から奥壁までの距離を参考に、築造時のプランを推定すると奥行きは4.6mと考えられる。厚さ2cmの張り床を施しており張り床を除去すると小さな穴が幾つも検出された。掘削時の面と思われ、この面を被い水平な床面にするために張り床をしたものと思われる。時期は出土遺物から大東式期と考えられる。

ＳＢ０３出土遺物（第49図）：遺物は奥壁側とピット２付近から見つかった。いずれも床面直上で出土している。第49図1は甕で口縁部外面上半に凹みがある。第47図2も甕で口縁部外面中位に、小谷式の甕の口縁部下端に見られる突出部の退化したものと思われるわずかな突出が認められる。いずれも大東式の甕であると考えられる。



第48図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ03実測図（Ｓ＝1／60）



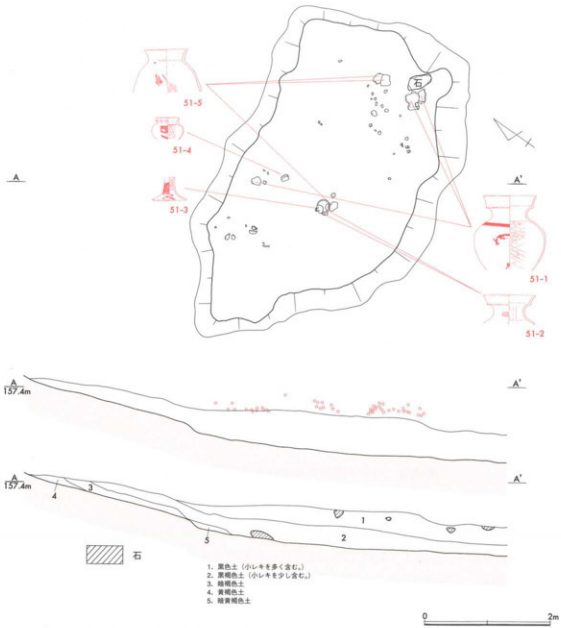
第49図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ03出土遺物実測図（Ｓ＝1／３）

ＳＸ０１（第50図・図版26）：ＳＸ０１は１区西端の崖垂斜面直下の平端部に位置する。平面プランは歪な長方形で、周辺より最高で20cmほど高い台状の遺構となっている。規模は、長さ5.4m、幅2.8mを測る。土層観察からこの遺構は当時の地面を削り出して台状に成形したものと判断した。床面の硬化が遺構築造時になされたものか、使用するうちに自然に硬化したものかは不明である。遺構の時期は床面出土遺物から小谷式期と考えられる。また、この遺構の硬化面下の黒色土層（第

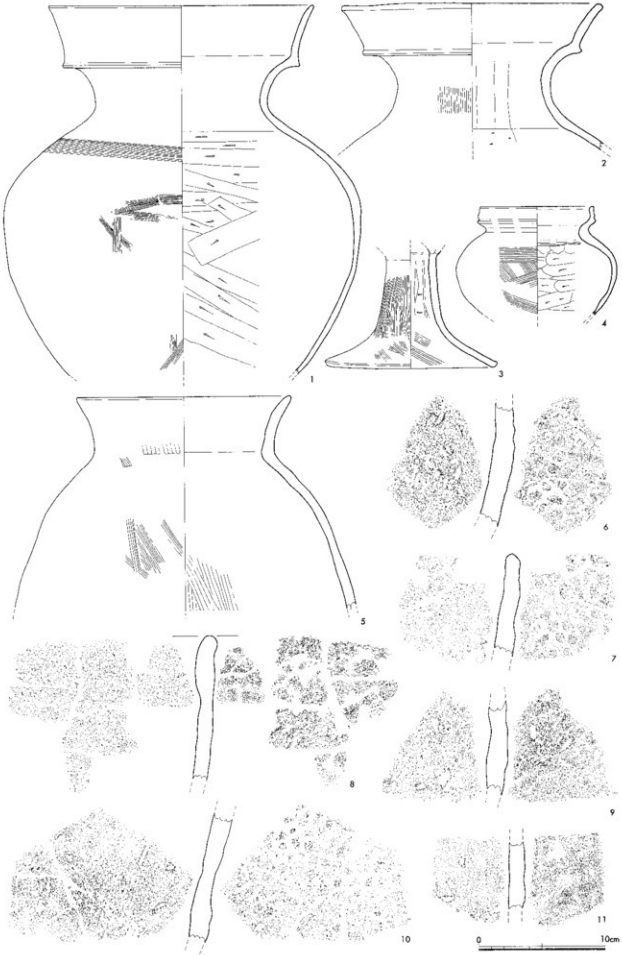
１層）からは縄文時代早期の高山寺式の土器が大量に出土した。遺構の性格は不明である。

ＳＸ０１出土遺物（第51図１～５）：遺物はＳＸ０１の床面直上から図示した状況で出土した。第51図１は口縁部から肩部までは完形に近い形で残っていたが胴部と底部は失われていた。第51図３は脚部は完形に近い形で残っていたが坏部は失われていた。第51図５は口縁部から胴部は完形に近い形で残っていたが底部は失われていた。以上の遺物については残存部分については粉々に破壊されていない。また、第51図２や第51図４も残存部分は完形ではないが、破片自体は大きく、粉々には破壊されてはいなかった。遺物の様式はいずれも小谷式と考えられる。

ＳＸ０１硬化面下黒色土層（１層）出土遺物（第51図６～11）：この層から出土した押型文土器は、いずれもポジティブな楕円押型文土器で、胎土には繊維を含んでいたと考えられる。また、型式は高山寺式と考えられる。図示した以外にも文様は既に摩滅により失われているが、胎土・焼成・色調・器壁の厚さなどから同一の個体と考えられる小片が多数存在する。



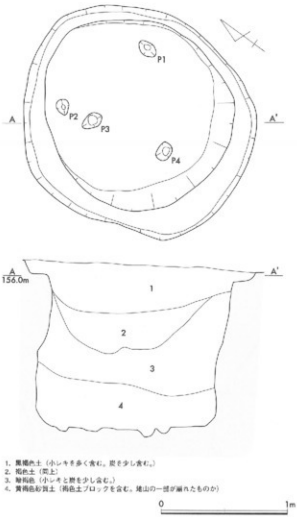
第50図　川平Ⅰ遺跡ＳＸ01実測図（Ｓ＝1／60、遺物Ｓ＝1／10）



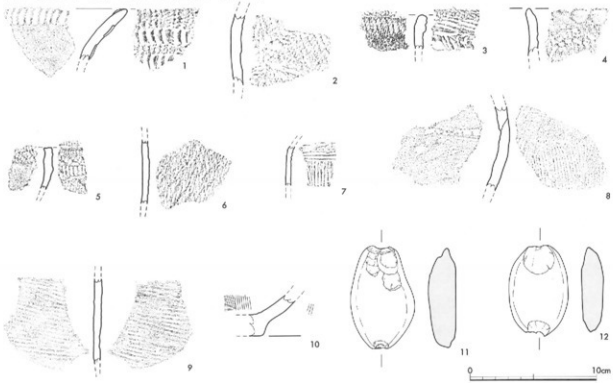
第51図　川平Ⅰ遺跡ＳＸ01出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）

落とし穴１（第52図・図版27）：落とし穴１は崖垂斜面下の平坦部で検出した。平面プランはほぼ円形で、上端に段を設ける。遺構の規模は検出面での直径が1.8m、１段下の直径が1.5m、底面の直径1.4m、段の深さは12cm、検出面からの深さは1.2mを測る。底面には４個の小ピットがある。Ｐ１は平面プランが楕円形で、上面の長径18cm、短径12cm、底面の直径15cm、深さが7cmを測る。Ｐ２は平面プランがほぼ円形で、上面の直径10cm、底面の直径が４cm、深さが４cmを測る。Ｐ３は平面プランが楕円形で、上面の長径18cm、短径11cm、底面の直径８cmで深さが４cmを測る。Ｐ４は平面プランが楕円形で、上面の長径14cm、短径11cm、底面の直径６cm、深さが５cmを測る。遺構の規模と底面の小ピットの存在から、落とし穴であると判断した。上端の段は、落とし穴の存在を隠すために小枝等を渡す段と考えられる。出土遺物から遺構の時期は縄文時代前期と考えられる。

落とし穴１出土遺物（第53図）：遺構埋没開始の時期を示す第４層から出土した遺物は、



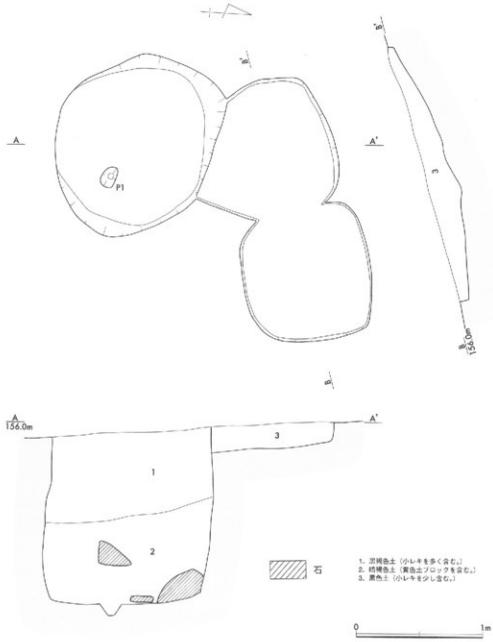
第52図　川平Ｉ遺跡落とし穴１実測図（Ｓ＝1／３）



第53図　川平Ｉ遺跡落とし穴１出土遺物実測図（Ｓ＝1／30）

第53図７・９である。第53図７は外面に直交する櫛描き文が施文され、内面はナデ調整である。第53図９は内・外面とも２枚貝条痕が施されており、縄文時代前期の土器と考えられる。第53図11・12は石錘で、重量の分類では第53図11がM、第53図12がSである。（重量の分類については第７章第３節を参照）

落とし穴２（第54図・図版27）：落とし穴２は落とし穴１の南側に位置する。平面プランはほぼ円形で、検出面での直径1.4m、底面の直径1.2m、深さ1.3mを測る。底面には１個の小ピットがあり、上面の長径18cm、短径12cm、底面の直径５cm、深さ10cmを測る。ＳＫ０８と切り合っており、ＳＫ０８より新しい。遺構の規模と底面の小ピットから、落とし穴であると判断した。落とし穴１とは異なり上端の段は確認できなかった。検出面のレベルが落とし穴１とほぼ同じであることを考えると元々段が存在しなかったと考えられる。遺構の時期は縄文時代後・晩期以前と考えられる。

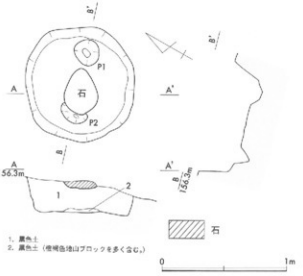


第54図　川平Ⅰ遺跡落とし穴２・ＳＫ07・ＳＫ08実測図（Ｓ＝1／30）

落とし穴２出土遺物（第55図）：遺構埋没の時期を示す第２層から出土した遺物は、第55図２～４である。第55図２は底部で、外面に縄文を施し、内面はナデており、縄文時代中期の土器と考えられる。第55図３は外面に縦方向の貝殻条痕を施し、内面はナデており、縄文時代後・晩期の土器と考えられる。第55図４は粗製土器の口縁部で外面を板状工具で粗くナデ、内面はナデ調整を行っており、縄文時代後・晩期の土器と考えられる。第55図５は安山岩製の石鏃で、第１層から出土した。

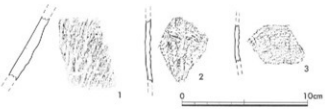
第55図　川平Ⅰ遺跡落とし穴２出土遺物実測図（１～４はＳ＝１／３、５はＳ＝２／３）

ＳＫ０１〔集石遺構〕（第56図・図版27）：ＳＫ０１は崖垂斜面下の平坦部の土坑の中では最も斜面よりに位置する。平面プランはほぼ円形で、検出面での直径は90cm、底面の直径は75cm、深さは27cmを測る。底面には２個の小ピットがあり、Ｐ１はほぼ円形で、上面の直径20cmで底面の直径５cmで深さ７cmを測り、Ｐ２は楕円形で上面の長径23cm、短径13cm、底面の長径５cm、短径２cm、深さ10cmを測る。検出面で風化した楕円形の石を１点確認した。この石は平面プランのほぼ中心に位置する。縄文時代中期前葉から中葉以前に埋没したと考えられる。



第56図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ01実測図（Ｓ＝1／30）

ＳＫ０１出土遺物（第57図）：第57図１は外面に撚りの粗い縄文を施し、第57図２は縄文地に薄い隆帯を張り付け貝の背圧痕を施しており、いずれも船元２式と考えられる。第55図３は外面に縄文を施文し、内面をナデている。



第57図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ01出土遺物実測図（Ｓ＝1／３）

ＳＫ０２〔集石遺構〕（第58図・図版27）：ＳＫ０２は崖垂斜面下の平坦部、ＳＫ０１の南側に位置する。平面プランはほぼ円形で、検出面での直径は100cm、底面の直径85m、深さ80cmを測る。底面には壁に沿った形で、楕円形の小ピットが４個ある。Ｐ１は上面の長径が10cm、短径が７cm、底面の長径が６cm、短径が３cm、深さが５cmを測る。Ｐ２は上面の長径が20cm、短径が９cm、底面の長径が11cm、短径が５cm、深さが16cmを測る。Ｐ３は上面の長径が21cm、短径が12cm、底面の長径が11cm、短径が６cm、深さが５cmを測り、

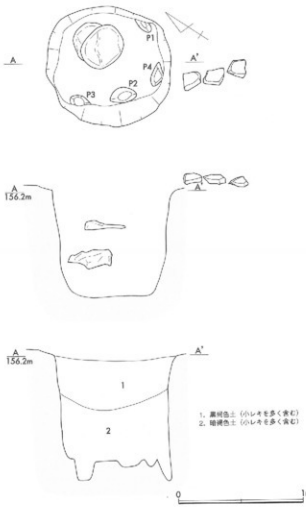
Ｐ４は上面の長径が17cm、短径が８cm、底面の長径が９cm、短径が７cm、深さが18cmを測る。

土坑内からはやや大きめの角礫を第１層から１点、第２層から１点、合計２点確認した。これらの角礫はともに床面から浮いた状況であった。遺構の埋没開始時期については、第２層から遺物が出土していないため不明である。ただし、後述するように第１層からは縄文時代前期の土器が出土しているため、遺構自体の年代は縄文時代前期より古いと言える。遺構の性格については、規模から落とし穴ではないと考えられるが、どういった遺構であるかは不明である。この遺構のように床面の壁際に４個の小ピットを持つものは、川平Ⅰ遺跡内には他にない。

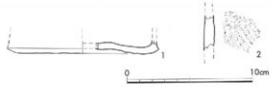
また、遺構の南東には隣接して２点の円礫（Ｓ１、Ｓ２）と１点の角礫（Ｓ３）が直列に並んでいるのを確認した。この内、Ｓ１とＳ２は同じ円礫を半分に割った、もしくは割れたもので、接合面をお互いに正反対の方向に向けて（Ｓ１は北西、Ｓ２は南東）配置されている。これら３点の礫が遺構と関連するものかは不明である。

ＳＫ０２出土遺物（第59図・図版27）：第59図１は底部と思われるが、器壁が薄い点が気になる。第59図２は外面には粗い縄文を施しており、内面はナデている。器壁は厚い。第59図１は彦崎Ｚ式併行の可能性が考えられ、第59図２は前期末～中期初頭のの土器と考られる。

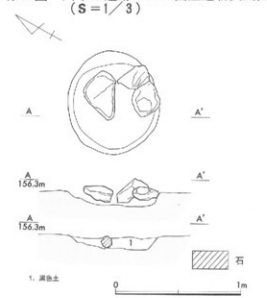
ＳＫ０３〔集石遺構〕（第60図・図版28）：ＳＫ０１の東側に位置する。平面プランはほぼ円形で、検出面での直径は70cm、底面の直径は57cm、深さは10cmを測る。遺構内からは３点の角礫を確認した。角礫は大半が床面から浮いた状況であった。遺物は確認できなかった。また、遺構の時期も不明である。



第58図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ02実測図（Ｓ＝1／30）



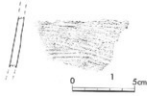
第59図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ02出土遺物実測図（Ｓ＝1／３）



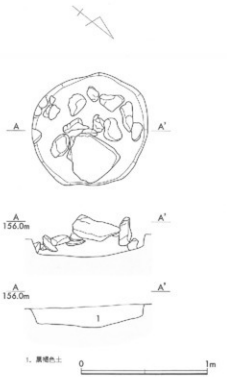
第60図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ03実測図（Ｓ＝1／30）

ＳＫ０４〔集石遺構〕（第62図・図版28）：ＳＫ０４は崖垂斜面下平坦部の遺構が集中する南側のほぼ中央に位置する。平面プランはほぼ円形で、検出面での直径は92㎝、底面の直径85㎝、深さ16㎝を測る。遺構内からは幅が40㎝以上の大きな角礫が１点、小さな角礫が18点、合計19点の角礫を確認した。角礫の大半は床面から浮いた状況であった。縄文時代後期の土器が出土しているが流れ込みの可能性も有り、遺構の時期は縄文時代後期以前であるとしかいえない。

ＳＫ０４出土遺物（第61図）：外面には２枚貝条痕を施し、内面はナデている。縄文時代後期の土器と考えられる。



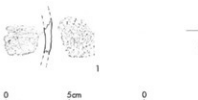
第61図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ04出土遺物実測図（Ｓ＝1／３）



第62図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ04実測図（Ｓ＝1／30）

ＳＫ０５（第64図・図版27）：ＳＫ０５は、土坑群内では最も南西側に位置し、円形の土坑と楕円形の土坑が接触している。円形の土坑をＡ、楕円形の土坑をＢとすると、Ａは検出面での直径70㎝、底面の直径63㎝、深さ24㎝を測り、Ｂは長径70㎝、短径底面の直径36㎝、深さ25㎝を測る。両者の切り合いは不明である。時期はＡは遺物から縄文時代中期以前と考えられる。Ｂは遺物が無く不明である。また遺構の性格も不明である。

ＳＫ０５Ａ出土遺物（第63図）：縄文時代中期の土器と思われる遺物が出土している。外面は縄文を施したのち軽くナデており、内面はナデている。第63図2は石鏃であるが、石材は不明である。



第63図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ05Ａ出土遺物実測図（１はＳ＝１／３、２はＳ＝２／３）

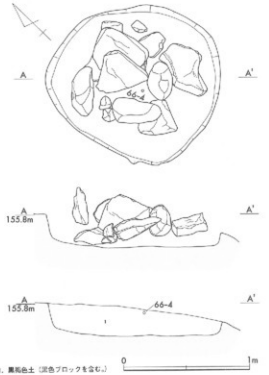
第64図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ05実測図（Ｓ＝1／30）

ＳＫ０６〔集石遺構〕（第65図・図版29）：ＳＫ０６は崖垂斜面下平坦部の南東端に位置する。平面プランは円形で、検出面での直径は140㎝、底面の直径は130㎝、深さは24㎝を測る。遺構内から

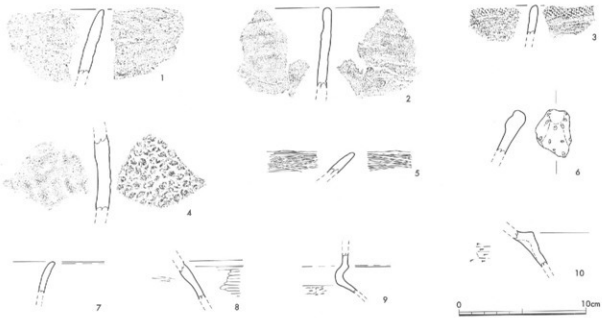
は幅30cm以上の角礫８点と、幅20cm以下の角礫５点、合計13点の角礫を確認した。いずれの角礫も床面から浮いた状況であった。時期は土師器なども出土しているが、縄文時代早期まで遡る可能性がある。

ＳＫ０６出土遺物（第66図）：土師器から縄文時代早期の土器まで出土している大半が流れ込みの遺物と考えられる。

第66図１～３・７～10は遺構検出時に確認された検出面出土の遺物であり、第66図５・６は第１層上層から出土した土器である。これらの遺物は全て流れ込みと考えられる。一方、第66図５は遺構内の集石部分中央から出土しており、ＳＫ０６の埋没時期に最も近い遺物と考えられる。第66図５は外面にポジティブな楕円押型文を施しており、内面はナデ調整を行っている。型式は高山寺式と考えられる。



第65図　川平Ｉ遺跡ＳＫ06実測図（Ｓ＝1／30）



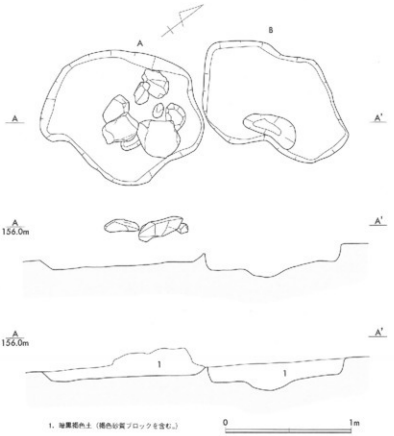
第66図　川平Ｉ遺跡ＳＫ06出土遺物実測図（Ｓ＝1／3）

ＳＫ０７・ＳＫ０８（第54図・図版27）：ＳＫ０７とＳＫ０８は接続しており、ＳＫ０８とした部分は落とし穴２と切り合って存在している。平面プランから円形と正方形の２つの遺構が切り合っているものと解釈したが、土層から同一の遺構である可能性も考えられる。

ＳＫ０７は平面プランが正方形で、検出面での一辺の長さが105cm、底面の長さが98cm、深さは

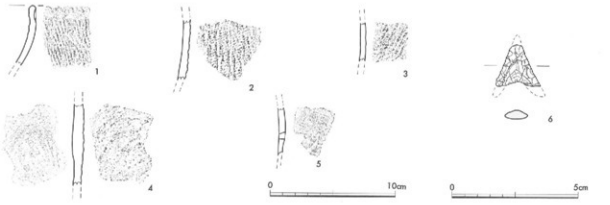
25cmを測る。ＳＫ０８は平面プランがほぼ円形で、直径120cm、底面の直径は110cm、深さは18cmを測る。両者とも遺構内からは遺物は出土しなかった。時期、性格ともに不明である。

ＳＫ０９〔集石遺構〕（第67図・図版29）：ＳＫ０９は、ＳＫ０６とＳＫ１０の東側に位置する。２つの歪な長方形の遺構が接触した遺構で、南西側の遺構をＡ、北東側の遺構をＢとする。両者の切り合いは不明である。Ａは検出面で長径130cm、短径105cm、底面の長径120cm、短径90cm、深さ10cmを測る。遺構内からは幅25cm以上の角礫が４点、20cm以下の角礫が２点、合計６点の角礫が出土した。これらの角礫はいずれも床面から浮いた状況であった。遺構の時期は出土遺物から中期前半以前と考えられる。Ｂは検出面で長径120cm、短径85cm、底面の長径115cm、短径75cm、深さ22cmを測る。底面の東壁側が窪んでいた。遺構内からは礫も遺物も出土しなかった。



第67図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ09実測図（Ｓ＝1／30）

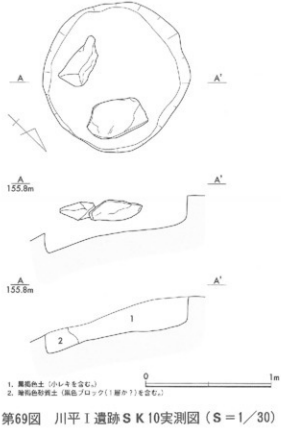
ＳＫ０９Ａ出土遺物（第68図）：第68図３・５・６は遺構埋土から出土した遺物で流れ込みの可能性がある。一方、第68図１・２・４は集石の下から出土しており、遺構の埋没時期に最も近い遺物と考えられる。第68図1は口縁部で、外面に縄文を施文し口縁には貝殻の圧痕を施し、内面はナデている。第68図２は外面に粗い縄文を施文し軽くナデ、内面はナデている。第68図４は外面を板状工具で粗くナデ、内面は板状工具でナデたのち丁寧なナデ調整を行っている。第68図１・２の縄文土器は船元式で、第68図４は船元式に並行する土器と考えられる。



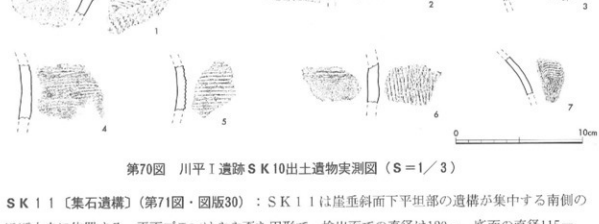
第68図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ09Ａ出土遺物実測図（１～５はＳ＝１／３、６はＳ＝２／３）

ＳＫ１０〔集石遺構〕（第69図・図版29）：ＳＫ１０は崖垂斜面下平坦部の南端、ＳＫ０９の南側に位置する。平面プランは円形で、検出面での直径は117㎝、底面の直径は103㎝、深さは25㎝を測る。遺構内からは長さ40㎝以上の角礫が２点出土した。いずれの角礫も床面から浮いた状況であった。床面が傾斜しているが、第２層を遺構埋土と誤認して掘削した可能性もある。時期は縄文時代中期前半以前と考えられる。

ＳＫ１０出土遺物（第70図）：第70図７の土師器片は遺構検出時に出土したもので流れ込みと考えられる。第70図１～６は遺構埋土から出土したもので、遺構の埋没時期に最も近い遺物と考えられる。第70図１・２は縄文土器の口縁部で船元２式と考えられる。第68図1は外面には縄文地の上に隆帯を貼付し刻目を入れ、口縁部端を肥厚させ縄文を施し、口縁部端の下に爪形文を施し、内面はナデ調整をし、口縁部端に縄文を施している。第70図２は外面には縄文地の上に隆帯を貼付し爪形文を施し、内面はナデで口縁部端には爪形文を施している。第70図３は屈曲部で、外面には縄文を施し、内面はナデている。第70図４と５は外面には２枚貝条痕を施し、内面はナデている。第70図６は内外面ともに２枚貝条痕を施している。第70図１・２は船元２式、第70図３は船元式、第70図５・６は船元式に並行する土器と考えられる。



第69図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ10実測図（Ｓ＝1／30）

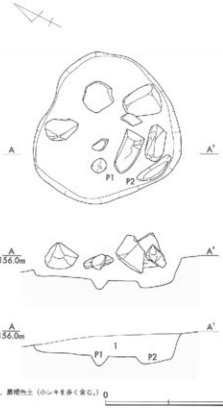


第70図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ10出土遺物実測図（Ｓ＝1／３）

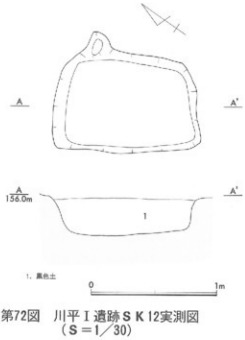
ＳＫ１１〔集石遺構〕（第71図・図版30）：ＳＫ１１は崖垂斜面下平坦部の遺構が集中する南側のほぼ中央に位置する。平面プランはやや歪な円形で、検出面での直径は120㎝、底面の直径115㎝、深さ20㎝を測る。底面には円形のピットが１個と、楕円形のピットが１個ある。Ｐ１は円形のピットで上面の直径が12㎝、底面の直径が3㎝で、深さが8㎝を測る。Ｐ２は楕円形のピットで上面の長径が32㎝、短径が10㎝、底面の長径が23㎝、短径が５㎝、深さが６㎝を測る。遺構内からは長さが

35cm以上の大きな角礫が５点、小さな角礫が２点、合計７点の角礫が出土した。角礫は床面から浮いた状況であった。遺構内から遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＫ１２（第72図）：ＳＫ１２はＳＫ１１の東側に位置する。平面プランは長方形で、北側に張り出した部分がある。遺構の規模は検出面での長さで115cm、幅80cm、底面の長さは95cm、幅65cm、深さ30cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第71図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ11実測図
（Ｓ＝1／30）



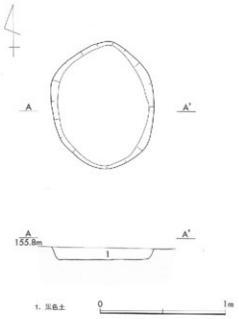
第72図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ12実測図
（Ｓ＝1／30）

ＳＫ１３（第73図）：ＳＫ１３はＳＫ１４・ＳＫ１５の西側に位置する。平面プランは楕円形で、検出面での長径は100cm、短径87cm、底面の長径は95cm、幅73cm、深さ10cmを測る。遺物は時期不明の土器の細片が出土している。

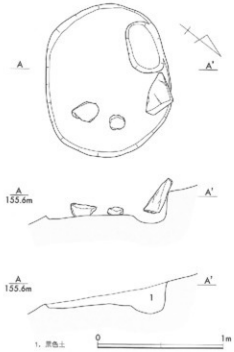
ＳＫ１４〔集石遺構〕（第73図・図版30）：ＳＫ14は崖垂斜面下平坦部の南東、ＳＫ１５の北側短径28cm、底面の長径は37cm、幅19cm、深さ5cmを測る。遺構内からは３点の角礫が出土した。平面プランは楕円形で、検出面での長径は122cm、短径98cm、底面の長径は114cm、幅94cm、深さ20cmを測る。底面の西壁際に楕円形に窪んだか所がある。この窪みは長径42cmである。２点は床面直上から、１点は床面から浮いた状況で出土した。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＫ１５（第75図・図版30）：ＳＫ１５は崖垂斜面下平坦部南東、ＳＫ１４の南側に位置する。角丸長方形に巡る溝に、円形の張り出しが伴う遺構である。溝が巡る範囲は、溝の外側の長さが113cm、幅80cmで、溝に囲まれた内側の範囲は長さが93cm、幅55cmを測る。溝自体の幅は12cm～20cmで、深さは７cmを測る。張り出し部は検出面で直径45cm、底面の直径は10cm、深さは３cmを測る。遺物は石器が１点出土した。時期は縄文時代以前と考えられる。

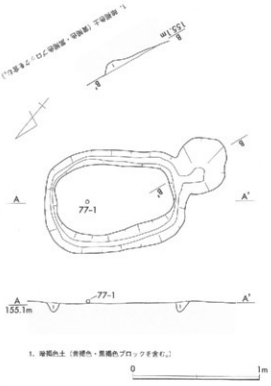
ＳＫ１５出土遺物（第77図）：図示した石器は遺構床面の中央から出土した。横長剥片を直角三角形に近い形に割り、薄い辺を刃部として連続剥離調整が施されている。縄文時代の遺物と考えられる。



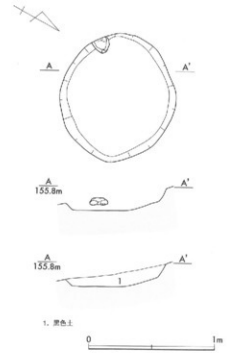
第73図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ13実測図
（Ｓ＝1／30）



第74図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ14実測図
（Ｓ＝1／30）



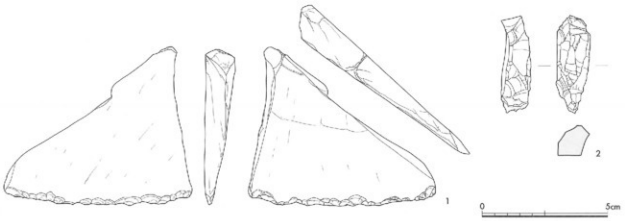
第75図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ15実測図（Ｓ＝1／30）



第76図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ16実測図
（Ｓ＝1／30）

ＳＫ１６（第76図）：ＳＫ１６はＳＫ０６とＳＫ１３の中間に位置する。平面プランはほぼ円形で、検出面での直径は90㎝、底面の直径は80㎝、深さは17㎝を測る。遺構内からは１点石が出土しているが、地山のものと考えられる。時期は縄文時代後期以前と考えられる。

ＳＫ１６出土遺物（第77図）：石核が埋土中から１点出土した。材質は鉄石英と考えられる。この他にも縄文時代後期の土器の細片が出土している。



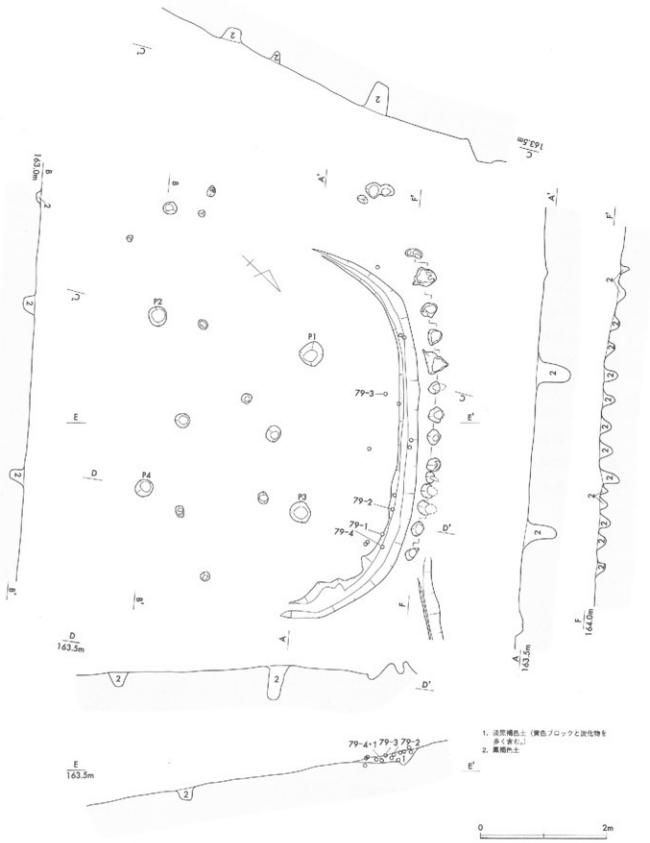
第77図　川平Ⅰ遺跡ＳＫ15・ＳＫ16出土遺物実測図（Ｓ＝２／３）

第４節　２区の遺構と遺物

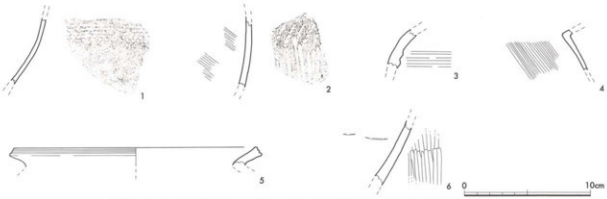
２区の概要　遺構は崖垂斜面中段から検出され、斜面上段からは検出されなかった。遺構は弥生時代の建物跡が２棟と、縄文時代後期の土器溜まりが１か所確認された。

ＳＢ０４（第78図・図版26）：ＳＢ０４は２区の東側の斜面下段で検出された。平面プランは床面で、幅5.84m、奥行き4.4m、深さ28㎝の長方形である。柱穴と思われる4つのピットは、ピット間の距離が2.5m～2.7mを測り、Ｐ１は直径38㎝、底面径22㎝、深さ46㎝で、Ｐ２は直径28㎝、底面径22㎝、深さ10㎝で、Ｐ３は直径34㎝、底面径22㎝、深さ30㎝で、Ｐ４は直径30㎝、底面径16㎝、深さ22㎝を測る。壁際には幅16㎝、深さ５㎝の壁体溝が巡っている。また、奥壁と西壁の外側には斜めに掘り込まれた小ピットが13個伴う。これらのピットは直径が10㎝前後で、底面は尖っており、70°の角度で、10㎝～15㎝掘り込まれており、垂木を差し込んだ遺構と思われる。次に、ピットから奥壁までの距離を参考に、築造時のプランを推定すると、床面で、奥行きが5.6mとなり、ほぼ正方形の平面プランであったと考えられる。遺構が廃棄された時期は出土した遺物から弥生時代中期と考えられる。

ＳＢ０４出土遺物（第79図）：遺物は奥壁側の床面直上から出土した。第79図１・２は弥生土器の甕と思われる。どちらも列点文が施されている。また、第79図１は内外面をナデており、第79図２は外面の上半をナデ、過半は粗く磨き、内面はハケメをナデ消している。第79図３は壺の頸部と思われる。外面には断面が三角形の突帯が段状に巡っている。第79図４は内面にハケメを薄く施している。これらの土器はいずれも第Ⅲ様式に含まれるものと考えられる。



第78図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ04実測図（Ｓ＝1／60）



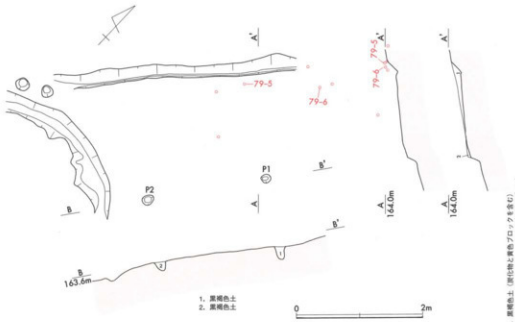
第79図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ04・ＳＢ05出土遺物実測図（Ｓ＝1／３）

ＳＢ０５（第80図・図版26）：ＳＢ０５は東側斜面の下段で検出された遺構で、ＳＫ０４の東側に隣接する。また、ＳＢ０５の北東側は急斜面となっており、斜面の下には沢跡がある。

平面プランは長方形で、幅5.7m、奥行き2.8m、深さ24cmを測る。柱穴と思われる２つのピットを伴っている。ピット間の距離は2.6mを測る。Ｐ１は直径24cm、底面径12cm、深さ24cmで、Ｐ２は直径24cm、底面径12cm、深さ30cmを測る。壁際には幅12cm、深さ４cmの壁体溝が巡っている。ピットから奥壁までの距離を参考に、築造時のプランを推定すると奥行きが5.6mとなり、ほぼ正方形の平面プランであったものと考えられる。

遺構が廃棄された時期は出土した弥生土器から弥生時代中期と考えられる。ＳＢ０４との新旧関係、もしくは併存していたのかといった点については不明である。

ＳＢ０５出土遺物（第79図）：遺物はいずれも床面直上から出土している。第79図５は弥生土器の甕の口縁部である。口縁端部には２条の凹線が施されており、第Ⅲ－２様式～第Ⅳ－１様式に含まれるものと考えられる。第79図６は甕か壺の胴部下半と思われる土器片である。外面にはヘラミガ



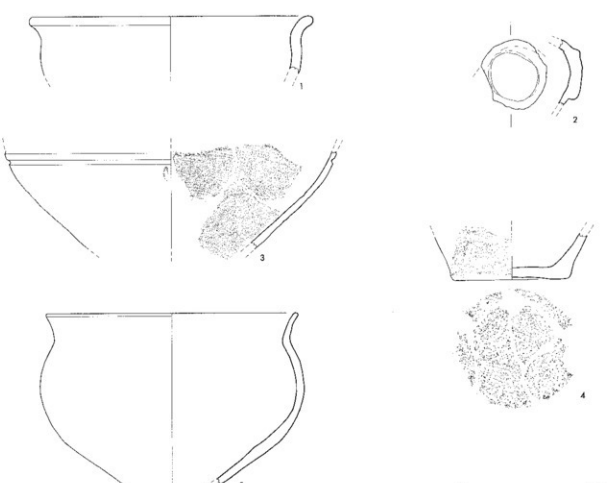
第80図　川平Ⅰ遺跡ＳＢ05実測図（Ｓ＝1／60）

キを施し、内面は板状工具によるナデ調整を行っている。この土器は第Ⅲ様式～第Ⅳ様式に含まれるものと考えられる。

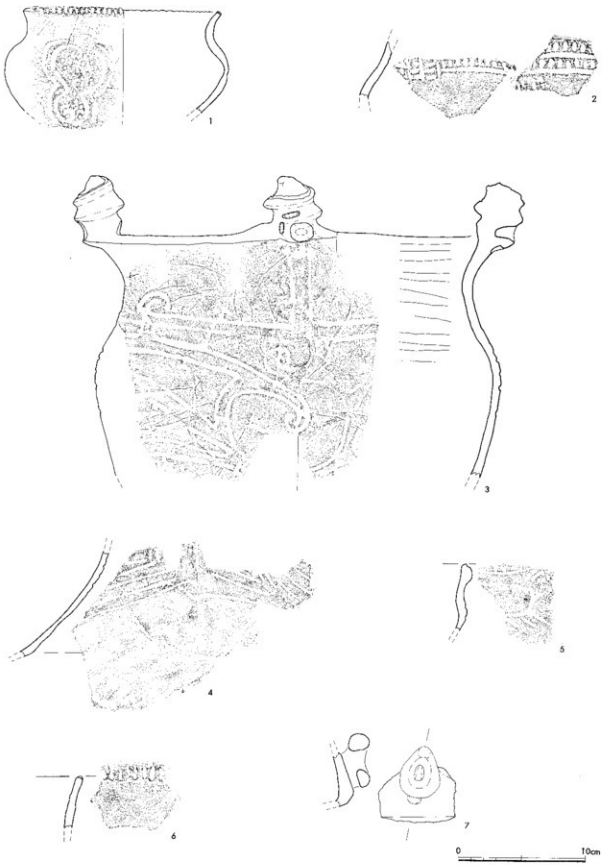
土器溜まり：土器溜まりは２区東側の沢跡下段に位置する。この沢は長さ約24m、幅80m前後、深さ80cm前後で、２区東側上段からＳＢ０５の東側を通り下段に続いている。土器溜まりは沢跡の下方に位置しており、主に縄文時代後期の精製土器と粗製土器が出土している。地山直上ではなく埋土中から、重なった状況で出土した。人為的なものか流れ込みかは不明である。

土器溜まり出土遺物（第81図～第85図）：精製土器から土器間の共通点を中心に記述する。精製土器は第81図１～３・５、第82図である。第82図１・３は内外面を研磨し、外面には２本の並行する凹線で文様を描く点が共通している。第82図４は２本の凹線で文様を描いているかは不明だが、研磨地に凹線で模様を描く点、文様の端部が厳手状に曲がる点は第82図１・３と共通している。これらの型式的な位置は、磨消縄文ではないので福田Ｋ２式ではないが、第82図３の文様が福田Ｋ２式と共通するので、福田Ｋ２式に並行する土器と考えられる。第81図１と５は浅鉢で、内外面を研磨する点と、口縁部の屈曲する形が共通する。第82図２も口縁端部と胴部に装飾があるが、器形と内外面の調整は同じである。第81図２、第82図６・７は型式不明だが縄文時代後期の土器と考えられる。第82図２も型式不明だが、縄文時代後期の土器かは判らない。

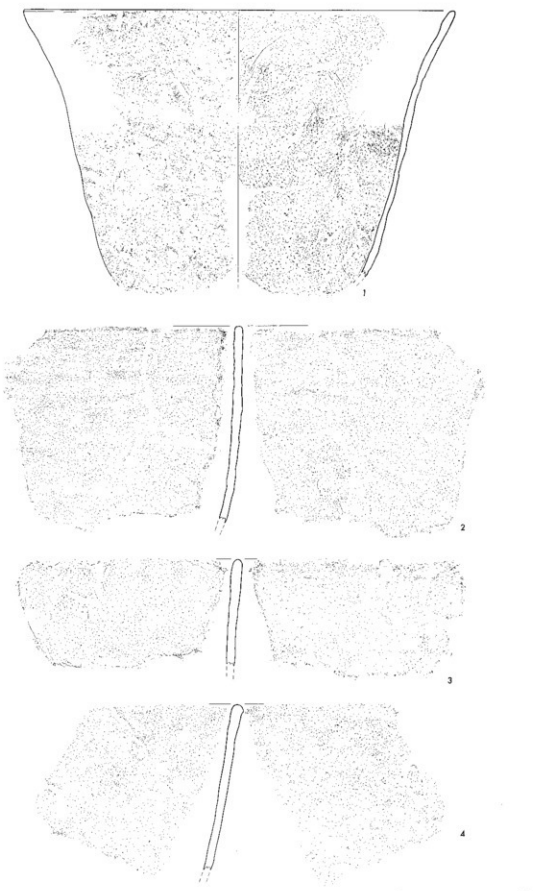
第81図４、第83図～第85図までは粗製深鉢である。第83図１・４、第84図１～３、第85図１～３はＡ類、第83図２・３がＣ類。（粗製深鉢の分類は本章93頁を参照）



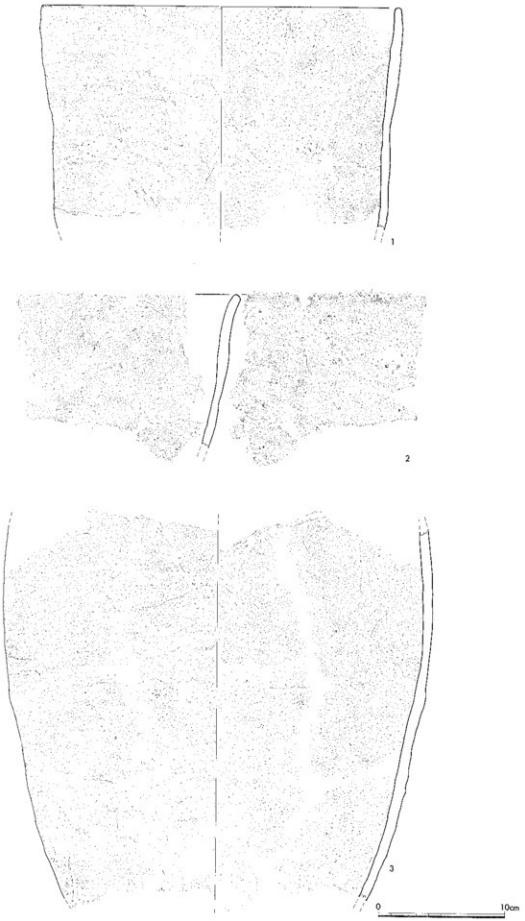
第81図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図①（Ｓ＝1／3）



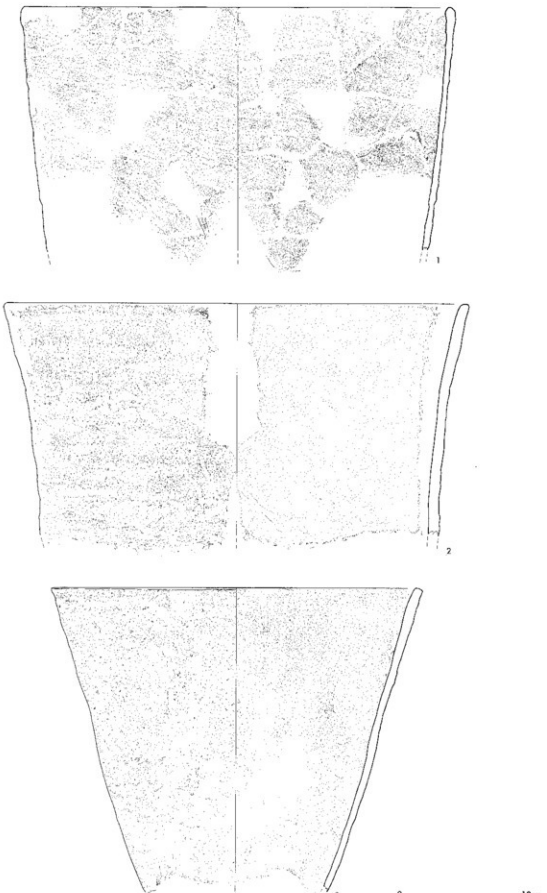
第82図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図②（S＝1／3）



第83図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図③（S＝1／3）



第84図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図④（S＝1／3）



第85図　川平Ⅰ遺跡土器溜まり出土遺物実測図⑤（S＝1／3）

第5節　遺構に伴わない遺物（第86図～第97図）

遺構外出土遺物の大半は黒色土層中から出土した。この黒色土層は先述したように再堆積層で、須恵器の破片から縄文土器が出土するという状態であり、遺物の層位的な分類はできなかった。従って主に型式的な分類を記述する。また範囲確認調査で出土した遺物も同時に記述する。

縄文土器(1)：川平Ⅰ遺跡からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土しているが、縄文土器の出土量が最も多い。時期は大きく見れば早期から晩期まで継続して出土している。

早期（第86図1～9、第87図1、第88図1、第90図1～10、第93図1）：黄島式と高山寺式が出土している。主にA5とB6地点から出土した。また前述のように、SX01硬化面下（A4地点）からは多量に出土した。出土量は高山寺式が多い。

黄島式とした土器は第87図1、第88図1、第90図1・4、第93図1である。第87図1と第88図1は山形文で、第90図1・4、第93図1は楕円文である。土器の内面はどれも丁寧にナデられている。器壁は薄く焼成は良好である。

高山寺式とした土器は第86図1～9、第90図2・3・5～10である。第86図1～9、第90図2・5・7・10は楕円文、第90図3・6・8・9は菱形文である。これら高山寺式とした土器の胎土には繊維が混入されている。大半のものは内面がやや粗くナデられているが、第86図6は内面に板状工具の痕跡が残り、第86図8は縦方向に強くナデた痕跡がある。高山寺式は総じて器壁が厚く焼成が悪い。

前期（第86図16・18～20、第88図8・16・24、第92図14・15、第90図25・26、第93図2～5）：西川津B式、磯ノ森式、月崎下層式併行、里木1式、大歳山式併行の土器が出土している。いずれも出土数は少ない。

西川津B式とした土器は第93図2である。内外面とも2枚貝条痕を施し、外面には細い隆帯を貼り付けている。

磯ノ森式とした土器は第86図18・19である。2点とも沈線の間に爪形文を施文している。また、第86図19は口縁部であるが、端部には刻目を施している。

月崎下層式併行とした土器は第86図16と第88図8である。第86図16は内外面ともナデ調整で、外面には隆帯と隆帯に沿う形で刺突文がある。器壁が薄いため刺突されたか所は内側が盛り上がっている。第88図8は内外面に条痕を施し、外面には粘土紐を貼り付けている。

彦崎Z2式は第86図20、第92図14・15である。第86図20、第92図14は、縄文地に隆帯を貼り付けその上に条痕を施している。第92図15は、縄文地に隆帯を貼り付けその上に貝殻で施文をしている。

大歳山式とした土器は第90図25・26、第93図3～5である。いずれも縄文地に細い隆帯を貼り付け、その上に爪形文を施文している。また、第88図16は縄文地に隆帯、押し引き、凹線で装飾し、器壁は厚く、焼成が良い土器で、口縁部を肥厚させていない点、口縁部内面に装飾を持たない点、隆帯に刺突がない点から大歳山式でないが、縄文地である点、隆帯がある点、押し引きを施す点は前期の土器であり、大歳山式に併行するものと考えられる。

中期（第86図17・21～24、第87図3・6、第88図6・18～23・25～30、第89図16、第90図17～19・23・24・28、第92図1～12・17・24～26、第93図6～12）：船元1式、船元2式、波子式、船元3式、船元4式、船元4式～里木2式、里木3式が出土した。このうち、船元系の土器が最も多く出土した。

船元１式とした土器は第87図３、第88図18・20・25・27・29、第90図18・23、第92図３・６・７・12、第93図８である。このうち第87図３、第88図27、第90図28、第92図６・７、第93図８は波状の口縁部で、特に第87図３、第90図28は口縁突起部が環状になっている。

船元２式とした土器は第86図17・23、第88図21～23・26・28、第90図17・24、第92図１・２・９・24・25である。平縁ばかりで、波状口縁は見つかっていない。

船元３式とした土器は第90図19、第92図26、第93図6である。第90図19は目の細かい縄文地に連弧文を描いている。やや内反しており、頸部付近ではないかと思われる。

船元４式とした土器は第87図６、第93図７である。第87図６は頸部と思われる土器片で、粗い縄文地に斜行沈線を施している。第93図７も頸部と思われる破片で、内面には屈曲部の上に縄文が施文されている。

その他に、第86図22、第88図６・12・19・24・30、第89図16、第92図４・５・８・10・11・17は型式は不明だが船元系の土器と思われる。

船元４式～里木２式とした土器は第93図９～12である。これらの土器は船元４式か里木２式かの判別ができないものである。

波子式とした土器は第86図24で、外面に縄文を施し、特徴的な上げ底の底部となっている。

里木３式とした土器は第86図21である。外面に縄文地を残しつつ、２枚貝条痕を施している。

後期（第86図10・11・13、第87図２・５・８・９、第88図７・10・31・32・35～37、第89図１、第92図20～23・35～37、第93図13～15）：中津式、福田Ｋ２式、布勢式、津雲Ａ式、彦崎Ｋ１式、四元式、彦崎Ｋ２式、元住吉山１式、宮滝式が出土している。特に、中津式～福田Ｋ２式が多く出土している。

中津式とした土器は第87図２・８・９、第88図35である。これらは福田Ｋ２式の可能性もあるが、凹線が２本であること、凹線が太いこと、縄文の部分が広いことから中津式とした。

福田Ｋ２式とした土器は第92図22・23である。第92図22・23共に口縁部であるが、第92図22は肥厚した口縁部に２条の凹線を引いた磨消縄文で、第92図23は薄い口縁部に３条の凹線を引いた磨消縄文となっている。

布勢式とした土器は第92図35～37である。第92図35・36は研磨した地に凹線で文様を描いている。また、第92図36はリング状の口縁部と思われる。第92図37は２か所の突起がある口縁部で、この突起には刺突文が施されている。また口縁端部には１条の凹線が引かれ、凹線から内外両面に向かって刻目が施されている。

崎ヶ鼻式とした土器は第92図21、第93図14である。第92図21は口縁内外面に縄文を施し、口縁端部に１条の太い凹線を引いている。第93図14は口縁端部にも凹線で施文をしている。

彦崎Ｋ１式とした土器は第89図１、第92図20・33・34である。第89図1は突出部に縄文を施し、突出部の上側に凹線を引いている。第92図20は口縁端部を拡張して縄文を施している。第92図33・34は彦崎Ｋ１式に併行する浅鉢と考えられ、いずれも屈曲部外面にヘラ状工具で大きな刻目を入れている。

彦崎Ｋ２式とした土器は第86図10・11・13、第88図７、31、37、第93図13である。第86図10・11・13は内外面を研磨し、口縁端部内側に刻目を施すものである。第88図７は浅鉢で、屈曲部に２条の沈線を施し、その内側には擬縄文を施している。第88図31は口縁部で２条の沈線の間に擬縄文を

施している。第88図37は肩部と思われる破片で、屈曲部に凹線を施し、やや下に押し引き沈線を施す。凹線と押し引き沈線の間には擬縄文を施し、その上に鎖状の撚糸文を施している。この土器は彦崎Ｋ２式とは異なるが、凹線・沈線の間に擬縄文を施していることから、彦崎Ｋ２式に併行するものと考えた。第93図13は肥厚した口縁部付近の破片と思われるが、凹線の間に細かい縄文を施文している。

彦崎Ｋ１式～Ｋ２式に併行するとした土器は、第92図31、第93図15である。第93図15は口縁部外面上端に２枚貝の腹縁で施文し、その下には内部に沈線を引き、沈線内に刺突文を施している。第92図31は口縁の外側に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、内面を研磨し、外面をナデている。

四元式とした土器は第88図32である。外面には４本の凹線が引かれ、日の細かい縄文が施文されている。口縁端部外面には縄文原体の端を確認できる。

元住吉山１式とした土器は第87図５、第88図36である。第87図5は波状口の土器で内外面に研磨を施している。口縁部外面には縄文を施し、その上に２本の凹線を引いている。胴部には焼成後に穿孔が行われている。第88図36も土器の口縁部で、口縁部外面には縄文を施し、その上に２本の凹線を引いている。

宮滝式とした土器は第88図10である。内面には２枚貝条痕を施し、外面には研磨した上に幅広い凹線を施している。

晩期（第39図１・６、第86図12・14・15、第87図７・10、第88図２～５・９・11・13～15・17・38、第89図２～４・10～13・17、第90図16・20・27、第92図18・19・28～30、第93図16～18）：晩期の土器は岩田４類、滋賀里３ａ式、篠原式、谷尻式、前池式、沢田式、時期不明の粗製深鉢が出土している。このうち粗製深鉢が最も多く出土しいる。また、粗製深鉢は川平Ⅰ遺跡のなかで最も多く出土した遺物である。

滋賀里３ａ式としたものは第88図38、第89図２である。第88図38は波状口縁の波頭部分で、三角形を呈し、内外面ともナデ、端部に幅の広い刻目を入れている。第89図２は口縁部で、突起部分の縄文が窪み、口縁端部外面に刻目が入る。内外面ともナデ調整である。

篠原式としたものは第88図９である。内面には２枚貝条痕を施す。外面は口縁端部に刻目を施し、上半の内反する部分は丁寧なナデ調整を行い、屈曲部に竹管による長さ２㎝の連続する凹線を施し、下半は板状工具で粗くナデつけている。

谷尻式としたものは第89図17、第92図28である。第89図17は内外両面とも研磨しており、外面にはＶ字状の隆帯が付いている。第92図28は口縁端部に刻目を入れ、外面にはナデ調整の上に重弧文を描いている。

孔列土器としたものは、第39図１、第88図11・13・14・15・17である。板屋Ⅲ遺跡での分類(2)に従えば、第39図１、第88図14はプライマリーな孔列土器に近いⅠ類、第88図11・13は押し引き刺突を行うⅡ類、第88図15・17は口唇に沿して施文するⅢ類となる。これらの孔列土器は谷尻式に併行する土器で、奥出雲では頓原町の板屋Ⅲ遺跡と森遺跡から出土している。

精製浅鉢のうち、口縁部がくの字状に屈曲しないものは、岩田４類～滋賀里３ａ式に併行する土器とした。第39図６、第86図12、第87図７、第89図10・11・13、第90図16、第93図16・17がそれに当たる。第86図12、第89図13は口縁端部内外面に沈線入り段が付く。第89図12は口縁端部内外面に強いナデが入り段が付く。第89図11は口縁部外面に凹線が入り段が付く。第90図16は口縁端部内側に

押し引きの刺突を残す沈線を引いている。第93図16は櫛原文様を施文している。第93図17は波状口縁で、外面の口縁部上端ドと屈曲部に沈線を引き、内面には上端に２本の沈線を引き、屈曲部に１本の沈線を引いている。

籠原式～谷尻式としたものは第88図4、第92図29・30である。いずれも口縁端部に刻目を入れている。第88図４、第92図29は内外面ともにナデ調整で、第92図30は外面を板状工具で粗くナデ調整し、内面を丁寧にナデている。また、第88図４は外面に沈線で施文をしている。

精製浅鉢のうち、口縁部がくの字に屈曲するものは前池式～突帯文土器終末に併行するものとした。第89図３・４・12がそれに当たる。

沢田式～突帯文土器終末とした土器は、第87図10は浅鉢の底部と思われる土器で、平底で内外面ともに研磨している。

刻目突帯文土器のうち、口縁端部と口縁部突帯に刻目があるものと、口縁部突帯のみに刻目があるものを前池式～沢田式併行の土器とした。口縁端部と口縁部突帯に刻目があるものは第86図15、第88図２・５、第90図27、第92図18、第93図18で、口縁部突帯のみに刻目があるものは第86図14、第88図3、第92図19である。このうち第90図27は刻目を貝殻の復縁で施文し、口縁端部と突帯端部には貝殻の付け根の部分で施文している。

この他に晩期の精製土器としては、第89図５～10・14、第90図20がある。

粗製深鉢：後・晩期の粗製深鉢は外面の調整からA～Dの４種類に分類できる。

A類（第39図３・４、第87図４、第89図21、第90図11～13・15）：外面を板状工具でナデ調整を行うものである。最も出土数が多い種類である。また、A類にはクリームをナデつけた様な凹凸が激しいタイプと、凹凸の少ないヘラケズリ状のタイプと、使用された工具の幅が狭く粗いミガキに見えるタイプがある。凹凸の激しいタイプの出土数が多い。

B類（第39図２、第90図14）：外面に一枚貝条痕を施す粗製深鉢である。本遺跡では出土数の多い種類である。

C類（第39図５、第87図４、第88図39、第89図18～20）：外面にナデ調整を施すものである。本遺跡では出土数の多い種類である。

特徴的な型式不明の縄文土器（第90図21、第92図13、第93図19・20）：第90図21は刺突と凹線で装飾された口縁部の破片である。内外面ともにナデ調整を行い、口縁端部には２列の刺突を施し、やや肥厚させた口縁部の外面に凹線で螺旋の３重円を描き、口縁部下に山形文を描き、次に２列の刺突を施している。型式は不明で、時期も早期と中期の可能性が考えられる。第92図13は口縁部付近の破片と思われる土器で、外面には２列の刺突で装飾が行われている。文様、胎土、色調が第90図21に近く同一の型式と思われる。第93図19・20は同じ型式の土器と思われる。外面には粗い縄文を押圧し内面をナデている。縄文の装飾を施すことから時期は中期と考えられる。

弥生土器(3)：弥生土器は前期から後期まで出土している。

前期（第91図１・２）：第91図１・２は第Ⅰ様式の壺形土器と思われる。第91図１は５条以上の沈線の下に２条の沈線で重弧文を描いている。内面はナデ調整を行っている。第91図2は４条以上の沈線の下に３条以上の沈線で重弧文を描いている。内面はナデ調整を行っている。

前期もしくは中期（第39図８・９、第89図22・23、第91図３）：前期か中期かの判断がつかないものを前期もしくは中期の土器としてまとめた。第89図22・23、第91図３は甕形土器である。Ⅰ－４

様式かⅡ－1様式と思われる。第89図22は頸部に10条のヘラ書き沈線を描きその下に2列の刺突文を入れている。また、口縁端部に刻目を施し、口縁部内面に刺突文を巡らす。第89図23は頸部に9条以上の幅広のヘラ書き沈線を巡らせ、口縁端部に刻目を入れる。第91図3は8条以上のヘラ書き沈線を巡らせ、口縁端部に刻目を入れる。第39図8・9は土器の底部で前期か中期か判らない。厚めの平底となっている。

中期（第39図7、第87図18、第90図22、第91図7～9・12、第93図21）：第91図9・12、第93図21は第Ⅲ様式の土器と思われる。第91図9は壺形土器で、外面には上から順に、刻目のある頸部突帯、7列の刺突文、横方向への強いナデ、縦方向のハケメ、横方向への強いナデ、縦方向のハケメと装飾を施している。内面はナデ調整である。第91図12は壺形土器の肩部と思われる。外面はハケメの地を沈線で区分し、斜めの刺突を行い、円形の粘土板を貼り付けている。第93図21は壺形土器の口縁部で、端部と上面に凹線が施文されている。第39図7と第91図7は甕形土器でⅣ－1様式と思われる。第39図7は口縁部に2条の凹線を巡らし、胴部外面にはハケメの上に刺突文を施し、内面はハケメを施している。第91図7は口縁部に2条の凹線を巡らし、頸部には粘土帯を貼り付け刻目を施し、内外面ともにハケメ調整を行っている。第87図18は甕形土器でⅣ－2様式と思われる。口縁部には3条の凹線を巡らせ、頸部には粘土帯を貼り付け刻目を施す。外面はハケメ調整を行い、内面は口縁部は頸部以下にケズリ調整を行っている。第91図8は甕形もしくは壺形土器で、塩町式あるいは塩町式系の土器である。外面はナデ調整を行った地に4条の沈線を引き、ヘラ状工具で刺突を行っている。第Ⅳ様式に併行するものであろう。第90図22は5本以上の凹線と刺突文のある破片で第Ⅳ様式の土器としか判らない。

中期～後期（第39図10、第87図12～14、第89図32～36、第91図6・10・11・13）：中期か後期かの判断がつかないものをまとめた。第91図10・11は高杯で、第Ⅳ様式か第Ⅴ様式と思われる。第91図10は杯部外面はミガキ調整をし、坏部と脚部の境界には凹線を巡らしている。また内面には充填円盤の剥離した痕跡が確認できる。第91図11は口縁端部を拡張し3条の凹線を巡らしている。また口縁端部には刻目を持つ。調整は外面ではハケメの後にミガキを施し、内面はハケメの後ナデている。第39図10、第87図12～14、第89図32～36、第91図6・13は底部で中期か後期か判らない。器壁の薄い平底である。

後期：（第39図11・12、第86図25～27、第87図11・15～17、第89図24～28・30・31、第91図4、第92図27）：第39図12、第86図25・26、第87図15～17、第89図24～28・31はⅤ様式前半と思われる。第39図12、第87図16、第89図27、第91図4は口縁部がほぼ垂直に拡張し、凹線文が施され、内面は頸部以下にケズリ調整が施されている。第87図17、第89図25は口縁部がほぼ垂直に拡張し、凹線を施さず、内面は頸部以下にケズリ調整が施されている。第89図26・28は内傾した口縁部に凹線を施し、内面は頸部以下にケズリ調整が施されている。第86図25・26は内傾した口縁部に凹線を施さず、内面は頸部以下にケズリ調整が施されている。第89図24はほぼ垂直に拡張し、口縁部外面と肩部に施文している。第89図31は壺形土器である。口縁部を垂直に拡張し、口縁部下方には焼成後に穿孔を行っている。内外面ともナデ調整を施している。第39図11、第86図27、第87図11、第89図30は大木式と思われる。第39図11、第86図27、第89図30、第91図4は口縁部で、口縁端部が外側に折れ、内面は頸部以下にケズリ調整が施されている。第87図11は底部で、平底と丸底の中間のいわゆるレンズ状の底となっている。内面はハケメ調整が施されている。第92図27は後期の甕形土器の口縁部

と思われるが、型式は判らない。頸部に焼成後に穿孔を行っている。

土師器（第39図14、第87図19・20、第89図29、37、第93図22・23、第94図１）：土師器は小谷式、大東式、須恵器併行期の土師器が出土している。第87図19・20は小谷式の器台である。どちらも内面をヘラケズリの後にナデ調整を行っていることから、器受部と思われる。また外面もナデ調整を行っている。第93図22は小谷式の壺形土器である。口縁部外面には僅かに擬凹線の痕跡を残す。第89図29は大東式と思われる。口縁部はやや外傾し内外面ともナデ調整を行っている。第39図14、第89図37、第93図23、第94図1は須恵器併行期の土師器と思われる。いずれも胴部の外面にはハケメを施し、内面は頸部以下にケズリ調整が施されている。ハケメの幅から第89図37と第94図１が搬入品で、第93図23が在来の土器ではないかと考えられる。

須恵器（第39図13、第91図14、第94図２・３）：第94図２は坏蓋で、時期は７Ｃ前半と思われる。第39図13、第91図14、第94図３は坏身で、時期は第91図14は６Ｃ後半、第37図13と第94図３が７Ｃ前半と思われる。この他にも甕片が出土している。

時期不明の遺物（第39図15）：第39図15は土製品であるが時期・種類ともに判らない。

石器（第94図）：第94図５は縄文時代の磨製石斧である。淡緑色の堆積岩製で刃部が斜めになっている。第94図４は撥形の安山岩製扁平打製石斧である。小形の石斧で使用痕か装着による摩滅か、あるいは土中での摩擦によるものかは不明であるが、腹・背両面に摩滅したか所がある。

第94図６～22は石鏃で、安山岩製、黒曜石製、鉄石英製のものがある。基部は凹基式のものばかりである。第94図23は結晶片岩と思われる石材を使用した、局部異形磨製石器である。陵がなめらかになる程度に軽く全面が研磨されている。これは押型文土器に伴う石器として知られている。

第94図24・25はスクレイパーで、第94図24は黒曜石製、第94図25は安産岩製である。共に一辺のみを一方向から刃部加工をしている。第94図26は安山岩製のスクレイパーである。縦長剥片を使用しており、両側面に刃部加工を施し、先端部は研磨している。先端部が刃部加工の後に研磨されたものか、刃部加工をせずに研磨されたものかは不明である。時期は、縄文時代の石器と思われるが類例が無いため、不明である。

第94図27は結晶片岩様緑色岩製の勾玉である。翡翠と見まがう石材を使用している。両側穿孔の勾玉で周辺からは縄文時代後・晩期の土器が多く出土しており、その時代の遺物の可能性が高い。第10章で述べられているように、結晶片岩様緑色岩製品の島根県内での類例には、美濃郡匹見町のヨレ遺跡から出土した勾玉と管玉がある。

石錘（第95図～第97図）：206点もの石錘が出土した。特にＢ５で78点、Ｃ５で48点も出土しており崖垂斜面の平坦部西側から集中して出土したと言える。石錘の大半は両端を打ち欠くタイプで、切れ込みを入れるタイプは3点しか確認できなかった。また、第７章第３節で述べるが、重量で大きくＳ、Ｍ、Ｌ、Ｏの４種類に分かれる。

上記した石器の他にも川原石を利用した磨石、敲石が出土している。また、安山岩、黒曜石、鉄石英のフレイクとチップも出土している。これらフレイクとチップは主に１区のＢ５区に集中している。時期は不明であるが付近に石器制作場が存在していたと思われる。

第9表　川平Ⅰ遺跡出土フレイク・チップの量

	A5	B5	B6
黒曜石	79.49g	198.22g	5.71g
安山岩		45.80g	0.09g
鉄石英		2.44g	

註

（1）縄文土器の分類には以下の文献を参考とした。
島根県教育委員会『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5　1998
島根県教育委員会『下山遺跡（2）』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12　2002
小林達雄　編『縄文土器大観1』小学館　1989
小林達雄　編『縄文土器大観2』小学館　1988
小林達雄　編『縄文土器大観3』小学館　1988
小林達雄　編『縄文土器大観4』小学館　1989
戸沢充則　編『縄文時代研究辞典』東京堂出版　1994
大川清、鈴木公雄、工楽善通　編『日本土器辞典』雄山閣　1996

（2）片岡宏二「島根県出土の孔列土器について－板屋Ⅲ遺跡出土の孔列土器を中心にして」『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5　島根県教育委員会　1998

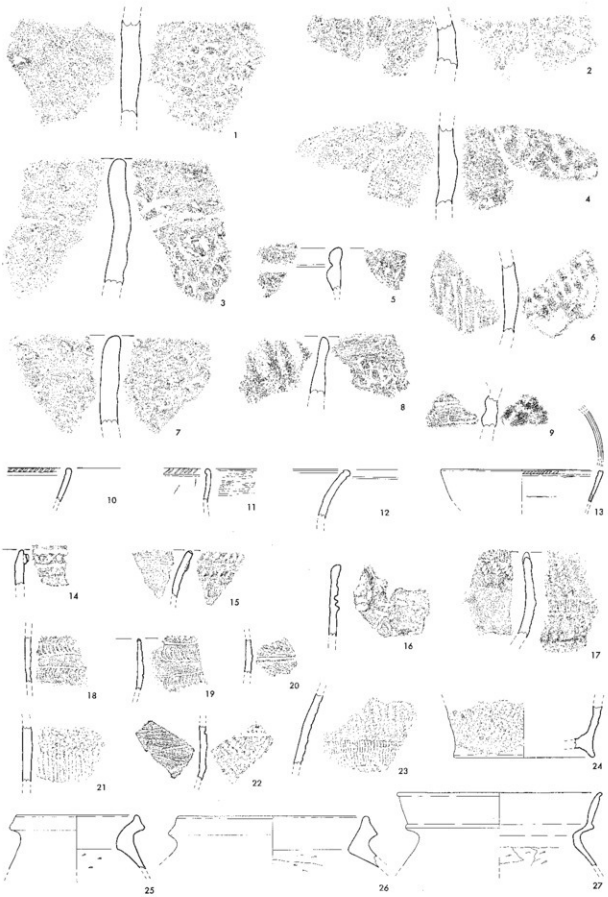
（3）弥生土器の分類は以下の文献を参考とした。
松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年－山陰・山陰編－』木耳社　1992

第6節　小結

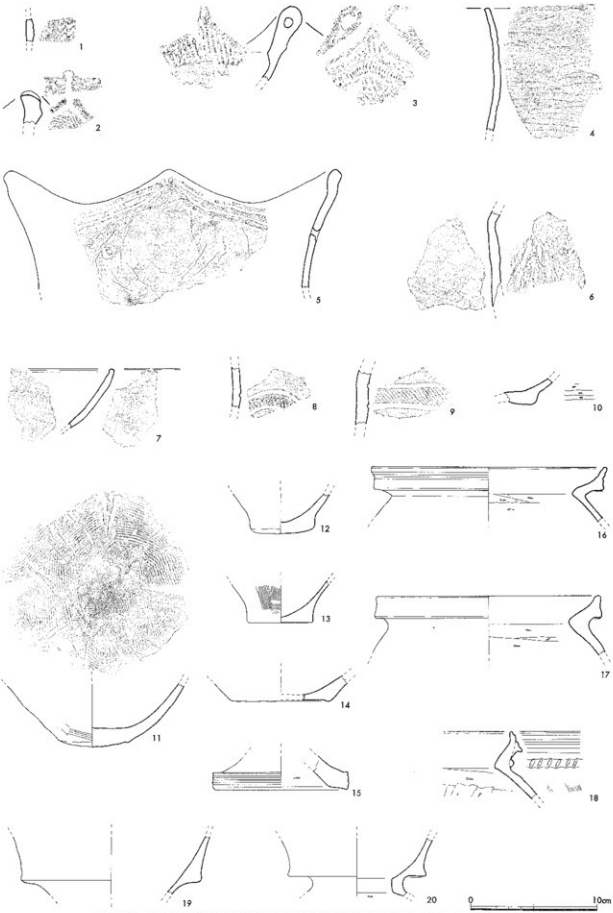
縄文時代：遺構は1区で落とし穴2個、土坑16基、2区で土器溜まりを1か所確認した。縄文土器は早期～晩期まで確認でき、石器は石鏃、石錐、敲石、磨石、局部磨製石斧などを確認した。特に押型文土器の発見により、これまで木次町、仁多町で最古の土器型式とされてきた下鴨倉遺跡出土の羽島下層3式から大きく遡り、今後の尾原ダム予定地内の発掘調査において、どこまで時代が遡る可能性があるかの目安ができたといえる。また、川平1遺跡では羽島下層式が確認されていないが、下鴨倉遺跡では羽島下層3式が確認されている。今後、羽島下層式が発見されれば、この地域での人間の動きを知る上で重要な発見となろう。

弥生時代：2区では2棟の建物跡を確認した。ＳＢ０４が第Ⅲ様式、ＳＢ０５が第Ⅲ様式～第Ⅳ様式となっている。特にＳＢ０４では墓坑の外側に垂木を差し込んだ小ピット群を確認した。これは奥出雲の建築史上重要な発見と言える。また付近の垣ノ内遺跡は斐伊川支流の下布施川に隣接する中期後葉の集落遺跡であるが、ＳＢ０４は一つ古い集落の存在を証明し、斐伊川本流沿いにも集落が展開する予察となった。現時点では斐伊川本流から垣ノ内遺跡への移動がなされたのか、本流沿いに集落を存続させつつ垣ノ内遺跡へ拡張がなされたかは不明である。今後の調査に期待したい。

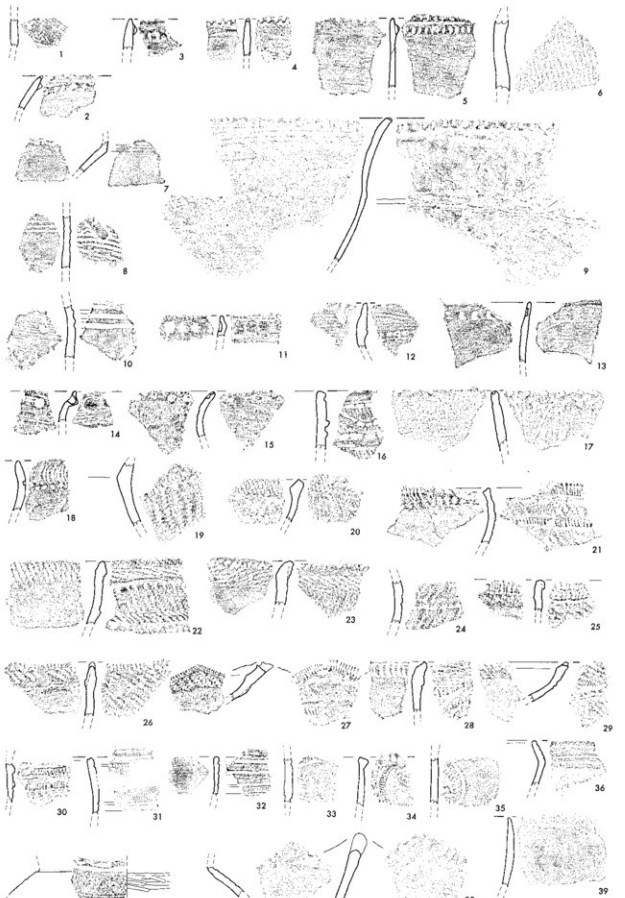
古墳時代：遺構は1区で建物跡を3棟と硬化面を1か所確認した。時期はＳＢ０１が６C前半、ＳＢ０２が六東式期、ＳＢ０３が小谷式期と異なる。硬化面は小谷式期である。これらのうち特に興味深いのはＳＢ０２とＳＢ０３である。土層観察からも、出土遺物からも、ＳＢ０２が古く、ＳＢ０３が新しいと考えられる。型式は連続しており、ＳＢ０２を廃棄してＳＢ０３を築造したと考えられる。遺構の形状はＳＢ０２が円形で、ＳＢ０３が方形である。時期と遺構の形状の関連性がどこまで普遍できるかは不明だが、小谷式と円形加工段、六東式と方形加工段という関係を、一つのデータとして得ることができたといえる。川平1遺跡で示された時期と加工段の形状との関連性が、川平1遺跡内で完結するものか、範囲を広げるものなのかは、今後の調査に期待したい。



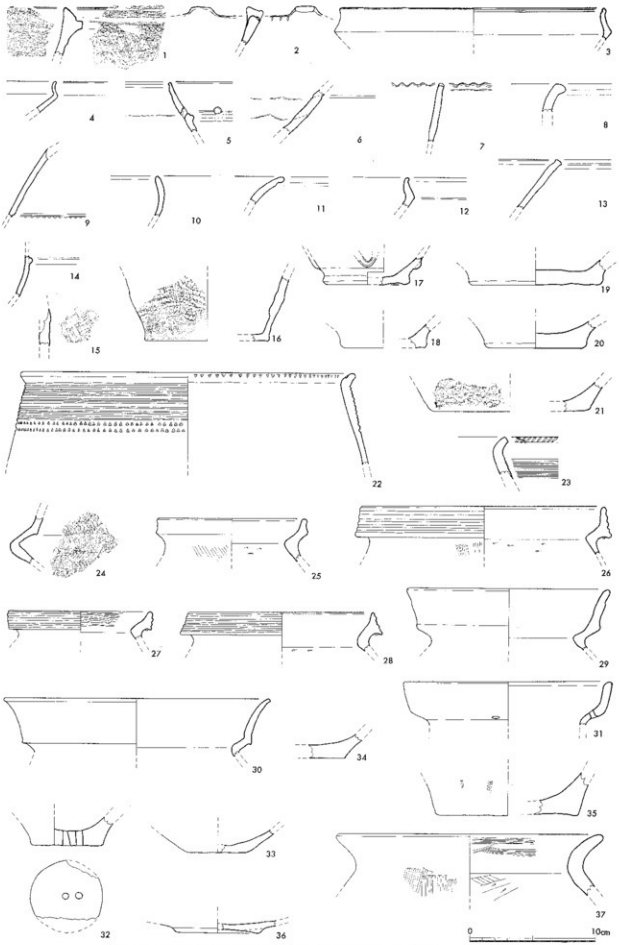
第86図　川平１遺跡遺構外出土遺物実測図①［A4区・A5区］（S＝1／3）



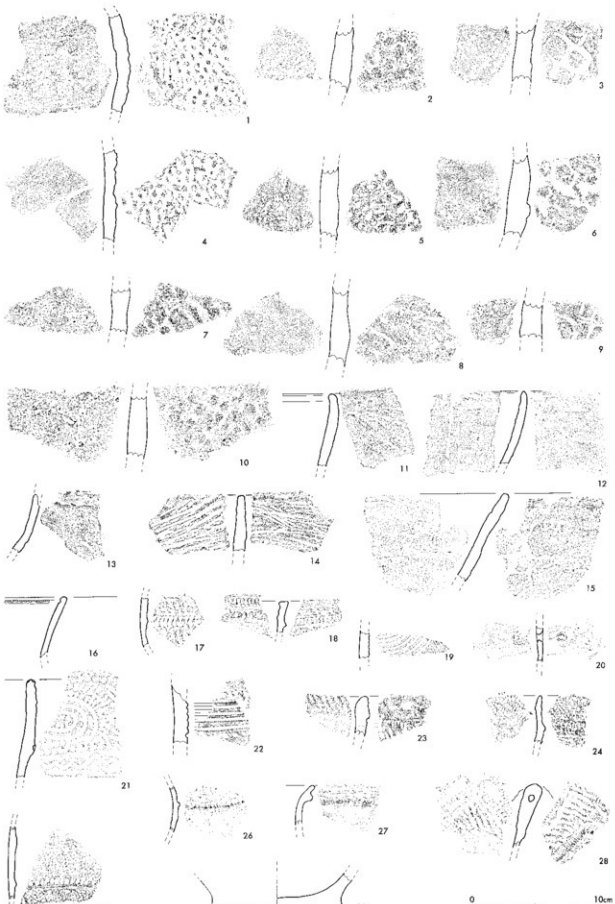
第87図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図②［B4区］（S＝1／3）



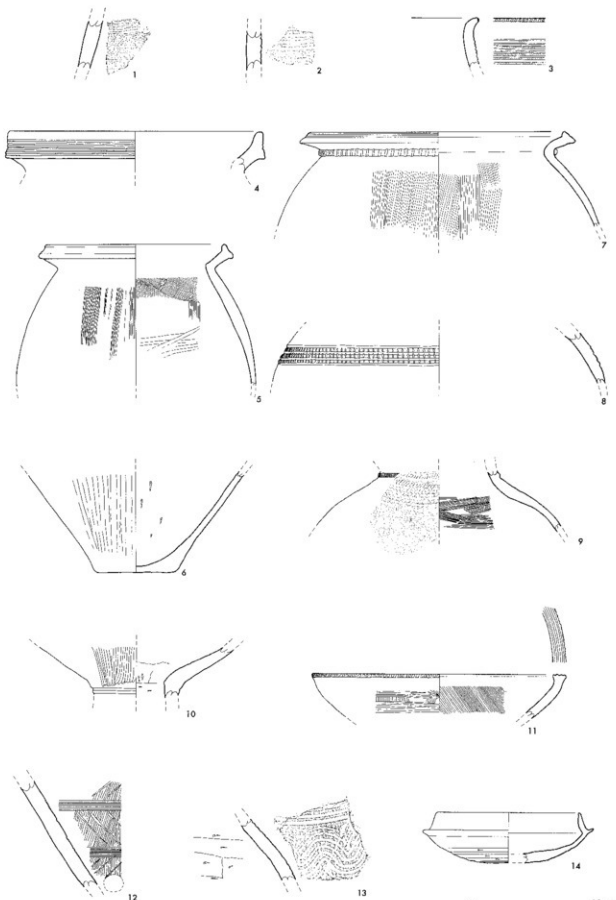
第88図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図③［B5区］（S＝1／3）



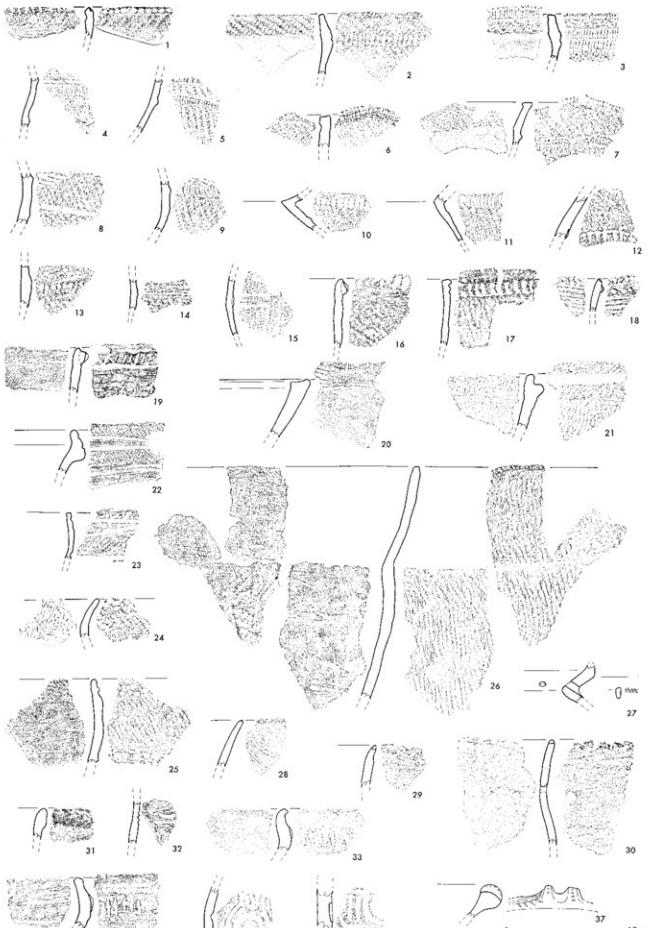
第89図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図④［B5区］（S＝1／3）



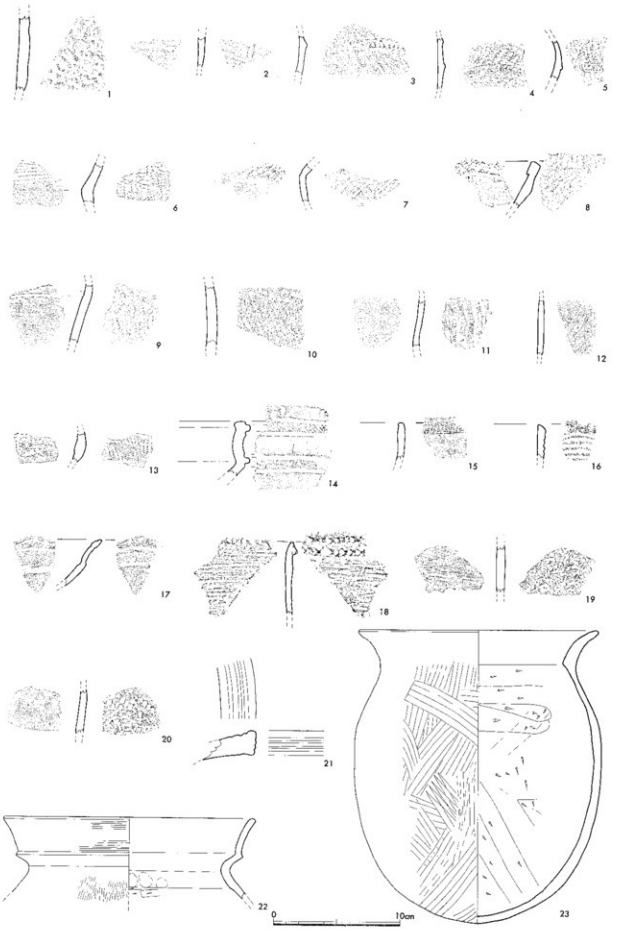
第90図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑤［B6区・C6区］（S＝1／3）



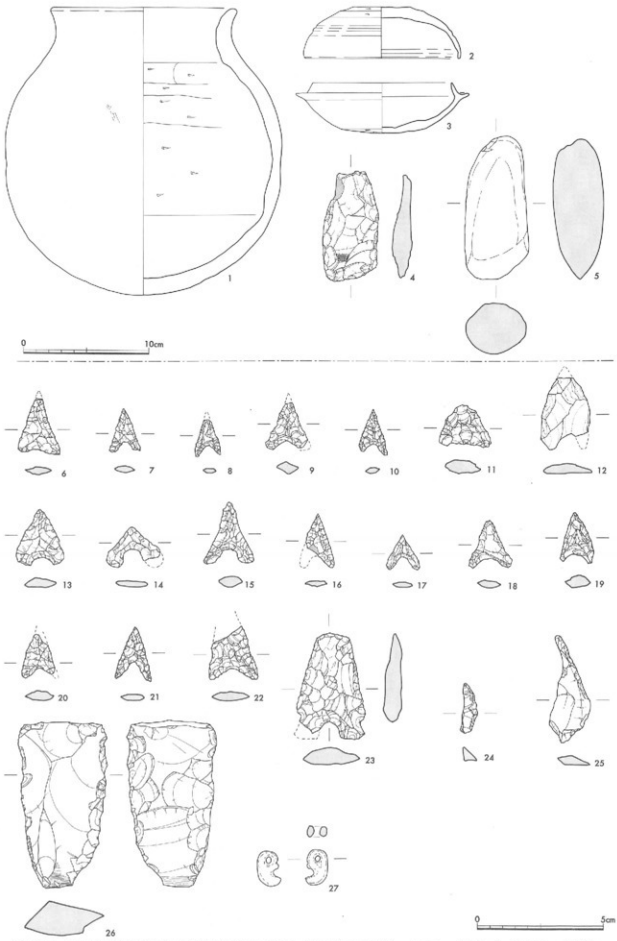
第91図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑥［C4区・C5区］（S＝1／3）



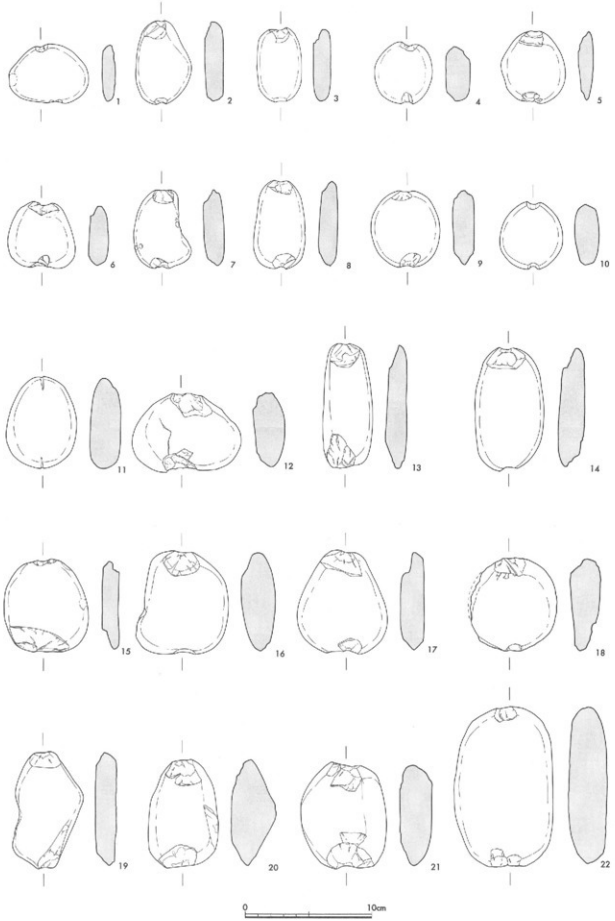
第92図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑦［C5区］（S＝1／3）



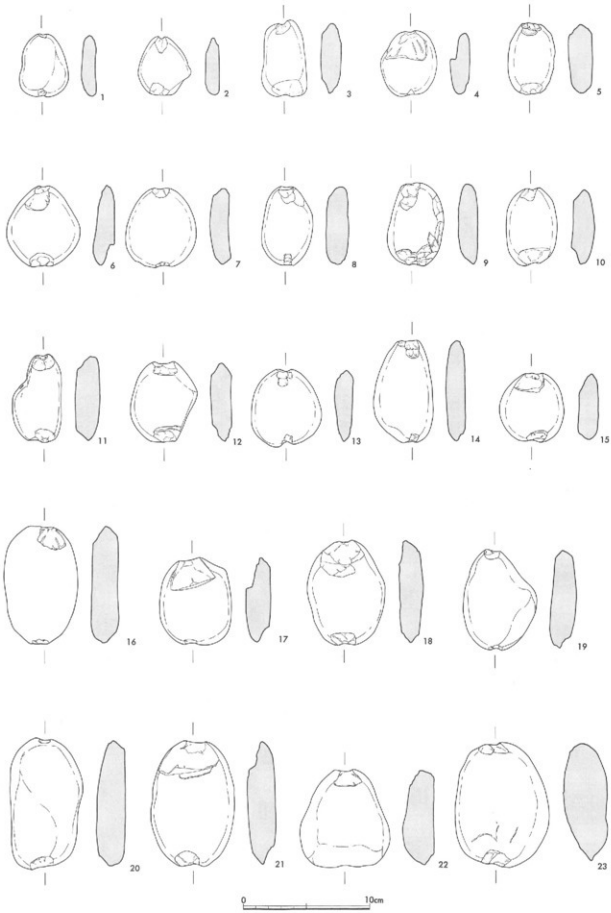
第93図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑧［J5区・K5区他］（S＝1／3）



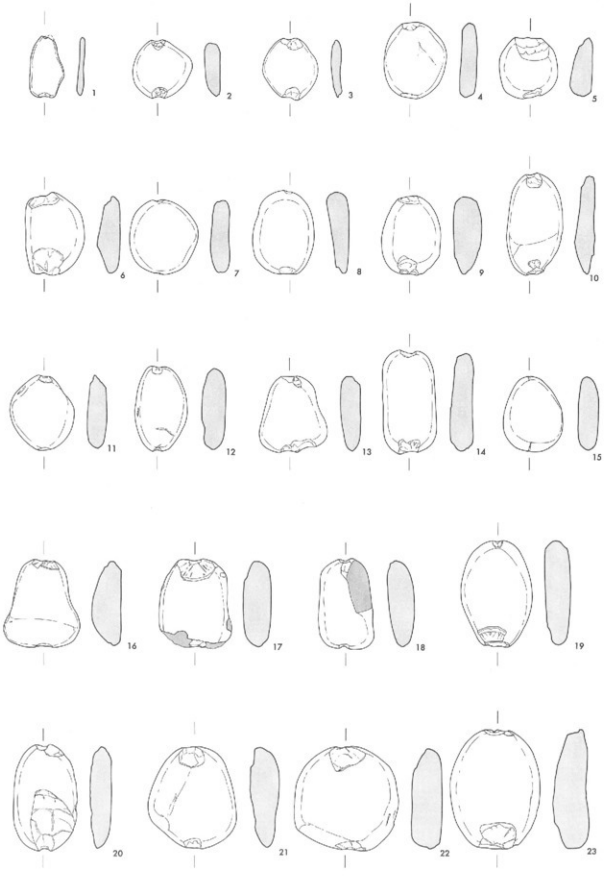
第94図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑨［J5区・K5区他・石器］（1～5はS＝1／3、6～27はS＝2／3）



第95図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑩［石錘：B5区］（S＝1／3）



第96図　川平Ⅰ遺跡遺構外出土遺物実測図⑪［石錘：C5区］（S＝1／3）



第97図　川平１遺跡遺構外出土遺物実測図⑫［石錘：Ｂ5区・Ｃ5区以外］（Ｓ＝1／３）

第10表　川平Ⅰ遺跡出土土器類観察表

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	形式	備考
39－1	35	トレンチ42		縄文土器			器高 3.5	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	凸列土器Ⅰ類	
39－2	35	トレンチ42		縄文土器			器高 7.2	外面：二枚貝条痕 内面：ナデ・二枚貝条痕	外面：赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	粗製B	
39－3	35	トレンチ37		縄文土器	浅鉢？		器高 7.5	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：褐色 内面：褐色 焼成：良好	粗製A	
39－4	35	トレンチ9		縄文土器			器高 7.2	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	粗製A	
39－5	35	トレンチ9		縄文土器			器高 3.5	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	粗製D	
39－6	35	トレンチ42	灰褐色土層	縄文土器	浅鉢	4	口径 15.8 器高 5.3	外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	外面：赤褐色 内面：橙褐色 焼成：良好	岩田4類～滋賀里3a併行	
39－7	35	トレンチ14		弥生土器	甕	20	口径 14.4 器高 10.2	外面：ナデ・刷毛目・列点文 内面：ナデ・刷毛目	外面：淡褐色 内面：乳白色 焼成：良好	Ⅳ－1	外面に煤付着
39－8	32	トレンチ42	灰褐色土層	弥生土器	壺or甕	100	底径 9.3 器高 7.1	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		内面底部以外黒色化している
39－9	32	トレンチ42		弥生土器	壺or鉢	100	底径 7.6 器高 6.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		外面に煤付着
39－10	35	トレンチ28	黒色土層	弥生土器	壺or鉢	20	底径 5.8 器高 2.8	外面：ナデ・ミガキ 内面：摩滅のため不明	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好		
39－11	35	トレンチ50	黒色土層	弥生土器	甕	8	口径 19.2 器高 5.2	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳褐色 焼成：良好	大木式	
39－12	35	トレンチ23	黒色土層	土師器	甕	13	口径 17.1 器高 5.1	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	Ⅴ－1	
39－13	32	トレンチ14		須恵器	坏身	30	口径 10.8 器高 3.8	外面：回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ・ナデ	外面：青灰色 内面：青灰色 焼成：良好	4期	外面に灰がかかった様子
30－14	35	トレンチ14		土師器	甕	14	口径 22.3 器高 9.5	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	須恵器併行	
39－15	35	トレンチ37		土製品			高さ 1.9 幅 2.3 長さ 3.8		外面：淡赤褐色 焼成：良好		
43－1	35	SB01	床面	土師器	甕	30	頸部径 20.2 器高 2.5	外面：ナデ・刷毛目 内面：ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		黒斑あり
43－2	35	SB01	床面	土師器	甕	13	胴部径 30.0 器高 16.2	外面：刷毛目 内面：ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		内外面に煤付着
43－3	35	SB01	床面	土師器	甕	17	胴部径 30.9 器高 23.2	外面：刷毛目 内面：ケズリ	外面：暗褐色 内面：暗褐色 焼成：良好		
43－4	35	SB01	床面	須恵器	杯蓋	30	器高 1.6	外面：回転ヘラケズリ 内面：ナデ	外面：灰色 内面：灰白色 焼成：堅緻	2・3期	
43－5	35	SB01	床面	須恵器	杯蓋	60	器高 1.5	外面：回転ヘラケズリ 内面：ナデ	外面：灰白色 内面：灰白色 焼成：堅緻	2期	
47－1	36	SB02	16層	弥生土器	鉢		口径 19.0 器高 7.7	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	九重式	外面に煤付着
47－2	32	SB02	床面	土師器	甕	25	口径 15.8 器高 10.2	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	草田5	
47－3	32	SB02	床面	土師器	甕	50	口径 20.0 器高 20.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	小谷式	内外面に煤付着
47－4	36	SB02	床面	土師器	鼓形器台	33	口径 20.8 器高 7.6	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	小谷式	
49－1	32	SB03	床面	土師器	甕	50	口径 16.2 器高 7.9	外面：ナデ・刷毛目 内面：刷毛目・指頭圧痕・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	大東式	
49－2	36	SB03	床面	土師器	甕	13	口径 17.2 器高 5.2	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	大東式	外面にやや赤色がかったところあり
51－1	32	SX01	床面	土師器	甕	40	口径 21.5 器高 20.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	小谷式	
51－2	32	SX01	黒色土層	土師器	甕	30	口径 20.7 器高 11.7	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	小谷式	内面に絞り痕あり

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	形式	備考
51−3	32	SX01	床面	土師器	高坏	50	底径 13.4 器高 9.4	外面：刷毛目 内面：ナデ・ケズリ・刷毛目	外面：黄橙灰色 内面：黄橙灰色 焼成：良好	小谷式	内面に絞り痕あり
51−4	32	SX01	床面	土師器	坏	70	口径 9.0 器高 8.6	外面：刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡黄灰色 内面：淡黄灰色 焼成：良好	小谷式	
51−5	33	SX01	床面	土師器	甕	25	口径 16.9 器高 16.8	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目	外面：淡褐色 内面：灰褐色 焼成：良好	小谷式	外面に煤付着
51−6	37	SX01下層	1層	縄文土器			器高 10.0	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	高山寺式	
51−7	37	SX01下層	1層	縄文土器			器高 9.2	外面：楕円押型文 内面：摩滅のため不明	外面：淡赤褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	高山寺式	
51−8	37	SX01下層	1層	縄文土器			器高 11.5	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	高山寺式	
51−9	37	SX01下層	1層	縄文土器			器高 7.5	外面：楕円押型文 内面：摩滅のため不明	外面：乳褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	高山寺式	
51−10	37	SX01下層	1層	縄文土器			器高 10.3	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	高山寺式	
51−11	37	SX01下層	1層	縄文土器			器高 3.1	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：乳白色 焼成：良好	高山寺式	
53−1	37	落とし穴1	3層	縄文土器	鉢		器高 4.1	外面：縄文・押引き 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	船元系	
53−2	37	落とし穴1	1層	縄文土器			器高 5.6	外面：縄文・突帯 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元系	
53−3	37	落とし穴1	1層	縄文土器			器高 2.7	外面：縄文 内面：ナデ・縄文	外面：暗褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元系	
53−4	37	落とし穴1	1層	縄文土器			器高 3.7	外面：[illegible]・押引き・縄文 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元系	
53−5	37	落とし穴1	1層	縄文土器			器高 3.3	外面：縄文 内面：ナデ・縄文	外面：乳褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元系	
53−6	37	落とし穴1	1層	縄文土器			器高 5.1	外面：縄文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元系	
53−7	37	落とし穴1	4層	縄文土器			器高 3.1	外面：沈線 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	不明	
53−8	37	落とし穴1	1層	縄文土器			器高 6.7	外面：ナデ・条痕 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	不明	
53−9	37	落とし穴1	1層	縄文土器			器高 6.7	外面：二枚貝条痕 内面：二枚貝条痕	外面：乳褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	前期	
53−10	37	落とし穴1	1層	弥生土器	壺or甕		器高 3.2	外面：ナデ・刷毛目 内面：刷毛目	外面：乳褐色 内面：乳白色 焼成：良好		
55−1	37	落とし穴2	1層	縄文土器			器高 3.5	外面：縄文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	不明	
55−2	37	落とし穴2	2層	縄文土器			器高 2.5	外面：縄文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	不明	
55−3	37	落とし穴2	2層	縄文土器			器高 2.8	外面：条痕 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	不明	
55−4	37	落とし穴2	2層	縄文土器			器高 5.7	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	粗製A	
57−1	38	SK01	1層	縄文土器	鉢		器高 5.1	外面：条痕 内面：不明	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元2式	
57−2	38	SK01	1層	縄文土器			器高 5.2	外面：縄文・貝殻圧痕 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元2式	
57−3	38	SK01	1層	縄文土器			器高 3.1	外面：縄文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：灰白色 焼成：良好	船元2式	
59−1	38	SK02	1層			13	底径 3.1	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳白色 焼成：良好	陸前Z併行	
59−2	38	SK02	1層	縄文土器	深鉢		器高 2.8	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	粗製A	
61−1	38	SK04	1層	縄文土器	深鉢？		器高 4.1		外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	不明	

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	形式	備考
63−1	38	SK05A	3層	縄文土器			器高 3.0	外面：縄文 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	不明	
66−1	38	SK06	1層	縄文土器	深鉢		器高 5.1	外面：条痕 内面：不明	外面：黒褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	粗製B	口縁部
66−2	38	SK06	1層	縄文土器	深鉢		器高 6.4	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	粗製A	外面に煤付着？
66−3	38	SK06	1層	縄文土器	鉢		器高 2.9	外面：縄文・条痕 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元系	
66−4	38	SK06	1層	縄文土器	深鉢		器高 6.0	外面：押型文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	黄島式	
66−5	38	SK06	1層	縄文土器	浅鉢	8	口径 13.8 器高 1.7	外面：ナデ・ミガキ 内面：ミガキ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		内面に黒斑あり
66−6	38	SK06	1層	縄文土器			器高 3.5	外面：不明 内面：不明	外面：赤褐色 内面：赤褐色 焼成：良好	不明	口縁部から剥離したものか？ 外面に刺突文
66−7	38	SK06	1層	弥生土器	甕		器高 2.5	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		外面に煤付着
66−8	38	SK06	1層	弥生土器	壺		器高 3.0	外面：ミガキ 内面：ミガキ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
66−9	38	SK06	1層	弥生土器	甕	10	器高 3.2	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	小谷式	
66−10	38	SK06	1層	弥生土器	器台		器高 2.8	外面：ナデ 内面：ケズリ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	小谷式	外面に赤色顔料が塗ってある
68−1	38	SK09A	1層	縄文土器			器高 4.8	外面：ナデ・二枚貝押圧痕・縄文 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元系	
68−2	38	SK09A	1層	縄文土器	深鉢		器高 4.9	外面：縄文 内面：不明	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元系	外面の所々赤褐色 わの下
68−3	38	SK09A	1層	縄文土器	鉢？		器高 3.2	外面：縄文 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
68−4	38	SK09A	1層	縄文土器	粗製深鉢		器高 6.7	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：乳白色 焼成：良好	粗製A	
68−5	38	SK09A	1層	縄文土器			器高 3.7	外面：ミガキ 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		穿孔
70−1	38	SK10	1層	縄文土器	鉢		器高 5.2	外面：縄文 内面：縄文・ナデ	外面：淡褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	船元2式	
70−2	38	SK10	1層	縄文土器	深鉢		器高 3.6		外面：淡褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	船元2式	
70−3	38	SK10	1層	縄文土器			器高 3.6	外面：縄文 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	船元系	
70−4	38	SK10	1層	縄文土器	深鉢		器高 4.3	外面：条痕 内面：不明	外面：淡赤褐色 内面：暗褐色 焼成：良好		
70−5	38	SK10	1層	縄文土器	鉢		器高 3.5	外面：条痕 内面：不明	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元式併行	
70−6	38	SK10	1層	縄文土器	鉢		器高 3.2	外面：条痕 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元式併行	
70−7	38	SK10	1層	土師器	甕		器高 3.0	外面：櫛描き文 内面：不明	外面： 内面： 焼成：良好	小谷式	
79−1	36	SB04	1層	弥生土器	甕		器高 5.4	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	Ⅲ	外面に煤付着
79−2	36	SB04	1層	弥生土器	甕or壺		器高 5.7	外面：ナデ・ミガキ 内面：刷毛目・ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	Ⅲ	外面に煤付着
79−3	36	SB04	1層	弥生土器	壺		器高 3.2	外面：不明・凸帯 内面：不明	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：不良		
79−4	36	SB04	1層	弥生土器	甕		器高 3.3	外面：ナデ 内面：ナデ・刷毛目	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		
79−5	36	SB05	2層	弥生土器	甕	10	口径 19.0 器高 1.5	外面：ナデ・凹線 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	Ⅲ−2 〜 Ⅳ−1	
79−6	36	SB05	2層	弥生土器	甕or壺	5	器高 5.1	外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	Ⅲ〜Ⅳ	

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率（%）	法量（cm）	調整・文様	色調・焼成	形式	備考
81－1	38	K5 土器溜まり		縄文土器	浅鉢	10	口径　22.0 器高　4.6	外面：ミガキ 内面：ミガキ	外面：乳褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	福田K2併行	
81－2	38	K5 土器溜まり		縄文土器			器高　5.2	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：赤褐色 内面：赤褐色 焼成：良好		
81－3	38	K5 土器溜まり		縄文土器	浅鉢		胴部径　26.2 器高　8.0	外面：ナデ 内面：ナデ・貝殻条痕	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：不良	福山K2併行	
81－4	33	K5 土器溜まり		縄文土器	鉢	100	底径　8.9 器高　3.7	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：黄褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	福田K2併行	
81－5	33	K5 土器溜まり		縄文土器	浅鉢	40	口径　20.0 器高　11.8	外面：ミガキ 内面：ミガキ（下部は摩滅のため不明）	外面：黄褐色 内面：乳褐色 焼成：不良	福田K2併行	
82－1	33	K5 土器溜まり		縄文土器	浅鉢	20	口径　15.2 器高　8.1	外面：ミガキ・刻目 内面：ミガキ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	福山K2併行	
82－2	38	K5 土器溜まり		縄文土器			器高　4.0	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	福山K2併行	
82－3	33	K5 土器溜まり		縄文土器	深鉢	25	口径　34.4 器高　23.9	外面：ミガキ 内面：ミガキ	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	福田K2併行	
82－4	38	K5 土器溜まり		縄文土器	浅鉢		器高　8.5	外面：ミガキ・沈線 内面：ミガキ	外面：淡赤褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	福田K2併行	
82－5	38	K5 土器溜まり		縄文土器			器高　5.3	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	福山K2併行	
82－6	38	K5 土器溜まり		縄文土器	浅鉢		器高　4.2	外面：ナデ・刻目 内面：ナデ	外面：赤褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		
82－7	38	K5 土器溜まり		縄文土器			器高　2.8	外面：ミガキ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
83－1	39	K5 土器溜まり		縄文土器	粗製深鉢	20	口径　33.9 器高　21.2	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	粗製A	
83－2	39	K5 土器溜まり		縄文土器	深鉢	20	器高　15.7	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	粗製C	
83－3	39	K5 土器溜まり		縄文土器	粗製深鉢		器高　8.6	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	粗製C	
83－4	39	K5 土器溜まり		縄文土器	深鉢		器高　13.2	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	粗製A	
84－1	39	K5 土器溜まり		縄文土器	粗製深鉢	40	口径　28.5 器高　17.7	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	粗製A	
84－2	39	K5 土器溜まり		縄文土器	深鉢		器高　12.2	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	粗製A	
84－3	39	K5 土器溜まり		縄文土器	深鉢	30	胴部径　34.2 器高　29.6	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	粗製A	
85－1	39	K5 土器溜まり		縄文土器	粗製深鉢	30	口径　34.0 器高　19.4	外面：板状工具によるナデ 内面：板状工具によるナデ	外面：暗褐色 内面：赤褐色 焼成：不良	粗製A	
85－2	39	K5 土器溜まり		縄文土器	粗製深鉢		口径　37.1 器高　18.5	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	粗製A	
85－3	39	K5 土器溜まり		縄文土器	粗製深鉢	40	口径　28.3 器高　24.1	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	粗製A	
86－1	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高　7.8	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	高山寺式	
86－2	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高　3.9	外面：楕円押型文 内面：摩滅のため不明	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	高山寺式	
86－3	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高　10.0	外面：楕円押型文 内面：摩滅のため不明	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	高山寺式	
86－4	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高　6.5	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	高山寺式	
86－5	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高　3.1	外面：楕円押型文 内面：ナデ・突帯	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	高山寺式	
86－6	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高　5.8	外面：楕円押型文 内面：ナデ・沈線	外面：淡褐色 内面：褐色 焼成：良好	高山寺式	
86－7	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高　7.1	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	高山寺式	

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・文様	色調・焼成	形式	備考
86−8	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高 4.8	外面：楕円押型文 内面：ナデ・凹線	外面：乳褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	高山寺式	
86−9	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高 2.6	外面：楕円押型文 内面：ナデ・突帯	外面：褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	高山寺式	
86−10	40	A5	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高 2.6	外面：ミガキ 内面：刻目・沈線・ミガキ	外面：黄褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	彦崎K2式	
86−11	40	A4	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高 2.8	外面：ミガキ 内面：刻目・沈線・板状工具によるナデ	外面：黒褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	彦崎K2式	
86−12	40	A4	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高 3.9	外面：沈線・ミガキ 内面：沈線・ミガキ	外面：暗褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	岩田4類〜滋賀里3a併行	
86−13	40	A4	黒色土層	縄文土器	浅鉢	20	口径 12.8 器高 2.4	外面：ミガキ 内面：沈線・ナデ	外面：黄褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	彦崎K2式	
86−14	40	A5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 2.7	外面：ナデ・刻目突帯 内面：ナデ	外面：乳白色 内面：乳褐色 焼成：良好	前池〜沢田併行	
86−15	40	A5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 3.8	外面：ナデ・刻目突帯 内面：板状工具によるナデ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	前池〜沢田併行	
86−16	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高 3.1	外面：ナデ・刺突文 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	月崎下層併行	
86−17	40	A4	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高 6.8	外面：刻目・縄文・刻目突帯 内面：縄文・ナデ	外面：黄褐色 内面：乳褐色 焼成：不良	船元2式	
86−18	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高 3.8	外面：沈線・C字文 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	磯ノ森式	
86−19	40	A4	黒色土層	縄文土器			器高 4.1	外面：刻目・沈線・C字文 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	磯ノ森式	
86−20	40	A5	黒色土層	縄文土器			器高 2.6	外面：縄文・突帯 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	彦崎Z2式	
86−21	40	A5	黒色土層	縄文土器			器高 4.4	外面：縄文・条痕 内面：ナデ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	里木3式	
86−22	40	A5	黒色土層	縄文土器			器高 4.3	外面：縄文・押引きC字文 内面：板状工具によるナデ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	船元系	
86−23	40	A5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 5.7	外面：縄文・爪印 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元2式	
86−24	40	A5	黒色土層	縄文土器	深鉢		底径 11.2 器高 4.1	外面：縄文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	波子式	
86−25	40	A5	黒色土層	弥生土器	甕		口径 9.4 器高 4.1	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：赤褐色 内面：赤褐色 焼成：良好	V−1	
86−26	40	A4	黒色土層	弥生土器	甕	14	口径 15.0 器高 4.1	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	V−1	
86−27	33	A4	黒色土層	弥生土器	甕	80	口径 16.2 器高 5.7	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：暗褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	大木式	黒斑あり
87−1	47	B4	黒色土層	縄文土器			器高 1.9	外面：山形押型文 内面：不明	外面：暗褐色 内面：暗褐色 焼成：不良	黄島式	
87−2	41	B4	黒色土層	縄文土器			器高 2.6		外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	中津式	
87−3	41	B4	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高 5.8	外面：縄文・爪痕 内面：縄文・ナデ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	船元1式	
87−4	41	B4	黒色土層	縄文土器	粗製深鉢		器高 9.7	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	粗製A	
87−5	41	B4	黒色土層	縄文土器	深鉢	20	口径 26.8 器高 8.4	外面：磨消縄文・ミガキ 内面：ミガキ	外面：黒褐色 内面：赤褐色 焼成：良好	元住吉山Ⅰ式	
87−6	41	B4	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 7.6	外面：縄文・沈線 内面：板状工具によるナデ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元4式	キャリパー口縁か？ 深鉢の胴部
87−7	41	B4	黒色土層	縄文土器			器高 5.3	外面：ケズリ・ナデ 内面：板状工具によるナデ	外面：黒褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	岩田4類〜滋賀里3a併行	
87−8	41	B4	黒色土層	縄文土器			器高 3.3	外面：縄文・凹線・ナデ 内面：不明	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	中津式	
87−9	41	B4	黒色土層	縄文土器			器高 4.3	外面：縄文・凹線・ナデ 内面：不明	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	中津式	

挿図番号	写真番号	出土地点	出土層位	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	型式	備考
87−10	41	B4	黒色土層	縄文土器			器高 2.0	外面：ミガキ 内面：ミガキ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	沢山〜突帯文土器終末	
87−11	33	B4	黒色土層	弥生土器	甕or壺	90	底径 5.4 器高 5.0	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目	外面：淡褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	入来式	
87−12	33	B4	黒色土層	弥生土器	甕or壺	90	底径 5.0 器高 3.2	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳白色 焼成：良好		
87−13	41	B4	黒色土層	弥生土器	甕	30	底径 5.2 器高 3.3	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：暗褐色 焼成：良好		
87−14	41	B4	黒色土層	弥生土器	甕or壺	14	底径 7.5 器高 2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：褐色 焼成：良好		
87−15	33	B4	黒色土層	弥生土器	高坏		底径 10.4 器高 2.7	外面：ナデ・凹線 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	Ⅴ−1	
87−16	41	B4	黒色土層	弥生土器	甕	30	口径 18.6 器高 4.4	外面：ナデ・凹線 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	Ⅴ−1	
87−17	33	B4	黒色土層	弥生土器	甕	40	口径 17.8 器高 4.7	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	Ⅴ−1	
87−18	41	B4	黒色土層	弥生土器	甕		器高 5.3	外面：ナデ・凹線 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳褐色 内面：乳白色 焼成：良好	Ⅳ−2	
87−19	41	B4	黒色土層	土師器	器台	30	器高 4.6	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	小谷式	
87−20	41	B4	黒色土層	土師器	器台	30	頸部径 7.6 器高 4.7	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	小谷式	
88−1	47	B5		縄文土器			器高 2.3	外面：山形押型文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	黄島式	
88−2	41	B5		縄文土器	深鉢？		器高 2.7	外面：刻目・刻目突帯・二枚貝条痕 内面：刻目・ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	前池〜沢田併行	
88−3	41	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 2.6	外面：ナデ・刻目突帯・板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：不良	前池〜沢田併行	
88−4	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.1	外面：刻目・二枚貝条痕・沈線・刺突 内面：ミガキ	外面：赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	轟B〜谷式	
88−5	41	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 5.5	外面：刻目・刻目突帯・板状工具によるナデ 内面：二枚貝条痕	外面：乳褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	前池〜沢田併行	
88−6	41	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 3.7	外面：縄文 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元系	
88−7	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 2.9	外面：ミガキ・擬似縄文・沈線 内面：ミガキ	外面：暗褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	彦崎K2式	
88−8	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.2	外面：凹線文・瘤貼り付け 内面：凹線文	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	月崎下層併行	
88−9	41	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 15.7	外面：刻目・ナデ・沈線・板状工具によるナデ 内面：二枚貝条痕	外面：黒褐色 内面：灰白色 焼成：良好	緑草式	
88−10	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.3	外面：ミガキ・凹線 内面：二枚貝条痕	外面：乳白色 内面：淡褐色 焼成：良好	宮滝式	
88−11	41 47	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 1.7	外面：二枚貝条痕 内面：不明	外面：淡褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	孔列土器Ⅲ類	
88−12	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.7	外面：二枚貝条痕・刺突文・ナデ 内面：二枚貝条痕	外面：橙褐色 内面：暗褐色 焼成：不良	船元系	
88−13	41 47	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 4.8		外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	孔列土器Ⅲ類	
88−14	41 47	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 2.5	外面：二枚貝条痕 内面：二枚貝条痕	外面：乳褐色 内面：乳白色 焼成：良好	孔列土器Ⅰ類	
88−15	41 47	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.8	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：橙褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	孔列土器Ⅲ類	
88−16	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.6	外面：縄文・押引状沈線 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	大蔵上併行	
88−17	41 47	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 4.8	外面：ナデ・沈線 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	孔列土器Ⅲ類	
88−18	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.0	外面：ナデ・C字文 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元Ⅰ式	

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率(%)	法量(cm)	文様・技法	色調・焼成	形式	備考
88−19	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 5.0	外面：C字文・縄文 内面：板状工具によるナデ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	船元系	
88−20	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.4	外面：縄文 内面：縄文・ナデ	外面：暗褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	船元1式	
88−21	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.4	外面：縄文・C字文 内面：刻目・縄文・ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元2式	
88−22	41	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 5.1	外面：縄文・C字文・刻目突帯 内面：縄文・ナデ	外面：乳褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元2式	
88−23	41	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 3.5	外面：斜行沈線・縄文 内面：刻目・縄文・ナデ	外面：黒褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	船元2式	
88−24	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.4	外面：縄文・刺突文 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	船元系	
88−25	41	B5	黒色土層	縄文土器			器高 2.3	外面：刻目・縄文 内面：刻目・縄文・ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元1式	
88−26	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.3		外面：黄褐色 内面：黄褐色 焼成：不良	船元2式	
88−27	42	B5	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高 3.1	外面：刻目・C字刻目突帯・縄文 内面：刻目・縄文・ナデ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元1式	
88−28	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.0	外面：斜行沈線・C字刻目・縄文 内面：C字押引・ナデ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	船元2式	
88−29	42	B5	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高 3.1	外面：刻目・縄文・押引 内面：刻目・縄文・ナデ	外面：乳褐色 内面：赤褐色 焼成：良好	船元1式	
88−30	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.2	外面：ナデ・C字刺突器・縄文 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元系	
88−31	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.5	外面：ミガキ・擬似縄文・沈線 内面：ミガキ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	彦崎K2式	巻貝による施文
88−32	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.0	外面：ミガキ・縄文・沈線 内面：ナデ・ミガキ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	四元式	
88−33	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.6	外面：ミガキ・沈線 内面：ミガキ	外面：乳褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	縁帯文系	
88−34	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.1	外面：ミガキ・刻目・沈線 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	縁帯文系	
88−35	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.7	外面：磨消縄文 内面：不明	外面：淡赤褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	中津式	
88−36	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.5	外面：縄文・沈線・ナデ 内面：ナデ	外面：黄褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	元住吉山1式	
88−37	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 2.4	外面：ミガキ・縄文・沈線・刺突・凹線 内面：ミガキ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	彦崎K2式	
88−38	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 5.7	外面：ナデ・刻目・二枚貝条痕 内面：ナデ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：不良	滋賀里3a式	
88−39	42	B5	黒色土層	縄文土器	粗製深鉢		器高 5.6	外面：板状工具によるナデ 内面：板状工具によるナデ	外面：黒褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	粗製D	
89−1	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.0	外面：ナデ・凹線・縄文 内面：ケズリ	外面：暗褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	彦崎K1式	
89−2	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 3.1		外面：乳褐色 内面：暗褐色 焼成：不良	滋賀里3a式	
89−3	42	B5	黒色土層	縄文土器	浅鉢	10	口径 20.7 器高 2.6	外面：ミガキ 内面：ミガキ・沈線	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	前池～突帯文土器終末併行	
89−4	42	B5	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高 2.5	外面：ミガキ 内面：ミガキ	外面：黒褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	前池～突帯文土器終末併行	
89−5	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.0	外面：ミガキ 内面：ミガキ・沈線	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	黒色磨研	穿孔
89−6	42	B5	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高 3.6	外面：ミガキ・沈線 内面：板状工具によるナデ	外面：黄褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	西日本磨研系	
89−7	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 4.7	外面：ナデ・刻目 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	黒土B1式	
89−8	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高 2.2	外面：ミガキ 内面：ミガキ	外面：暗褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	西日本磨研系	

挿図番号	図版番号	出土地点	出土層位	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調整・技法	色調・焼成	形式	備考
89−9	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高　5.5	外面：ミガキ・沈線・刺突列点 内面：ミガキ	外面：黒褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	黒色磨研	
89−10	42	B5	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高　3.3	外面：ミガキ 内面：ミガキ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	岩田4類～滋賀里3a併行	
89−11	42	B5	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高　2.3	外面：ミガキ・沈線 内面：ミガキ	外面：乳褐色 内面：乳白色 焼成：不良	岩田4類～滋賀里3a併行	
89−12	42	B5	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高　2.4	外面：ミガキ 内面：ミガキ	外面：乳白色 内面：乳褐色 焼成：良好	前池～突帯文土器終末併行	
89−13	42	B5	黒色土層	縄文土器	浅鉢		器高　4.0	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	岩田4類～滋賀里3a併行	板状工具によるナデ
89−14	42	B5	黒色土層	縄文土器			器高　3.2	外面：ミガキ・突帯 内面：ミガキ	外面：乳褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	黒色磨研	
89−15	42	B5	黒色土層	縄文土器					外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好		
89−16	43	B5	黒色土層	縄文土器	深鉢？	20	底径　9.8 器高　5.3	外面：縄文・ナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元系	
89−17	43	B5	黒色土層	縄文土器			底径　6.1 器高　2.3	外面：ミガキ 内面：ミガキ	外面：淡褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	谷尻式	
89−18	43	B5	黒色土層	縄文土器			底径　6.6 器高　2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	押型D	
89−19	43	B5	黒色土層	縄文土器		30	底径　10.2 器高　2.5	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	押型D	
89−20	43	B5	黒色土層	縄文土器			器高　2.2	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	押型D	
89−21	43	B5	黒色土層	縄文土器		20	底径　12.0 器高　2.0	外面：板状工具によるナデ・ナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	押型A	
89−22	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕	20	口径　26.7 器高　7.3	外面：ナデ・凹線・刺突 内面：ナデ・刺突	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	Ｉ−4 or Ⅱ−1	外面に煤付着
89−23	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕or壺		器高　3.4	外面：刻目・ナデ・凹線 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳白色 焼成：良好	Ｉ−4 or Ⅱ−1	
89−24	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕		器高　3.8	外面：ナデ・櫛描文 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：暗褐色 焼成：不良	Ｖ−1	
89−25	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕	25	口径　11.5 器高　3.5	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・ケズリ	外面：乳白色 内面：乳白色 焼成：良好	Ｖ−1	
89−26	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕	14	口径　19.0 器高　3.8	外面：ナデ・凹線 内面：ナデ・ケズリ	外面：褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	Ｖ−1	
89−27	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕	20	口径　11.2 器高　3.3	外面：ナデ・凹線 内面：ミガキ・ナデ・ケズリ	外面：赤褐色 内面：赤褐色 焼成：良好	Ｖ−1	内外面ともに赤色顔料 外面に煤付着
89−28	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕	13	口径　14.6 器高　3.1	外面：ナデ・凹線 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	Ｖ−1	
89−29	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕	8	口径　15.8 器高　4.8	外面：ナデ 内面：ナデ・ケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	大東式	
89−30	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕	8	口径　21.0 器高　4.6	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	大木式	
89−31	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕or壺	10	口径　16.6 器高　3.5	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	Ｖ−1	外面に煤付着、赤色顔料 孔あり
89−32	42	B5	黒色土層	弥生土器		70	底径　5.6 器高　2.3	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：赤褐色 内面：黒褐色 焼成：良好		底部に焼成前に穿孔
89−33	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕or壺	25	底径　4.4 器高　1.8	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：褐色 内面：黒褐色 焼成：良好		
89−34	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕or壺		器高　2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好		
89−35	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕or壺	17	底径　11.4 器高　3.5	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
89−36	42	B5	黒色土層	弥生土器	甕or壺	20	底径　6.4 器高　1.1	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：灰黒褐色 焼成：良好		
89−37	42	B5	黒色土層	土師器	甕	10	口径　20.6 器高　4.9	外面：ナデ・刷毛目 内面：ナデ・刷毛目・ケズリ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	須恵器併行	

掲載番号	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	残存率(%)	法量(cm)	成形・技法	色調・焼成	形式	備考
90−1	43	B6	黒色土層	縄文土器			器高 7.9	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	黄島式	
90−2	43	B6	黒色土層	縄文土器			器高 5.3	外面：楕円押型文 内面：摩滅のため不明	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	高山寺式	
90−3	43	B6	黒色土層	縄文土器			器高 4.7	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：灰褐色 焼成：良好	高山寺式	
90−4	43	B6	黒色土層	縄文土器	深鉢		器高 7.4	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	黄島式	
90−5	43	B6	黒色土層	縄文土器			器高 5.9	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	高山寺式	
90−6	43	B6	黒色土層	縄文土器			器高 6.6	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：灰褐色 焼成：良好	高山寺式	
90−7	43	B6	黒色土層	縄文土器			器高 3.8	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：黄褐色 焼成：良好	高山寺式	
90−8	43	B6	黒色土層	縄文土器			器高 6.5	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：灰褐色 焼成：良好	高山寺式	
90−9	43	B6	黒色土層	縄文土器			器高 3.2	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：灰褐色 焼成：良好	高山寺式	
90−10	43	B6	黒色土層	縄文土器			器高 5.1	外面：楕円押型文 内面：ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	高山寺式	
90−11	44	B6	黒色土層	縄文土器	粗製深鉢		器高 5.8	外面：ナデ・板状工具によるナデ 内面：ナデ・板状工具によるナデ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	粗製C	
90−12	44	B6	黒色土層	縄文土器	粗製深鉢		器高 5.7	外面：板状工具によるナデ 内面：板状工具によるナデ	外面：黒褐色 内面：赤褐色 焼成：良好	粗製C	
90−13	44	B6	黒色土層	縄文土器	粗製深鉢		器高 4.6	外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	粗製A	
90−14	44	B6	黒色土層	縄文土器	粗製深鉢		器高 4.4	外面：二枚貝条痕 内面：二枚貝条痕	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	粗製B	
90−15	44	B6	黒色土層	縄文土器	粗製深鉢		器高 6.9	外面：板状工具によるナデ 内面：板状工具によるナデ	外面：暗褐色 内面：赤褐色 焼成：良好	粗製A	
90−16	44	B6	黒色土層	縄文土器			器高 4.5	外面：ミガキ・押引 内面：ミガキ	外面：黒褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	岩田4類 〜福竹根 3a併行	
90−17	44	B6	黒色土層	縄文土器			器高 2.9	外面：縄文・爪形 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	船元2式	
90−18	44	B6	黒色土層	縄文土器			器高 2.5	外面：縄文・爪形 内面：爪形・縄文・ナデ	外面：乳褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元1式	
90−19	44	B6	黒色土層	縄文土器			器高 2.2	外面：縄文・凹線 内面：ナデ	外面：灰白色 内面：乳白色 焼成：良好	船元3式	
90−20	44	B6	黒色土層	縄文土器			器高 2.9	外面：ミガキ 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	西日本磨研系	焼成後に穿孔
90−21	44	B6	黒色土層	縄文土器			器高 7.8	外面：凹線・刺突・波状文 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：淡褐色 焼成：良好		
90−22	44	B6	黒色土層	弥生土器			器高 4.8	外面：ナデ・凹線・刺突 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	Ⅳ	
90−23	46	C6	黒色土層	縄文土器			器高 3.2	外面：ナデ・貝殻押印・縄文 内面：縄文・ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色 焼成：良好	船元1式	
90−24	46	C6	黒色土層	縄文土器			器高 3.6	外面：縄文・爪形 内面：縄文・ナデ	外面：淡赤褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	船元2式	
90−25	46	C6	黒色土層	縄文土器			器高 5.7	外面：突帯・縄文・爪形 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	大歳山式	
90−26	46	C6	黒色土層	縄文土器			器高 3.7	外面：縄文・爪形・ナデ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：暗褐色 焼成：良好	大歳山式	
90−27	46	C6	黒色土層	縄文土器			器高 3.2	外面：ナデ・貝殻押印 内面：ナデ	外面：乳褐色 内面：黒褐色 焼成：良好	前池〜沢 田併行	
90−28	46	C6	黒色土層	縄文土器			器高 5.1	外面：縄文・爪形 内面：縄文・ナデ	外面：黒褐色 内面：淡褐色 焼成：良好	船元1式	
90−29	33	B6	黒色土層	縄文土器			器高 3.1	外面：ナデ・板状工具によるナデ 内面：ナデ	外面：淡褐色 内面：乳褐色 焼成：良好	西日本磨研系	